

# 平凡

二葉亭四迷

青空文庫



私は今年ことし三十九になる。人世じんせい五十が通相場とおりそうばなら、まだ今日きよ明日うあす穴へ入ろうとも思わぬが、しかし未来は長いようでも短いものだ。過去つて了えば実に呆氣あッけない。まだまだと云つてる中うちにいつしか此世ひまの隙が明いて、もうおさらばという時節が来る。其時になつて幾ら足搔あがいたつて藻搔もがいたつて追付おツつかない。覚悟をするなら今の中うちだ。

いや、しかし私も老込んだ。三十九には老込みようがチト早過ぎるといふ人も有ろうが、氣の持もち方かたは年よりも老ふけた方が好い。

それだと無難だ。

如何して此様な老人じみた心持になつたものか知らぬが、強

ち苦勞をして来た所為では有るまい。私位の苦勞は誰でもしてい

る。尤も苦勞しても一向苦勞に負けぬ何時迄も元氣な人もある。

或は苦勞が上<sup>うわすべ</sup><sup>り</sup>をして心に浸みないように、何時迄も稚氣

の失せぬお坊さん質<sup>だち</sup>の人もあるが、大抵は皆私のように苦勞に負

げて、年よりは老込んで、意久地なく所帯染みて了い、役所の

歸りに鮭<sup>しやけ</sup>を二<sup>ふた</sup>切<sup>き</sup>竹の皮に包んで提<sup>さ</sup>げて来る氣になる、それが普

通だと、まあ、思つて自ら慰めている。

もう斯<sup>こ</sup>うなると前途が見え透く。もう如何様に藻搔<sup>もが</sup>たとて駄目

だと思ふ。残念と思わぬではないが、思つたとて仕方がない。そ

れよりは其隙そのひまで内職の賃ちんやく訳の一枚も余計にして、もう、これ、冬が近いから、家内中に綿入れの一枚も引張ひっぱらせる算段を為しなければならぬ。

もう私は大した慾もない。どうか忤せがれが中学を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい、其迄に小金の少しも溜めて、いつ何時なんどき私に如何どんな事が有つても、妻子が路頭に迷わぬ程にして置きたいと思うだけだが、それが果して出来るものやら、出来ぬものやら、甚だ覚束おぼつかないので心細い……

が、考えると、昔は斯うではなかつた。人並に血氣さかんは壮さかんだつたから、我より先に生れた者が、十年二十年世の塩を踏むと、百人が九十九人まで、皆みんなじめじめと所帯しよたいじ染みて了うのを見て、意い久く

地の無い奴等だ。そんな平凡な生活をする位なら、寧そ首でも縊くつて死じン了しまえ、などと蔭では嘲うけつたものだだったが、嘲うけつていうちる中に、自分もいつしか所しよ帯たい染じみて、人に嘲うけられる身の上になつて了しまつた。

こうなつて見ると、浮世は夢の如しとは能よく言いつたものだと熟つくく々く思う。成程人の一生は夢で、而も夢中に夢とは思おわない、覚おめて後のち其のちと氣が附つく。氣が附ついた時には、夢はもう我を去いつて、せんりぼんり千里万里を相隔あつてている。もう如何どうする事ことも出来ぬ。

もう十年早く氣が附ついたらとは誰たれしも思おもう所ところだろうが、皆判わでお捺おしたように、十年後ごれて氣が附つく。人生は斯かうしたものだから、今私共わを嗤わう青年達せいねんたちも、聽やががては矢張やっぱり同おじ様さまに、後のちの青年達せいねんたちに嗤わら

われて、残念がつて穴に入る事だろうと思つと、私は何となく人間というものが、果敢はかないような、味気ないような、妙な気がして、泣きたくなる……

あッ、はッ、は！ ……いや、しかし、私も老込んだ。こんな愚痴が出る所を見ると、愈老いよいよ込んだに違いない。

## 二

老込んだ証拠には、近頃は少し暇だと直ぐ過去を憶おも出す。いや憶おも出しても一向憶おも出し榮ぼえのせぬ過去で、何一つ仕出来しでかした事もない、どころじゃない、皆碌でもない事ばかりだ。が、それ

でいて、其その失敗の過去が、私に取っては何処か床しい処がある、後悔はらわたた慚愧腸を断つ想おもいが有りながら、それでいて何となく心を惹ひきつけられる。

日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢そばの側そばで徒然つねんとしてしていると、半生はんせいの悔しかった事、悲しかった事、乃至ないし

嬉しかった事が、玩具おもちゃのカレードスコープを見るように、紛ごたご

々たと目まぐるしく心の上面うわつらを過ぎて行く。初は面白半分たに目

を瞑ねむつて之むかに対むかつている中うちに、いつしか魂たましいが藻脱もぬけて其中へ紛れ

込んだように、恍惚うつとりとして暫く夢ゆめの境うつつを迷っていると、

「今日は！ 柵屋ますやでございます！」

と、ツイ障子ひとえ一重ひとえ其処の台所口で、頓狂な酒屋の御用の声がす

る。これで、私は夢の覚めたような面かおになる。で、ぼやけた声で、  
「まず好かつたよ。」

酒屋の御用を逐おいかえ返してから、おお、斯うしてもいられん、と  
ひとりごと  
独言を言つて、机を持出して、生計くらしの足しの安翻訳を始める。

外国の貯蓄銀行の条例か何ぞに、絞つたら水の出そうな頭を散々  
悩ませつつ、一枚二枚は余所目よそめを振らず一心に筆を運ぶが、其そのう  
中に曖あやふや昧あやふやな処ところに出会でつくわしてグツと詰ると、まず一服と旧式の  
煙管きせるを取上げる。と、又忽然として懐かしい昔が眼前に浮ぶから、  
不覚ついで其うつつに現を脱かし、肝腎の翻訳がお留守になつて、晩迄に二十  
枚は仕上げる積つもりの所を、十枚も出来ぬ事が折々ある。

こうどうも昔ばかりを憶出していた日には、内職の邪魔になる

ばかりで、卑さもしいようだが、錢ぜににならぬ。寧いっそのくされ、思う存  
 分書せんだついて見よか、と思つたのは先達せんだつての事だったが、其後そのご——  
 矢張やっぱり書く時節が到来したのだ——内職の賃ちんが弗ふつと途切れた。  
 此このひま暇あすを遊んで暮すは勿体ない。私は兎に角書いて見よう。

実は、極ないないく内々の話だが、今でこそ私は腰弁当と人の数にも  
 算かずまえられぬ果敢はかない身の上だが、昔は是れでも何の某なにがしといや、  
 或るサークルでは一ちよつと寸名の知れた文士だった。流石さすがに今でも文  
 壇むかしなじみに昔馴染むかしなじみが無いでもない。恥を忍んで泣付なみいて行つたら、随  
 分一肩入れて、原稿を何処かの本屋へ嫁かたづけて、若なにがし干かに仕て呉  
 れる人が無いとは限らぬ。そうすりや、今年の暮は去年のような  
 事もあるまい。何も可愛かわいい妻つまこ子の為だ。私は兎に角書いて見よう。

さて、題だが……題は何としよう？ 此奴には昔から附つけ倦あくんだものだツけ……と思案の末、礎はたと膝うを拊うつて、平凡！ 平凡に限る。平凡な者が平凡な筆で平凡な半生を叙するに、平凡という題は動かぬ所だ、と題きまが極まる。

次には書方だが、これは工夫するがものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の経験した愚にも附いかぬ事を、聊いさかも技巧を加えず、有ありの儘に、だらだらと、牛の涎よだれのように書くのが流行はやるそうはだ。好いい事が流行はやる。私わも矢張やっばり其で行く。

で、題は「平凡」、書方は牛の涎よだれ。

さあ、是これからが本ほん文もんだが、此これこらで回を改めたが好よかろうと思おう。

## 三

私は地方生れだ。戸籍を並べても仕方がないから、唯某県の某市として置く。其処で生れて其処で育つたのだ。

子供の時分の事は最う大抵忘れて了つたが、不思議なもので、覚えてゐる事だと、はつきり判然と昨日きのうの事のように想われる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染付しみついて忘れられまいと思うのは十の時死別れた祖母の面かおだ。

今でも目をねむ瞑ると、直ぐまじまじ顕然と目の前に浮ぶ。面長おもながの、老人だから無論皺しわは寄つていたが、締つた口元で、段鼻で、なかなか

か上品な面相かおつきだったが、眼が大きな眼で、女には強過きつすぎる程けん權が有つて、古屋の——これが私の家の姓うちだ——古屋の隱居の眼と  
 いったら、随分評判の眼だったそうだ。成程然ういえば、何か氣  
 に入らぬ事が有つて祖母が白眼しろめでジロリと睨にらむと、子供心にも何  
 だか無氣味だったような覺おぼえがまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云う。祖母が矢張り其やつぱだった。全  
 く眼色めつきのような氣象で、勝氣で、鋭くて、能よく何かおとこさまに氣の附く、  
 口も八丁手も八丁という、一口に言えば男勝り……まあ、そ  
 ういった質たちの人だったそうなの、——私は子供の事で一向夢中だつ  
 たが。

生長後親類などの話で聞くと、それというが幾分か境遇の然ら

しめた所も有つたらしい——というのは、早く祖父に死なれて若い時から後家を徹して来た。後家という者はいつの世でも兎角人に影かげぐち口言れ勝の、割の悪いものだから、勝気の祖母はこれが悔しくて堪たまらない。それで、何の、女でこそあれ、と気を張る。気を張て油断をしなかつたから、一生人に後うしろゆび指を差されるような過失はなかつた代り、余り人に愛しもされずに年を取つて了つて、父の代となつた。

父は祖母とは全まるで違つていた。如何して此人の腹に此こん様な人と怪しまれる程の好人物で、面かおも薩張り似ていなかつた。大きな、笑うと目元に小皺こじわの寄る、豊ふっくり頬した如何にも愛嬌のある円顔で、形なりも大柄だつたが、何処か円味が有り、心も其通り角かどが無かつた。

快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さえ有れば近所を打ち歩き、大きな嚏を自慢にする程の罪のない人だった。祖父が矢張然うであつたと云うから、大方其氣象を受継いだのであろう。

父は此様な人だし、母は——私の子供の時分の母は、手拭を姉様冠りにして襷掛けで能くクレクレ働く人だった。其頃の事を誰に聞いても、皆阿母さんは能く辛抱なすつたとばかりで、其の他に何も言わぬから、私の記憶に残る其時分の母は、何時迄経つても矢張り手拭を姉様冠りにして、襷掛けで能くクレクレ働く人で、格別如何という人という事もない。

斯ういう家庭だったから、自然祖母が一家の実権を握っていた。

家内中の事一から十迄祖母の方寸さばに捌かれて、母は下女か何ぞの様に逐おいつか使われる。父も一向家事には関係しないで、形式的に相談を受ければ、好うがしよう、とばかり言っている。然う言っていないと、祖母の機嫌が悪い、面倒だ。

母方の伯父で在ざい方しかたで村長をしていた人があつた。如何どうしたのだから、祖母とは仲悪で、死後迄余り好くは言わなかつたが、何かの話の序ついでに、阿母おつかさんもお祖母ばあさんには随分泣されたものだよ、と私に言つた事がある。成る程折々母が物蔭で泣いていると、いつも元気な父が其時ばかりは困つた顔をして何か密ひそひそ々言つているのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂うお祖母ばあさんに泣かされていたのだつたかも知れぬ。

兎に角祖母は此通り気難かし家であつたが、その気難かし家の、死んだ後あとまで迄噂に残る程の祖母が、如何どういうものだから、私に掛ると、から意久地がなかつた。

## 四

何で祖母が私に掛ると、意久地が無くなるのだから、其は私には分らなかつた。が、兎に角意久地の無くなるのは事実で、評判の気難かし家が、如何どうにでも私の思う様になつて了う。

まず何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子は厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強求ねだ

るが、許されぬ。祖母に強<sup>ね</sup>求<sup>だ</sup>る、一寸<sup>ちよつと</sup>洩<sup>と</sup>る、首<sup>くび</sup>玉<sup>たま</sup>へ嚙<sup>かじ</sup>り付<sup>つ</sup>いて、ようようと二三度鼻声で甘<sup>あま</sup>垂<sup>た</sup>れる、と、もう祖母は海鼠<sup>なまこ</sup>の様になつて、お由<sup>よし</sup>——母の名だ——彼<sup>あんな</sup>様に言うもんだから、買つて来てお遣りよ、という。祖母の声掛りだから、母も不承々々起<sup>た</sup>つて、雨降<sup>あめふり</sup>でも私の口のお使に番傘<sup>かた</sup>傾<sup>かた</sup>げて出懸<sup>で</sup>けようとする。斯<sup>た</sup>うなると、流石<sup>さすが</sup>の父も最<sup>ま</sup>う笑<sup>わら</sup>つてばかりは居<sup>ゐ</sup>られなくなつて、小言<sup>こごな</sup>をいう。私が泣<sup>な</sup>く、祖母の機嫌<sup>きげん</sup>が悪い。

「此<sup>こ</sup>様<sup>ごん</sup>小<sup>こ</sup>さい者<sup>もの</sup>を其<sup>そん</sup>様<sup>な</sup>に苛<sup>いじ</sup>めて育<sup>い</sup>てて、若<sup>とし</sup>しか俊<sup>しん</sup>坊<sup>ぼう</sup>の様<sup>よう</sup>な事<sup>こと</sup>にでもなつたら、如何<sup>どう</sup>おしだ？ 可<sup>かわ</sup>哀<sup>い</sup>そうじやないか。」

というのが口切<sup>くち</sup>で、ボツリボツリと始める。俊坊<sup>しんぼう</sup>というのは私の兄<sup>あに</sup>で、私も虚<sup>うつ</sup>弱<sup>ろく</sup>だつたが、矢<sup>や</sup>張<sup>はり</sup>虚<sup>うつ</sup>弱<sup>ろく</sup>で、六<sup>む</sup>ツの時<sup>とき</sup>偷<sup>と</sup>られたのだ

そうだ。それも急性胃加答兒いカタルで儷とられたのだと云うから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を慎ませなかつたたたり祟たたりかも知れぬ。併し虚弱な兒こは大食させ付ると達者になると言われて、然うかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣が附かない。矢張やっぱり有触れた然う我儘をさせ付けては位ぐらいの所で切脱きりぬけようとする。祖母も其は然う思わぬでもないから、内ないない々ないない自分が無理だと思ふだけに激する、言葉が荒くなる。もう此上おこ憤おこらせると、又三日も物を言わなかつた拳句、ぷいと家うちを出て在ざいの親類へ行つた切歸きりらぬという騒も起りかねまじい景色なので、父は黙つて了う。母も黙つて出て行く。と、もう廿分も経たつと、私が両手に豆まめ振ねじを持つて雀こおど躍りして喜ぶ顔を、祖母が眺めてほくほくする事になつて了う。

斯うして私の小さいけれど際限の無い慾が、毎も祖母を透して  
 遂げられる。それは子供心にも薄々のみこめ了解るから、自然家内中で  
 私の一番好すきなのは祖母で、お祖母ばあさんお祖母さんと跡を慕う。何  
 となく祖母を味方のように思っているから、祖母が内に居る時は、  
 私は散々我儘を言つて、悪たれて、仕度したいざんまい三昧を仕散らす、留  
 守だと、萎靡いじけるのではないが、余程よつほど温順おとなしくなる。

其そのくせ癖私は祖母を小馬鹿にしていた。何となく奥底が見透みすかされ  
 るから、祖母が何と言つたつて、些ちっとも可怕こわくない。

それを又勝氣の祖母が何とも思っていない。反かえつて馬鹿にされる  
 のが嬉しいように、人が来ると、其話をして、憎い奴でございま  
 すと言つて、ほくほくしている。

両親も其は同じ事で、散々私に悩まされながら、矢張何とも思  
 っていない。唯影でお祖母ぼあさんにも困ると、お祖母ぼあさんの愚痴を  
 零こぼすばかり。

私は何方どっちへ廻つても、矢張好やっぱりい児こだ。

## 五

親馬鹿と一口に言うけれど、親の馬鹿程有難い物はない。祖母  
 は勿論、両親とても決して馬鹿ではなかつたが、その馬鹿でなか  
 った人達が、私の為には馬鹿になつて呉れた。勿体ないと言わず  
 には居られない。

私に何の取得がある？ 親が身の油を絞つて獲た金を、私の教

育おしげに惜気もなく掛けて呉れたのは、私を天晴あっぱれ一人前の男に仕立

てたいが為であつたらうけれど、私は今眇びようたる腰弁当で、浮世の

片影かたかげに潜んでゐる。私が生きていたとて、世に寸益もなければ、

死んだとて、妻子の外に損を受ける者もない。世間から見れば有

つても無くても好い余計な人間だ。財産なり、学問なり、技能な

り、何か人より余計に持つてゐる人は、其余計に持つてゐる物を

挟さしはさんで、傲然として空そらうそぶ嘯そぶいていても、人は皆其足下そつかに平伏す

る。私のように何も無い者は、生活に疲れて路傍みちばたに倒れて居て

も、誰たれひとり一人振向いて見ても呉れない。皆素通すどおりして々さっさと行つ

て了たまたまう。偶立止る者が有るかと思えば、熟つらつら視て、金持なら、う

う、貧乏人だと云う、学者なら、うう、無学な奴だと云う、詩人なら、うう、俗物だと云う、而してそう々きつさと行つて了う。平生へいぜい尤も親らしい面かおをして親友とか何とか云っている人達でも、斯うなると寄つて集つて、手て手で手に腹散々私の欠点を算え立てて、それで君は斯うなつたんだ、自業自得だ、諦め玉え々々と三度回え向して、彼方向あちらいて々さつさと行つて了う。私は斯ういう価値の無い平凡な人間だ。それを二つとない宝のように、人に後指を差されて迄も愛して呉れたのは、生れて以来こんにちまで今日迄何万人となく人に出会つたけれど、其そのうち中で唯祖母と父母あるばかりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言つて擯斥けなされるけれど、平凡な私の身に取つては是程有難い事はない。

若し私の親達に所謂いわゆる教育が有つたら、斯うはなかつたらう。

必ず、動物的の愛なんぞは何処かの隅に窃そつと蔵しまつて置き、例の靈

性の愛とかいうものを担かつぎ出だして来て、薄気味悪い上眼を遣つて、

天から振ぶらさが垂たつた曖あやふや昧な理想の玉を睨ながめながら、親の權威を笠

に被きぬ面かおをして笠かさに被きて、其処そこへ処ところは体裁よく私を或型へ推おしこ込こも

うと企企らむだらう。私は子供の天性の儘に、そんなふやけた人間

が、古ふるぼん本ほんなんぞと首くびツツ引びして、道楽こしら半分はんぶんに拵むえた、其癖むやみ無な暗くら

に窮屈きうくつな型かたなんぞへ入いる事を拒こんで、隙ひまを見て逃にげ出でそうとする。

どツどこいと取と捉とつまえて厭いとがる者を無理無体むりむたいに、シヤモを鶏籠とりかご

へ推お込こむように推お込こむ。私は型かたの中で出でようと藻搔もがく。知らん面かお

している。泣ないて、喚わめいて、引搔ひかいて出でようとする。知らん面かお

ている。欺して出ようとする。其手に乗らない。百計尽きて、仕  
 様がなないと観念して、性を矯め、情を矯め、生ながら木偶の様な  
 生氣のない人間になつて了えば、親達は始めて満足して、漸く善  
 良な傾向が見えて来たと言う。世間の所謂家庭教育というもの  
 は皆是ではないか。私は幸いにして親達が無教育無理想であつた  
 ばかりに、型に推込まれる憂目を免れて、野育ちに育つた。野育  
 ちだから、生来具有の百の欠点を臆面もなく暴け出して、所謂  
 教育ある人達を響感せしめたけれど、其代り子供の時分は、  
 今の様に矯飾はしなかつた。皆無教育な親達のお蔭だ。難  
 有たい事だしんと思う。真ありに難が有たい事だしんと思う。

しかし内うち拡ひろがりの外そと窄すぼまりと昔よから能く俗人が云う。哲人

の深遠な道理よりも、詩人の徹底した見識よりも、平凡な私共の耳には此方が入り易い。不思議な事には、無理想の俗人の言う事は皆活きて聞える。

私が矢張其内やッぱりうちひろが拈りの外そとすほ窄まりであつた。

## 六

内あわび中の鮑ツ貝、外へ出りやしじみ蜆ツ貝、と友達にはや囃されて、私は悔しがつて能く泣いたツけが、併し全く其通りであつた。

如何どういうものだか、内でお祖母ばあさんが舐なめるようにして可愛がつて呉れるが、一向嬉しくない。反かえつて蒼蠅うるさくなつて、出るなと制とめ

る袖の下を潜つて外へ駈出す。

しかし一步門外もんそとへ出れば、最う浮世の荒い風が吹く。子供の時分の其は、何処にも有る苛めいじツ児こという奴だ。私の近処にも其が居た。

勘ちゃんかんと云つて、私より二ツ三ツ年上で、獅子ツ鼻の、色の真黒けな児こだったが、斯ういうのに限つて乱暴だ。親仁おやしは郵便局の配達か何かで、大酒呑で、阿母おふくろはお引摺ひきずりと来ているから、常も鍵裂かぎやいぎだらけの着物を着て、踵かかとの切れた冷飯草履ひやめしぞうりを突掛け、片手に貧乏徳利を提げ、子供の癖に尾籠びろうな流行歌はやりうたを大声に唱うたいながら、飛んだり、跳ねたり、曲駈きよくがけというのを遣り遣り使つかに行く。始終使つかにばかり行つても居なかつたらうが、私は勘ちゃん

の事を憶出すと、何故だか常も其使に行く姿を想出す。

勘ちゃんの家では何も貰えぬから、人が何か持つてさえいれば、屹度欲しがつて、卒直にお呉ンなど云う。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭振を振ると、顛を突出して、好いよ好いよと云う。薄気味悪くなつて遣ろうとするが、最う受取らない。好いよ、呉れないと云つたね、好いよと、其許りを反覆して行つて了う。何となく気になるが、子供の事だ、遊びに奎けて忘れていると、何時の間にか勘ちゃん、使の歸りに何処かで蛇の死んだのを拾つて来て、窃と背後から忍び寄て、卒然ピシヤリと叩き付ける。ワツと泣き声揚げて此方は逃出す、其後姿を勘ちゃんは白眼で見送つて、「様ア見やがれ！」

私は散々此勘ちゃんに苛められた。初こそ悔しがって武者振り付いても見たが、勘ちゃんは喧嘩の名人だ。直と足搦掛けて推お倒したおして置いて、馬乗りに乗ってピシヤピシヤ打ぶつ。私にはお祖ば母あさんが附あいてるから、内では親にさえ滅多に打ぶたれた事のない頭だ。その大切にせられている頭を、勘ちゃんは遠慮せずにピシヤピシヤ打ぶつ。

一度酷どひどい目に遭あつてから、私は勘ちゃんが可怕こわくて可怕こわくてならなくなつた。勘ちゃんが側そばへ来ると、最もう私は恟おどおど々して、呉あれと言いわない中うちから持つてる物を遣り、勘ちゃん、あの、賢さとしちやんがね、お前の事を泥棒だつつて言いつてたよと、余計あまな事迄告つげ告ぐち口くちして、勉つとめて御機嫌を取とつていた。斯かうしていれば大抵は無難だ

が、それでも時々何の理由もなく、通りすがりに大切の頭をコツリと打やつて行くこともある。

そと外は面白いが、勘ちやんが厭だ。と云つて、内でお祖母ぼあさんとにら睨めツこも詰らない。そこで、お隣のお光みつちゃんにお向うのお芳よっちやんを呼んで来る。お光みつちゃんは外そつぱ齒のお出額でこで河童のようなこ児だつたけれど、お芳よっちゃんは色白の鈴を張つたような眼で、好いこ児いこだつた。私は飯事ままごとでお芳よっちゃんの旦那様になるのが大好だつた。お烟草たばこ盆ぼんのお芳よっちゃんが真面目腐つて、貴方あなた、御飯をお上あなンなさいなと云う。アイと私が返事をする。アイじゃ可笑おかしいわ、ウンというんだわ、と教えられて、じゃ、ウンと言つて、可笑おかしくよッなつて、不覺つい笑いい出す。此方が勘ちやんに頭を打はられるより余よッほ

程ほど面白い。それに女の児こはこましやくれているから、子供でも人の家うちだと遠慮する。私ひとり一人威張つていられる。間違つて喧嘩になつても、屹きつ度と敵手あいてが泣く。然うすればお祖母ばあさんが謝罪あやまつて呉れる。

女の児こと遊ぶのは無難で面白いが、併しそう毎日遊びに来て呉れない。すると、私は退屈するから、平地へいちに波瀾を起して、拗すねて、じぶくツて、大泣に泣いて、而そうしてお祖母ばあさんに御機嫌を取つて貰う。

……が、待てよ。何ぼ自然主義だと云つて、斯う如何もダラダラと書いていた日には、三十九年の半生はんせいを語るに、三十九年掛るかも知れない。も少し省略はしよろう。

で、唐突ながら、祖母は病死した。

其時の事は今に覚えているが、平常いつもの積つもりで何心なく外そとから歸つて見ると、母が妙な顔をして奥から出て来て、常いっになく小聲で、お前は、まあ、何処へ行ツていたい？ お祖母ばあさんがお亡なくななすツたよ、という。お亡なくななすツたよが一ちよつと寸分ちよつとらなかつたが、死んだのだと聞くと、吃驚びっくりすると同時に、急に何だか可怕おつかなくなつて来た。無論まだ死ぬという事が如何どんな事だか能くは分よらなかつたが、唯何となく斯う奥の知れぬ真暗な穴のような処へ入る事の

ように思われて、日頃から可怕おっかながつていたのだが、子供も人間だから矛盾を免れない。お祖母ばあさんが死んだのは可怕おっかないが、その可お怕つかない処を見たいような気もする。

で、母が来いと云うから、跟あとに随ついて怕こわ々ごわ奥へ行つて見ると、父は未だ居る医者と何か話をしていたが、私の面かおを見るより、何処へ行つて居た。もう一足早かつたらなあ……と、何だか甚ひどく残念がつて、此処へ来てお祖母ばあさんにお辞儀しろという。

改まつてお祖母ばあさんにお辞儀しろと言われた事は滅多に無いので、死ぬと変な事をするものだ、と思つて、おツかな恟びつくり側へ行くと、小屏風を逆さかさにした影に祖母が寝ていて、面かおに白しろい布片きれが掛あけてある。父が徐しずかに其を取除けると、眼を閉じて少し口を開あ

た眠つたような祖母の面かおが見える……一目見ると厭な色だと思つた。長いこと煩わづらつていたから、寔やつれた顔は看慣みなれていたが、此こ様な色になつていたのを見た事がない。厭に白けて、光沢つやがなくて、死の影に曇つてゐるから、顔中が何処となく薄暗い。もう家うちのお祖母ばあさんでは無いような気がする。といつて、余よ処そのお祖母ばあさんでもないが、何だか其処しきりに薄気味の悪い区劃しきりが出来て、此方こつちは明るくて暖かだが、向うは薄暗くて冷たいようで、何がなしに怕こわかつた。

「お辞儀をしないか。」

と父に催促されて、私は莞爾にこにこ々々となつた。何故だか知らんが、莞爾にこにこ々々となつて、ドサンと膝を突いて、遠方からお辞儀して、

急いで次の間へ逃げて来て、矢張莞爾々々して来た。

其そのうち中に親類の人達が集まつて来る、お寺から坊さんが来る、

其晩はお通夜つやで、翌日は葬式と、何だか家内かないが混雑ごたごたするのにな、

観みる物聞く事皆珍らしいので、私は其に紛れて何とも思わなかつ

たが、臆やがて葬式が済んで寺から帰つて来ると、手伝の人も一人帰

り二人帰りして、跡は又家うちの者ばかりになる。薄暗いランプの陰

で下面かおを合せて見ると、お祖母ばあさんが一人足りない。ああ、お祖

母あさんは先刻さつき穴へ入つて了つたが、もう何時迄いつまで待ても帰つて来ぬ

のだと思うと、急に私は悲しくなつてシクシク泣出した。

私の泣くのを見て母も泣いた。父も到頭泣いた。親子三人むかい向

合あつて、黙つて暫く泣いていた。

## 八

祖母に死別れて悲しかったが、其頃はまだ子供だったから、十分に人間死別の悲しみを汲分け得なかつた。その悲しみの底を割つたと思われるのは、其後そののちりようしん 両親に死なれた時である。

去る者日々に疎うとしとは一わたりの道理で、私のような浮世の落伍者は反かえつて年と共に死んだ親を慕う心が深く、厚く、濃こまやかになるようだ。

去年の事だ。私は久ひさしぶり振てんぼで展墓の為帰省した。寺の在る処は旧もとは淋しい町まちはず端はずれで、門前の芋畠を吹く風も悲しい程だったが、

今は可なりの町並になつて居て、昔能く憩んだ事のある門脇の掛茶屋は影も形も無くなり、其跡が Barber's 《バーバース》 Shop 《シヨップ》と白ペンキの奇抜な看板を揚げた理髪店になつてゐる。

が、寺は其反対に荒れ果てて、門は左程でもなかつたが、突当りの本堂も、其側の庫裏も、多年の風雨に曝れて、処々壁が落ち、下地の骨が露われ、屋根には名も知れぬ草が生えて、甚く淋れていた。私は台所口で寺男が内職に売っている櫛を四五本買って、井戸へ掛つて、釣瓶繩が腐つて切れそうになつてゐるのを心配しながら、漸く水を汲上げた。手桶片手に、櫛を提げて、本堂をグルリと廻つて、後の墓地へ来て見ると、新仏が有つた

と見えて、地尻じしりに高い杉したの木の下に、白張しらはりの提灯ふたはりが二張ハタ  
 ハタと風に揺ゆらいでいる。流石さすがに微かすかに覚えが有るから、確か彼の辺あへん  
 だなど見当を附けて置いて、さて昨夜ゆうべの雨でぬかる墓場道を、蹴け  
 揚あげの泥いとを厭いとい厭いとい、度々たびたび下駄を取られそうになりながら、それ  
 でも迷わずに先祖代々の墓の前へ出た。

祠堂しどうきん金も納めてある筈、僅ばかりでも折々の附け届も怠らな  
 かつた積つもりだのに、是はまた如何な事！ 何時いつ掃除した事やら、台  
 石は一杯あおごけに青苔あおごけが蒸して石塔も白い痴かさぶたのような物おほに蔽おほわれ、天  
 ツペンふたとこみとこに二処三処ベツトリと白い鳥ふんの糞ふんが附ついている。勿論このは木葉は  
 堆うづたかく積かつて、雑草も生えていたが、花立の竹筒は何処へ行つた事  
 やら、影さえ見えなかつた。

私は掃除する方角もなく、之に対して暫くちようぜん悵然としていた。祖母の死後すねん数年、ちちはは父母も其跡を追うて此墓したの下に埋うずまつてから既に幾星霜を経ている。墓石ぼせきは戒名も読め難かねる程苔蒸して、默然として何も語らぬけれど、今来きたつて面まのりに之に対すれば、何となく生きた人と面かおを合せたような感がある。懐かしい人達が未だ達者でいた頃の事が、夫それから夫それと止度とめどなく想出されて、祖母が縁先に円くなって日向ぼっこをしている格かっこう構、父が眼も鼻も一つにして大な嚏おおきくしゃみを為ようとする面相かおつき、母が襷掛たすきがけで張物かまぼこをしている姿などが、まぎまぎ顯然と目の前に浮ぶ。

さっ颯と風が吹いて通る。木この葉がざわざわと騒ぐ。木この葉の騒ぐのとは思いながら、澄んだ耳には、聴き覚えのある皺しやが噎れた声や、

快活な高たか声こゑや、低い纖弱かほそい声こゝろが紛々ごちやごちやと絡み合つて、何やら切しきりに慌あわただしく話かたしているように思われる。一しきりして礎はたと其が止むと、跡は寂然しんとなる。

と、私の心も寂然しんとなる。その寂然しんとなつた心の底から、ふと恋こひしいが勃々むらむらと湧わいて出て、私は我知らず泪なみだ含くんだ。ああ、成なろう事ことなら、此儘此墓かみの下へ入いつて、もう浮世うきよへは戻かへり度たくないと思おもつた。

## 九

先刻さつき旧友きゆうゆうの一人が尋ねて来た。此人は今でも文壇ぶんだんに籍せきを置いて

る人で、人の面かおさえ見れば、君ねえ、ナチユラリズムがねえと、グズリグズリを始める人だ。

神経衰弱を標榜している人だから耐たまらない。来ると、ニチャニチャと飴を食つてゐるような弁で、直すぐと自分の噂を始める。やあ、僕の理想は多角形で光沢があるの、やあ、僕の神経は錐きりの様に尖とんがつて来たから、是で一つ神秘の門を突ついて見る積つもだのと、其様そんな事ばかり言う。でなきや、文壇の噂で人の全盛しゅらに修羅しゆらを燃もし、何かしらケチを附けたがつて、君、何なに某がしのと、近頃評判の作家の名を言つて、姦通一件を聞いたかという。また始まつたと、うんざりしながら、いやそんな事僕は知らんと、ぶつきらぼうに言うけれど、文士だから人の腹なんぞは分らない。人が知らんという

のに反つて調子づいて、秘密の話だよ、此場限りだよと、私が十人目の聴手かも知れぬ癖に、悪念わるねんを推して、その何某なにがしが友の何某なにがしの妻と姦通している話を始める。何とかが如何どうとかして、掃溜はきだめの隅で如何どうとかしている処を、犬に吠付かれて蒼くなつて逃げたとか、何とか、その醜穢しゆうわいなること到底筆には上せられぬ。それも唯其丈の話で、夫だから如何どうという事もない。君、モ―パッサンの捉まえどこだね、という位ぐらいが落だ。

これで最う帰るかと思うと、なかなか以て！ 君ねえ、僕はねえと、また僕の事になつて、其そのうち中に世間の俗物共を眼中に措おかないで、一つ思う存分な所を書いて見ようと思うという様な事を饒舌しゃべつて、文士で一生貧乏暮しをするのだもの、ねえ、君、責せめて

後世にでも名を残さなきやアと、堪らない事をいう。プスリプスリと燻いぶるような氣きえんを吐いて、散々人を厭がらせた揚句に、僕は君に万斛ばんこくの同情を寄せている、今日は一つ忠告を試みようと思う、というから、何を言うかと思うと、「君も然う所帯染みて了わずと、一つ奮発して、何か後世へ残し玉え。」

こんなのは文壇でも流石さすがに屑の方であろう。しかし不幸にして私の友人は大抵屑ばかりだ。こんな人のこんな風袋ふうたいばかり大きくても、割れば中から鉛の天神様が出て来るガラガラのような、見掛倒しの、内容に乏しい、信切な忠告なんぞは、私は些ちっとも聞き度たくない。私の願は親の口から今一度、薄着して風邪をお引きでない、お腹が減すいたら御飯にしようかと、詰くらん、降くだらん、意味

の無い事を聞きたいのだが……

その親達は最う此世に居ない。若し未だ生きていたら、私は……孝行をしたい時には親はなしと、又しても俗物は旨い事を言う。ああ、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶出すのは親の事……それにポチの事だ。

## 十

ポチは言う迄もなく犬だ。

来年は四十だという、もう鬢びんに大分白髪しらがも見える、汚ない髭あんまの親仁おやしの私が、親に継いで犬の事を憶い出すなんぞと、余り馬鹿

氣ていてお話にならぬ——と、被<sup>おつ</sup>仰<sup>しゃ</sup>るお方が有るかも知れんが、  
 私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸<sup>ちよつと</sup>ま  
 あ、弟……でもない、弟以上だ。何と言つたものか？ ……そう  
 だ、命だ、第二の命だ。恥を言わねば理<sup>り</sup>が聞こえぬというから、  
 私は理<sup>り</sup>を聞かせる為に敢て耻を言うが、ポチは全く私の第二の命  
 であつた。其癖初めを言えば、欲しくて貰つた犬ではない、止む  
 ことを得ず……いや、矢張<sup>やっぱり</sup>あれが天から授かつたと云うのかも知  
 れぬ。

忘れもせぬ、祖母の亡<sup>なく</sup>なつた翌<sup>よくよく</sup>々<sup>とし</sup>年の、春雨のしとしとと降る  
 薄ら寒い或夜の事であつた。宵<sup>よいまどい</sup> 惑<sup>い</sup>の私は例の通り宵の口から  
 寝て了つて、いつ 両<sup>りようしん</sup> 親<sup>しん</sup>は寝に就いた事やら、一向知らなかつ

たが、ふと目を覚すと、有明ありあけが枕元を朦朧ぼんやりと照して、四辺あたりは  
 微暗ほのぐらく寂然しんとして、耳元近くに妙な音がする。ゴウと  
 いかとすれば、スウと、或は高く或は低く、単調ながら拍子を  
 取つて、宛然さながら大鋸おおのこぎりで大丸太を挽割ひきわりるような音だ。何だろう  
 と思つて耳を澄していると、時々其音が自分と自分の単調に饜あ  
 たように、忽ちガアと慣れた調子を破り、凄じい、障子の紙の共  
 鳴りのする程の音を立てて、勢込んで何処へか行きそうにして、  
 忽ち物に行当つたように、礎はたと止む。と、しばらく闐寂ひっそとなる―  
 ―その側そばから、直ぐ又穩かにスウスウという音が遠方に聞え出し  
 て、其が次第に近くなり、荒くなり、又耳元で根氣よくゴウ、ス  
 ウ、ゴウ、スウと鳴る。

私は夜中に滅多に目を覚めた事が無いから、初は甚く吃驚したが、能く研究して見ると、なに、父の躰なので、漸と安心して、其儘再び眠ろうとしたが、壮なゴウゴウスウが耳に附いて中々眠付れない。仕方がないから、聞える儘に其音に聴入っている、思倣しで種々に聞える。或は遠雷のように聞え、或は浪の音のようでもあり、又は火吹達磨が火を吹いてるようにも思われれば、ゴロタ道を荷馬車が通る音のようにも思われる。と、ふと昼間見た絵本の天狗が酒宴を開いている所を憶出して、阿爺さんが天狗になってお囃子を行つてのじやないかと思うと、急に何だか薄気味悪くなって来て、私は頭からスポツと夜着を冠つて小さくなった。けれども、天狗のお囃子は夜着の襟から潜り込

んで来て、耳元に纏へばり付いて離れない。私は凝然じつと固こくなつて其に耳を澄すましていると、何時いつからとなくお囃子はやしの手が複雑こんで来て、合の手に遠くで幽かすかにキャンキャンというような音が聞える。ゴウという凄じい音の時には、それに消け圧おされて聞えぬが、スウという溜息なげ息のような音になると、其が判然はつきりと手に取るように聞える。不思議に思ますつて益耳ますを澄すましていると、合の手のキャンキャンが次第に大きく、高くなつて、遂には鼾いびきの中を脱け出し、其とは離ればなれに、確に門前もんぜんに聞える。

こうなつて見ると、疑もなく小こ狗いぬの啼なき声だ。時々咽喉のどでも締しめられるように、消魂けしたましく、きやんきやん々々と啼なき立てる其の声こわじり、尻しりが、  
 臆やがてかぼそく悲し気になつて、滅入るように遠い遠い処へ消えて

行く——かとするれば、忽ち又近くで堪え切れぬように啼き出して、クンクンと鼻を鳴らすような時もあり、ギャオと欠びあくをするような時もある。

## 十一

私は元來動物好きで、なかんずく就中犬は大好きだから、近所の犬は大抵なじみ馴染だ。けれども、此様こんなかぼそ纖細い可愛いたげな声で啼くのは一疋も無い筈だから、不思議に思つて、そつ窃と夜着の中から首を出すと、  
「如何どうしたの？ 寝られないのかえ？」

と、母が寝反りを打つて此方こちらを向いた。私は此返答は差措さしおいて、

「あれは白じゃないねえ、阿母さん？ 最と小さい狗の声だねえ

？ 如何したんだろう？」

「棄狗さ。」

「棄狗ツて何？」

「棄狗ツて……誰かが棄てツたのさ。」

私はしばらく考えて、

「誰が棄てツたんだろう？」

「大方何処かの……何処かのさ。」

何処かの人が狗を棄てツたと、私は二三度反覆して見たが、

分らない。

「如何して棄てツたんだろう？」

蒼蠅うるさいよ、などという母ではない。何処迄も相手になつて、其意味を説明して呉れて、もう晩おそいから黙つてお寐ねと優しく言つて、又彼方向あちらいて了つた。

私も亦夜着を被かぶつた。狗いぬは門前を去つたのか、啼声ややが稍遠くなるに随つつて、父の躰いびきが又蒼蠅うるさいく耳に附く。寝られぬ儘に、私は夜着の中で今聴いた母の説明を反くりかえ覆し反覆あじわし味つて見た。まず何処かの飼犬が椽の下で児こを生んだとする。小ちツぼけなむくむくしたのが重なり合つて、首を擡もちやげて、ミイミイと乳房を探している所へ、親犬が余よそ処から歸つて来て、其側そのそばへドサリと横になり、片か端たはしから抱え込んでベロベロ舐なめると、小さいから舌の先で他愛もなくコロコロと転がされる。転がされては大騒ぎして起返り、又

ヨチヨチと這はい寄つて、ポツチリと黒い鼻面でお腹なかを探り廻まわり、  
 漸く思う柔かな乳首ちくびを探り当て、狼狽あわててチユウと吸付いて、小さ  
 な両手で揉もみ立て揉み立て吸出すと、甘い温かな乳汁あつたが滾どくどく々と  
 出て来て、咽喉のどへ流れ込み、胸さがを下つて、何とも言えずお甘いしい。  
 と、腋の下からまだ乳首とに有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで来る。  
 奪とられまいとして、産毛うぶげの生えた腕うでを突張り大騒ぎ行やつてみるが、  
 到頭と奪とられて了しい、又其処ほからを尋ねて、他の乳首そのうに吸付く。其  
 中ちにお腹くちも満みくなり、親の肌で身体あたたも温あたたまって、溶とろけそういな好  
 い心持こころもちになり、不覚ついで昏うとうと々ととなると、含くんだ乳首ちくびが抜ひけそういにな  
 る。夢心地ゆめごころにも狼狽あわてて又吸付いて、一しきり吸立てるが、直じきに又  
 他愛うとうとなく昏うとうと々ととなつて、乳首ちくびが遂ついにに口くちばしを脱ける。脱けても知ら

ずあに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正体がない……  
其時忽ち暗くらやみ黒から、茸もじやもじや々々と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がヌツと出て、正体なく寝入っている所を無手むずと引ひっつか掴み、  
宙つるに釣す。驚いて目をポツチり明き、いたいげな声で悲鳴を揚げながら、四足そくを張つて藻搔もがく中に、頭から何かで包まれたよう  
で、真暗になる。窮屈いっきで息いきが塞つまりそうだから、出ようとするが、出られない。久しばらく藻搔もがいて居る中に、ふと足搔あがきが自由になる。  
と、領元えりもとを撮つままれて、高い高い処からドサリと落された。うろ  
うろとして其処らを視廻すけれど、何だか変な淋しい真暗な処で、  
誰も居ない。茫然としてみると、雨に打れて見る間に濡しよぼた  
れ、怕おそろしく寒くなる。身みふる慄い一つして、クンクンと親を呼んで

見るが、何処からも出て来ない。途方に暮れて、ヨチヨチと這出し、雨の夜中を唯一人、温かな親の乳房を慕つて悲し気に啼廻る声なきまわが、先刻さつき一度門前へ来て、又何処へか彷徨さまよつて行つたようだったつが、其いが何時か又戻つて来て、何処を如何どう潜り込んだのか、今は啼声まさが正しく玄関先に聞える。

## 十二

「阿母おつかさん阿母さん、門の中へ入つて来たようだよ。」

と、私わたしが何だか居いた堪たまらないような氣になつて又母に言掛ける  
と、母は氣の無さそうな声で、

「そうだね。」

「出て見ようか？」

「出て見ないでも好いよ。寒いじゃないかね。」

「だってえ……あら、彼様に啼てる……」

と、折柄おりから絶入るように啼入る狗いぬの声に、私は我知らず勃然むっくり起上ったが、何だか一人では可怕おっかないような気がして、

「よう、阿母おツかさん、行つて見ようよう！」

「本ほん当に仕様がない兎こだねえ。」

と、口小言を言い言い、母も渋々起きて、雪洞ほんほりを点つけて起たちあ上がったから、私も其後そのあとに随ついて、玄関——と云つてもツイ次の

間だが、玄関へ出た。

母が履くつぬぎ脱へ降りて格子戸の掛かき金を外し、ガラリと雨戸を繰ると、颯さつと夜風が吹込んで、雪洞ぼんぼりの火がチラチラと靡なびく。其時小さな鞆まりのような物が衝つと軒下を飛退とびのいたようだったが、廳やがて雪ぼ洞んぼりの火先ひさきが立直つて、一道の光がサツと戸外おもての暗黒やみを破り、雨水の処々に溜じづらつた地面を一筋細長く照出した所を見ると、ツイ其処いに生後まだ一カ月も経たたぬ、むくむくと肥ふとつた、赤ちやけた狗いぬ児ぬこが、小指程の尻尾しっぽを千切れそうに掉立ふりたつて、此方こちらを瞻み上げてあいる。形体なりは私が寝ていて想像したよりも大きかったが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳しずくから雫たらを滴し、ぽちちりと両つの眼を青貝のように列べて光らせている。

「おやおや、まあ、可愛らしい！ ……」と、母も不覚言つて了つた。

況や私は犬好だ。凝として視ては居られない。母の袖の下から首を出して、チヨツチヨツと呼んで見た。

と、左程畏れた様子もなく、チヨコチヨコと側へ来て流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からグイグイ推上げるようにして、ベロベロと舐廻し、手を呉れる積なのか、頻に円い前足を挙げてバタバタやっていたが、果は和り痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くて堪まらない。母の面を瞻上げながら、少し鼻声を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るも好いけど、居附いて了うと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むような事を言いながら、それでも台所へ行つて、欠茶碗かけちやわんに冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来て呉れた。

早速履くつぬぎ脱へ引入れて之を当がうと、小狗こいぬは一寸香ちよつとかを嗅いで、

直ぐ甘うまそうに先ずピチャピチャと舐なめだ出したが、汁が鼻孔はなへ入ると見えて、時々クシンクシンと小さな嚏くしゃみをする。忽ち汁を舐なめつく尽し

て、今度は飯に掛つた。他ほかに争う兄弟も無いのに、切しきりに小言を言

いながら、ガツガツと喫たべ出したが、飯は未だ食慣くいなれぬかして、

兎角上顎ひつつに引附く。首を掉ふつて見るが、其様そんな事では中々取れない。

果は前足で口の端はたを引搔ひつかくような真似をして、大藻搔おおもがきに藻も

搔がく。

此この隙ひまに私は母と談判を始めて、今晚一晩泊めて遣つてと、雪ぼ洞んぼりを持つた手に振ぶらさが垂おとつる。母は一寸渋つたが、もう斯うなつては仕方がない。阿爺おとつさんに叱られるけれど、と言いながら、詰りさんだらほうし棧さんだらほうし俵法師を捜して来て、履くつぬぎ脱ぬぎの隅ぐもに敷敷いて遣つた——は好ちつかつたが、其晚一晩啼なきとお通とおされて、私は些ちつとも知らなんだが、お蔭かげで母は父に小言を言われたそうな。

十三

犬いぬぎらい嫌らいの父は泊めた其夜そのよを啼なきあか明あかされると、うんざりして了

つて、翌あくるひ日は是非逐出おいだすと言出したから、私は小狗こいぬを抱いて逃廻どつて、如何どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしていたが、併し其も一時じの事で、其そのうち中に小狗こいぬも独寝ひとりねに慣れて、夜も啼かなくなる。と、逐出おいだす筈の者に、如何いっしかポチという名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すようになって了つた。

父が斯うなつたのも、無論ポチを愛したからではない。唯私にひか羈ひかされたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、強あながちポチを愛したからではない。愛する愛さんは扱さ置おいて、私は唯可哀かわいそうだったのだ。親の乳房すに縋すがつてゐる所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突つき放はなされた犬の子の運命が、子供心にも如何にも果敢はかなく情けないように思われて、手放すに忍

びなかつたのだ。

此忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心がから揃み合つた処に、ポチはうま旨く引掛ひツかかつて、辛からくも棒石塊いしころの危あやない浮世さまよに彷徨さまよう憂目をのが免れた。で、どうせ、それは、蜘蛛くもの巣すだらけでは有つたろうけれど、兎も角も雨露うろを凌しのぐに足る椽こもの下の菰こもの上で、甘うまくはななくとも朝夕二度の汁掛飯じゆけいに事欠かず、まず無事に暢のんびりと育つた。

育つに随つれて、丸々と肥ふとつて可愛らしかつたのが、身せ長いに幅を取られて、ヒヨ口長くなり、面かおも甚ひどくトギスになつて、一寸狐ちよつとのような犬になつて了つた。前足を突張つて、尻をもつたてて、弓のように反そつて伸のびをしながら、大きな口をアングリ開あいて欠あくびを

する所なぞは、誰が眼にも余まり見とも好くもなかつたから、父は始終厭な犬だ厭な犬だと言つて私を厭がらせたが、私はそんな犬振りで情を二三にするような、そんな輕薄な心は聊かも無い。固より玩弄物にする氣で飼つたのでないから、厭な犬だと言われる程、尚可愛ゆい。

「ねえ、阿母さん此様な犬は何処へ行つたつて可愛がられやしないやねえ。だから家で可愛がつて遣るんだねえ。」

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、調戲う父と争つた。犬好は犬が知る。私の此心はポチにも自然と感通していたらしい。其証拠には犬嫌いの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで行つて了う事がある。母が

呼ぶと、不断食事の世話になる人だから、又何か貰えるかと思つて眼を輝かして飛んで来る、而して母の手中に其らしい物があれば、兎のように跳ねて喜ぶ。が、しかし、唯其丈の事で、其時のポチは矢張犬に違いない。

その矢張犬に違いないポチが、私に對うと……犬でなくなる。

それとも私が人間でなくなるのか？ ……何方だか其は分らんが、兎に角互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。

一如となる。だから、今でも時々私は犬と一緒にゐて此様な事を思う、ああ、儘になるなら人間の面の見えぬ処へ行つて、飯を食つて生きてたいと。

犬も屹度きつと然う思うに違いないと思う。

十四

私は生来の朝寝坊だから、毎朝二度三度おこ覚されても、中々起きない。優しくしては際限がないので、母が最終しまいには夜着を剥はぐ。これで流石さすがの朝寝坊も不承々々に床を離れるが、しかし大だいふ不平へいだ。額で母を睨にらめて、津蟹づかにが泡を吐くように、沸々ぶつぶつ言つている。ポチは朝起だから、もう其時分には疾とつくに朝飯あさめしも済んで、一ひとツき切り遊んだ所だが、私の声を聴き付けると、何処どこに居ても一目散に飛んで来る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾にこにこ々々となつて、急いで庭へ降りる所を、ポチが透すかさず泥足で飛付く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉ふり立つて、嬉しそうに面かおを瞻みあげ上る。視下す。目と目と直びったりと合う。堪たまらなくなつて私が横抱ひに引ひんだ。ポチは抱かれながら、身を藻搔もがいて大暴れに暴れ、私の手を舐なめ、胸を舐なめ、顚あごを舐なめ、頬ほおを舐なめ、舐めても舐めても舐め足らないで、悪くすると、口まで舐なめる。父が面かおを顰しかめて汚い汚いと曰う。成程、考えて見れば、汚いようではあるけれども……しかし、私は嬉しい、止やめられない。如何どうして是こゝが止やめられるもんか！ 私が何も好いい物を持つているじやなし、ポチも其は承知すで為る事だ。利害の念を離れて居るのだ、唯懐かしいという刹那の心になつて

居るのだ。毎朝これでは着物が堪らないと、母は其を零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチの此志を無にする事が出来た話だか、話でないか、其処を一つ考えて貰いたい。

理窟は扱置いて、この面舐めの一儀が済むと、ポチも漸と是で気が済んだという形で、また庭先をうろうろし出して、椽の下なぞを覗いて見る。と、其処に草鞋虫の一杯依附つた古草履の片足か何ぞが有る。好い物を看附けたと言いそうな面をして、其を啜え出して来て、首を一つ掉ると、草履は横飛にポンと飛ぶ。透さず追蒐けて行つて、又啜えてポンと抛る。其様な他愛もない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其隙に私は面を洗う、飯を食う。それが済むと、今度は学

校へ行く段取になるのだが、此時が一日中で一番私の苦痛の時だ。ポチが跟を追う。うツかり出ようものなら、何処迄も何処迄も随いて来て、逐ったつて如何したつて帰らない。こツそり出ようとしても、出掛ける時刻をチャンと知つて居て、其時分になると、何時の間にか玄関先へ廻つて待つて居る。仕方がないから、最終には取捉まえて否、応なしに格子戸の内へ入れて置いては出るようにしていたが、然うすると前足で格子を引掻いて、悲しい悲しい血を吐きそうな啼声を立てて後を慕い、姿が見えなくなつても啼止まない。私もそれは同じ想だ。泣出しそうな面をして、バタバタと駆出し、声の聞えない処まで来て、漸くホツとして、普通の歩調になる、而して常も心の中で反覆し反覆し此様な

事を思う、

「僕が居ないと淋しいもんだから、それで彼様にあんな 跟をあと追うんだ。可哀そうだなあ……僕ぼかあ学校なんぞへ行いきたか無いんだけど……行いかないと、阿父おとつさんがポチを棄すてツ了ちまうツて言うもんだから、それでシヨウがないから行いくンだけでも……」

## 十五

ジャンジャンと放課の鐘が鳴る。今迄静かだった校舎内が俄にわかに騒さわがしくなつて、彼方あちこち此方こちの教室の戸が前後して慌あわだしくパツパツと開あく。と、その狭い口から、物の真黒な塊りがドツと廊下へ

吐出され、崩れてばらばらの子供になり、我<sup>われ</sup>勝<sup>が</sup>に玄関脇の昇降  
 口<sup>くち</sup>を目<sup>め</sup>蒐<sup>が</sup>けて駈<sup>か</sup>出してながら、口々に何<sup>なに</sup>だか喚<sup>わめ</sup>く。只もう校舎<sup>がく</sup>を撼<sup>ゆす</sup>  
 つてワーツという声<sup>こゑ</sup>の中に、無<sup>む</sup>数の円<sup>ま</sup>い顔<sup>が</sup>が黙<sup>もく</sup>つて大きな口<sup>くち</sup>を開<sup>あ</sup>  
 いて躍<sup>おど</sup>つていよう、何<sup>なに</sup>を喚<sup>わめ</sup>いでいるのか分<sup>わ</sup>らない。で、それ  
 が一旦昇降口<sup>が</sup>へ吸<sup>す</sup>込まれて、此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>で又<sup>また</sup>紛<sup>ごたごた</sup>々<sup>と</sup>と入<sup>い</sup>乱<sup>らん</sup>れ重<sup>じゆう</sup>なり合<sup>あ</sup>つ  
 て、腋<sup>わき</sup>の下<sup>した</sup>から才<sup>さい</sup>槌<sup>づち</sup>頭<sup>あたま</sup>が偶<sup>ひ</sup>然<sup>よつ</sup>と出<sup>い</sup>たり、外<sup>そつ</sup>歯<sup>ば</sup>へ肱<sup>うで</sup>が打<sup>ぶ</sup>着<sup>つ</sup>かつ  
 たり、靴<sup>かかと</sup>の踵<sup>あひ</sup>が生<sup>あ</sup>憎<sup>い</sup>と霜<sup>しも</sup>焼<sup>やけ</sup>の足<sup>あし</sup>を踏<sup>ふ</sup>んだりして、上<sup>うへ</sup>を下<sup>した</sup>へと  
 握<sup>こね</sup>返<sup>かえ</sup>した揚<sup>あ</sup>句<sup>ぐ</sup>に、ワツと門<sup>もん</sup>外<sup>そと</sup>へ押<sup>お</sup>出<sup>し</sup>して、東<sup>あづ</sup>西<sup>ま</sup>へ散<sup>ちり</sup>々<sup>ちり</sup>になる。  
 仲<sup>なか</sup>善<sup>よし</sup>二人<sup>に</sup>肩<sup>かた</sup>へ手<sup>て</sup>を掛<sup>か</sup>合<sup>あ</sup>つて行<sup>い</sup>く前<sup>まへ</sup>に、弁<sup>べん</sup>当<sup>たう</sup>箱<sup>ばう</sup>をポ<sup>ぽ</sup>ンと抛<sup>ほう</sup>り上<sup>う</sup>  
 げてはチヨイと受<sup>う</sup>けて行<sup>い</sup>く頑<sup>いた</sup>童<sup>ずら</sup>がある。其<sup>その</sup>隣<sup>りん</sup>りは往<sup>い</sup>来<sup>らい</sup>の石<sup>いし</sup>塊<sup>ころ</sup>  
 を蹴<sup>く</sup>飛<sup>べ</sup>ばし蹴<sup>く</sup>飛<sup>べ</sup>ばし行<sup>い</sup>く。誰<sup>たれ</sup>だか、後<sup>あと</sup>刻<sup>とく</sup>で遊<sup>あそ</sup>びに行<sup>い</sup>くよ、と喚<sup>わめ</sup>く。

蝗いなごを取りに行かないか、という声もする。君々と呼ぶ背後うしろで、馬

鹿野郎と誰かが誰かを罵ののしる。あ、痛いたッ、何でい、わーい、とい

う声こゑが譟がやがや然と入違つて、友達は皆道草を喰つている中を、私一

人は駈脱かけぬけるようにして側視わきみもせずせつせに切々と歸つて来る。

家うちの横町の角迄来てくすぐツ擦すたいような心持になつて、窃そツと其方角を

観る。果してポチが門前へ迎えに出ている。私を看附みつけるや、逸いっさ

散さんに飛んで来て、飛付く、舐なめる。何だか「兄さん！」と言つ

たような気がする。若し本ほんづつみ包づつみに、弁当箱に、草履袋で両手が

塞ふさがつていなかったら、私は此時ポチを捉つかまえて何を行やつたか分

らないが、其が有るばかりで、如何どうする事も出来ない。抛よんどころ

なくほたほたしながら頭なを撫なでて遣なるだけで不承ふしょうして、又歩き

出す。と、ポチも忽ち身を曲くねらせて、横飛にヒヨイと飛んで駈出すかと思うと、立止つて、私の面かおを見て滑稽おどけた眼色めつきをする。追付くと、又逃げて又其眼色めつきをする。こうして巫山戯ふざけながら一緒に帰る。

玄関から大きな声で、「只今！」といいながら、内へ駈込んで、卒いきなり然本包を其処ほうへ抛り出し、慌あわてて弁当箱を開けて、今日のお菜の残り——と称して、実は喫たべたかったのを我慢して、半分残して来た其物それをポチに遣やる。其れでも足りないで、お八ツにお煎を三枚貰ったのを、責せびつて五枚にして貰つて、二枚は喫たべて、三枚は又ポチに遣る。

夫から庭で一しきりポチと遊ぶと、母が屹度きつとお温習さらいをお為しとい

う。このお温習程私の嫌いな事はなかつたが、之をしないと、直  
 ポチを棄ると言われるのが辛いので、渋々内へ入つて、形の如く  
 本を取出し、少し許おんによごおんによごで行る。それでお終だ。  
 余り早いねと母がいういのを、空耳潰して、衝と外へ出て、ポ  
 チ来い、ポチ来いと呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。  
 これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかつた。

## 十六

ポチは日増しにメキメキと大きくなる。大きくはなるけれど、  
 まだ一向に孩児で、垣の根方に大きな穴を掘って見たり、下駄

を片足門外へ唧え出したり、其様悪戯ばかりして喜んでいる。

それに非常に人懐こくて、門前を通掛りの、私のような犬好が、  
 気紛れにチヨツチヨツと呼んでも、直ともう尾を掉つて飛んで行  
 く。況して家へ来た人だと、誰彼の見界はない、皆に喜んで  
 飛行く。初ての人は驚いて、子供なんぞは泣出すのもある。する  
 と、ポチは吃驚して其面を視ている。

人でさえ是だから同類は尚お恋しがる。犬が外を通りさえすれ  
 ば屹度飛んで出る。喧嘩するのかと、私がハラハラすれば、喧嘩  
 はしない、唯壮に尻尾を掉つて鼻を嗅合う。大抵の犬は相手は子  
 供だという面をして、其儘々と行こうとする。どっこいとポチ  
 が追蒐けて巫山戯かかる。蒼蠅いと言わぬばかりに、先の犬は齒

を剥むいて叱る。すると、ポチは驚いて耳を伏せて逃げて来る。

ポチは此こ様な無邪気な犬であつたから、友達は直じき出来た。

友達というのは黒と白との二匹で、いずれもポチよりは三ツ四ツも年上であつた。歴とした家うちの飼うい犬でありながら、品性の甚だ下劣な奴等で、毎日々々朝から晩まで近所の掃溜はきだめをあり歩き二度の食事の外ほかの間かんしよく食くばかり貪むさぼっている。以前から私うちの家の掃溜はきだめへも能よく立廻たちまわつて来て、馴染なじみの犬共ではあるけれど、ポ

チを飼うようになつてからは、尚お頻ひんばん繁ばんに立廻たちまわつて来る。ポチの喫剩たべあましを食くいに来るので。

ポチは大様おおようだから、余よ処その犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒おこらない。黙もくつて快く食くわせて置く。が、他ひとの食くうのを見て

自分も食氣しよくきづ附く時がある。其様そんな時には例の無邪氣で、うツかり側そばへ行つて一緒に首を突込もうとする。無論先の犬は、馳走になつてゐる身分を忘れて、大おおに怒いかつて叱おこ付ける。すると、ポチは驚とびいて飛退とびのいて、不思議そうに小首を傾かしげて、其ガツガツと食うのを黙もつて見てゐる。

父は馬鹿だと言いうけれど、馬鹿氣ばかて見える程無邪氣なのが私わは可愛かわゆい。尤もちも後のちには悪友の悪感化を受けて、友達と一緒に近所の掃溜はきだめへ首を突込み、鮭しやけの頭を舐しゃぶつたり、通と掛かりりの知らん犬と喧嘩けんかしたり、屑拾くずひろいの風体を怪あやしんで押取おつとり囿かこんで吠付わいたりした事も無いではないが、是れは皆友達を見よう見真似まねに其の尻馬しつばに騎のつて、訳も分わらずに唯騒さわぐので、ポチに些ちつとも悪意は

ない。であるから、独りの時には、矢張元やっぱりの無邪気な人懐こい犬で、滑稽とぼけた面かおをして他愛のない事ばかりして遊んでゐる。惟おもうに、私等親子の愛いづくしみを受けて、曾て痛い目に遭あつた事なく、暢のんき気に安泰に育つたから、それで此こんな様に無邪気であつたのだろうか、あ、想出しても無念でならぬ。何故私はポチを躰しつけて、人を見たら皆悪魔と思ひ、一生世間を睨ねめ付けては居させなかつたらう？

なま  
じ可愛がつて育てた為に、ポチは此こんな様に無邪気な犬になり、無邪気な犬であつた為に、遂に残忍な刻薄な人間の手に掛つて、彼あ様な非業の死を遂げたのだ。

或日の事。卑さもしい事を言うようだが、其日の弁当の菜さいは母の手製かつぶしの鰹節でんぶで、私も好きだが、ポチの大好きな物だったから、我慢して半分以上残したのが、チャンと弁当箱に入っている。早く帰ってこれが喫たべさせたかったので、待まち憧こがれた放課の鐘が鳴るや、大急ぎで学校の門を出て、友達は例の通り皆道草を喰くっている中を、私一人は切せつ々と帰せつて来ると、俄にわかに行手がワツと騒さわがしくなつて、先へ行く児こが皆雪崩なだれて、ドツと道端みちばたの杉垣へ片寄よつたから、驚おどいてヒヨイと向うを見ると、ツイ四五間先を荷車かが来る。瞥ちらと見たばかりでは何の車とも分らなかつた。何でも可かなり大きな箱車はこぐるまで、上から菰こもを被かぶせてあつたようだったが、

其を若い土方風の草鞋穿わらしばきの男が、余り重そうにもなく、々々さつき

引いて来る。車ひつそに引添うてまだ一人、四十許りの、四角な面かおの、

もじやもじや

ひげ

茸

々々

と髭ひげの生えた、

人相やっぱりの悪い、

矢張やっぱり草鞋穿わらしばきの

土方風の男

が、古ぼけて茶だか鼠だか分らなくなつた、塵埃ほこりだらけの鉢巻も

ない帽子を阿弥陀あみだに冠かぶつて、手ぶらで何だか饒舌しゃべりながら来る。

みちばた

道端の子供等は皆好奇の目を円くして此怪し気な車を見迎え

見送つて、何を言うのか、口々に諫然がやがやと喚わめている中から、忽

ち一段際立きわだつて甲高かんだかな、「犬殺いぬころしだい犬殺いぬころしだい！」という叫さ

けびごえ

声こゑが其処そこ此処ここから起る。と聞くより、私はハツとした。全身

の血の通いが急に一時しじに止つたような気がして、襟元から冷りと

する、足が窘蹙すくむ……と、忽ち心臓が破裂せんばかりに鼓動し出

す。「ポチは？ ……」という疑問が曇つたような頭の中で、ちらりと電いなずま光のように閃いて又暗中に没する時、ガタガタと車が前を通る。

後で聞けば、菰こもの下から犬の尻尾とか足とかが見えていたというけれど、私が其時きつ倂と目を据えて視たのでは、唯車が躍つて菰こもが魂の有るようにゆさゆさと揺ゆれるのが見えたばかりで、他ほかには何も見えなかつた。或は最う目も霞んでいたのかも知れぬ。

「おツそろしい餓鬼だなあ！ まだ彼様あんなに出て来やがら……」  
と太い煤すすけたような野良声のらごえで、——確に年上の奴に違いないが、然う言うのが聞えた。

ガタンと一つ小石に躍つて、車は行過ぎて了う。

跡は両側の子供が又続々ぞろぞろと動き出し、四辺が大黒帽に飛白かすりの衣服きもので紛々ごたごたとなる中で、私一人は佇立たちどまったまま、茫然として轅棒かじぼうの先で子供の波を押し分けて行くように見える車の影を見送つていた。

と、誰だか私の側そばへ来て、何か言う。顔は見覚えのある家うちの近所そのかの何とかいう児だが、言つてる事が分らない。私は黙つて其そのか面おを視たばかりで、又窃そつと車の行った方角を振向いて見ると、最う車は先の横町を曲つたと見えて、此方こちらを向いて来る沢山の子供の顔が見えるばかりだ。

「ねえ、君、君とこ所のポチも殺されたかも知れないぜ。」  
という声が此時ふと耳に入つて、私はハツと我かえに反ると、

「啞うそだい！ 殺されるもんか！ 札が附いてるもの……」

と狼狽あわてして打消してから、始めて木村の賢ちゃんという児と話をしている事が分つた。

「やあ……札が附いてたつて、殺されますから。へえ。僕とこン所の阿爺おとつさんが……」

と賢ちやんが言掛けると、仲善なかよしの友の言う事だが、私は何だか急に口惜くやしくなつて、赫かつと急込せきこんで、

「何でい！ 大丈夫だい!! ……」

と怒鳴り付けた。賢ちやんが吃驚びっくりして眼を円くした時、私は卒

然きなりバタバタと駈出し、前へ行く児にトンと衝つき当あたる。何しやが

るンだいと、其児に突飛されて、又誰だかに衝つき当あたる。二三度彼あ

方ちこち方ちこちで小突かれて、蹠よろよろ蹠よろよろとして、危あやうかつたのを辛やツと踏ふんごた耐たえるや、後あとをも見みずに逸いっさん散さんに宙うちを飛とで家うちへ歸かえつた。

## 十八

門あけは明あけ放ばなし、草履わらじは飛とび飛とびに脱だつ棄してて、片足ひとあしが裏うら返かへしになつたのも知しらず、「阿母おつかさん阿母おつかさん！」と卒いきなり然しか内うちへ喚わめき込こんだが、母ははの姿すがたは見みえないで、台所だいどころで返かへ事がごとする。

誰たれだか来きて居ゐるようようで、話わ声こゑがして居ゐるけれど、其その様ような事ことに頓とん着ちかしては居ゐられない。学まな校な道みち具ぐを座ま敷なの中まんなか央ほうへ抛なり出だして置おいて台所だいどころへ飛とんで行いくなり、

「阿母さん！ ……ポチは？ ……」

と喘ぎ喘ぎまず聞いてみた。

母は黙つて此方を向いた。常は滅入つたような蒼い面をしてい  
る人だったが、其時此方を向いた顔を見ると、微と紅くなつて、  
眼に潤みを持ち、どうも尋常の顔色でない。私は急に何か物に  
行当つたようにうろろうして、

「殺されたかい？ ……」

と凝と母の面を視た時には、氣息が塞りそうだった。

母は一寸躊躇つたようだったが、思切つて投出すように、

「殺されたとき……」

逸散に駈て来て、ドカツと深い穴へ落ちたら、彼様な気がす

るだろうと思う。私は然う聞くと、ハツと内へ氣息を引いた。と、張詰めて破裂れそうになつていた気がサツと退いて、何だか奥深い穴のような処へ滅入つて行くようで、四辺が濛と暗くなると、母の顔が見えなくなつた……

「炭屋さんが見て来なすつたんだッさ。」

という声がふと耳に入ると、クワツとまた其処らが明るくなつて眼の前に丸鬚が見える。母は又彼方向いて了つたのだ。

「じゃ、木村さん処の前で殺されたんですね？」と母の声がいう。

「へえ」、という者がある。機械的に其方へ面を向けると、腰障子の蔭に、古い馴染染の炭屋の爺やの、小鼻の脇に大きな黒子のあ皺だらけの面が見えて、前歯の二本脱けた間から、チヨコチ

ヨコ舌を出して饒舌しやべつてゐる声が聞える。「丁度あの木村さんの  
 前とこに処とこなんで。手前てまえは初めは何だと思ひました。棒を背後うしろへ匿かくし  
 てましたから、遠くで見たんじや、ほら、分りませんや。一寸見ちよいと  
 ると何だか土方のような奴で、其奴そいつがこう手を背後うしろへ廻まわしまして  
 な、お宅の犬の寝ている側そばへ寄よつてくから、はてな、何をするん  
 だろう、と思つて見ていますと、彼様あんな人ひと懐なつつこい犬だから、  
 其奴そいつの面かおを見て、何にも知らずに尻尾を掉ふつてましたよ。可哀かわいそ  
 うに！ 普通なみの者なら、何ぼ何でも其様そんなにされちや、手を下せ  
 た訳わけ合あいのもんじやございません、——ね、今日こんにち人情にんじやうとしまして  
 も。それを、貴女あなた……いや、どうも、ああいう手合てあひに逢あつちや敵かな  
 いません、卒いきなり然かく匿かくしてた棒を取直して、おやツと思おもう間に、

ポンと一つ鼻面を打ちました。そうするとな、お宅のは勃然起き  
 ましてな、キリキリと二三遍廻つて、パタリと倒れると、仰向き  
 になつてこう四足よつあしを突張りましてな、尻尾でバタバタ地面を叩  
 いたのは、あれは大方苦くるしがつたんでしようが、傍はたで見えていりや何  
 だか喜んで尻尾を掉ふつたようで、妙な塩梅あんばいしきでしたがな、其  
 処あなたを、貴女あなた、またポカポカと三つ四つ咽喉のどン処ところを打ちますとな、  
 もう其それ切つきりで、ギャツともスウとも声を立て得ないで、貴女あなた：  
 …」

私はもう後あとは聴いていなかた。誰たれを憚はばる必要もないのに、窃そつ  
 と目立たぬように後方うしろへ退さがつて、狐鼠こそこ々と奥ひっこへ引込んだ。ベタ  
 リと机の前へ坐つた。キリキリと二三遍廻つたという今聞いた話

が胸に浮ぶと、そのキリキリと廻ったポチの姿が、まぎまぎ 顕然と目に  
見えるような気がする。熱い涙がほろほろ零れる、こぼ 手の甲で擦つ  
ても擦つても、とめど 止度なくほろほろ零れる。こぼ

## 十九

ポチが殺されて、私は氣脱けしたようになって、翌日は学校も  
休んだ。何も自分が罪を犯したでもないのに、何となく友達に顔  
を見られるのが辛くツて……

ひるすぎ  
午過

にポチが殺されたという木村という家うちの前へ行つて見た。

其処か此処かと尋ねて見たけれど、もう其らしい痕あともない。私は

道端たたずにイんで、茫然としていた。

炭屋の老爺じいやの話だと、うツかり寝転んでいる所を殺されたのだと云う。大方きのう昨日も私の帰りを待ちかねて、此処らまで迎えに出ていたのであろう。待草まちくたび臥れて、ドタリと横になって、角かどのポストの蔭から私の姿がヒョッコリ出て来はせぬかと、其方ばかりを余念なく眺ながめている所へ、犬殺しが来たのだ。人間は皆私達親子のように自分を可愛がつて呉れるものと思つている。ポチの事だから、犬殺しとは気が附かない。何心なく其その面かおを瞻み上げて尾を掉ふる所を、思いも寄らぬ太い棍棒がブンと風を截きつて来て……

と思うと、又胸が一杯になる。

ヒユウと悲しい音を立てて、空から風かぜが吹いて通る。跡からカラ

カラに乾いた往来の中央まんなかを、砂すなけぶり烟ぼつが濛と力のない渦を巻いて、振よじれてひよろひよると行く。

私は其行方を眺めて茫然としていた。と、何処でかキャンキャンと二声三声犬の啼声それきりがする……倍きつと耳ひつたを引立ひつたつて見たが、もう其切それきりで聞えない。隣町あたりで凍かじけたような物売の声かじがする。

何だか今の啼声それきりが気になる。ポチは殺されたのだから、もう此処らで啼ないてる筈はずはない。余所の犬だ余所の犬だ、と思おもいながら、何だか其儘聞流きんりゅうしてうのが残惜ざんじきしくて、思おもわず。パタパタと駈出ぐたりしたが、余所の犬じや詰つまらないと思返おもして、又頹然ぐたりとなると、足の運びおそも自然おそと遅おそくなり、そろりそろりと草履ひきずりを引摺ひきずりながら、目的あてもなく小迷さまよつて行く。

小迷さまよつて行きながら、又ポチの事を考えていると、ふツと気が  
 変つて、何だか昨日きのうからの事が皆嘘みんらしく思われてならぬ。私が  
 余あんなりポチばかり可愛がつて勉強をしなかつたから、父が万ひよつと一し  
 たら懲こらしめのため、ポチを何処かへ匿かくしたのじやないかと思う。  
 そうすると、今の啼声は矢張ポチだつたかも知れぬと、うろろう  
 とする目の前を、土耳其帽トルコぼうを冠かぶつた十徳姿の何処かのお祖父じいさん  
 が通る。何だか深切そうな好いいお祖父じいさんらしいので、此人に聞  
 いたら、偶然ひよつとポチの居いどころ処を知つていて、教えて呉れるかも知  
 れぬと思つて、凝然じつと其面そのかおを視ると、先も振向いて私の面かおを視  
 て、莞爾にっこりして行つて了つた。

向うから順礼の親子が来る。笈おいずる摺も古ぼけて、旅たび囊やつれのし

た風で、白の脚絆きやはんも埃ほこりに塗まぶれて狐色きつねいろになつてゐる。母の話で聞くと、順礼じゆんれいという者は行方知れずになつた親兄弟や何かを尋ねて、国々を經巡へめぐつて歩くものだと言ふ。此人達も其様そのような事で斯うして歩いてゐるのかも知れぬ、と思つと、私も何だか此仲間へ入つて一緒にポチを探して歩きたいような気がして、立止つて其の後姿を見送つてゐると、忽ち背後うしろでガラガラと雷かみなりの落懸おちかかるような音がしたから、驚いて振向こうとする途端とたんに、トンと突飛つひされて、私はコロコロと転がった。

「危あやない！ 往來うらうらの真まん中ちゆうを彷徨うろたしてやがつて……」とせいせい息いきを逸はずませながら立止つて怒鳴り付けたのは、目の怕こわい車夫くるまぶであつた。

車には黒い高い帽子を冠かぶつて、温あつたかそんな黄ろい襟かおの附いた外おきあが套きを被た立派な人が乗っていたが、私が面かおを顰しかめて起上おきあがるのを尻おし眼まなこに掛けて、髭ひげの中でニヤリと笑つて、

「鎌かま蔵ぞう、構かまわずに行やれ。」

「へい……本ふん当とに冷ひやりとさせやがった。氣きを付つけろ、涕はな垂たらしめ！……」

と車夫は又トツトツと曳出ひきだした。

紳士は犬殺しでない。が、ポチを殺した犬殺しと此人と何だか同じように思われて、クラクラと目が眩くらむと、私はもう無茶苦茶むちゃくちやになつた。卒いき然なり道みち端ばたの小石こいしを拾ひろつて打ぶつて打ぶつてやろうとしたら、車は先の横町へ曲つたと見えて、もう見えなかつた。

パタリと小石を手から落した。と、何だか急に悲しくなつて来て耐<sup>たま</sup>らなくなつて、往来の真中で私は到頭シクシク泣出した。

## 二十

ポチの殺された当座は、私は食が細つて痩せた程だつた。が、其程の悲しみも子供の育つ勢には敵<sup>かな</sup>わない。間もなく私は又毎日学校へ通つて、友達を相手にキャツキャツとふざけて元氣よく遊ぶようになつた……

今日は如何したのか頭が重くて薩張り書けん。徒書でもしよう。

愛は総ての存在を一にす。

愛は味うべくして知るべからず。

愛に住すれば人生に意義あり、愛を離るれば、人生は無意義なり。

人生の外に出で、人生を望み見て、人生を思議する時、人生は遂に不可得なり。

人生に目的ありと見、なしと見る、共に理智の作用のみ。理智の眼を抉出して目的を見ざる処に、至味存す。

理想は幻影のみ。

凡人ぼんにんは存在うちの中に住す、其一生は觀念なり。詩人哲学者は

存在ほかの外ほかにんに遊離す、觀念は其一生なり。

凡人ぼんにんは聖人の縮図なり。

人生の真味は思想に上らず、思想を超脱せる者さいわいは幸なり。

二十世紀の文明は思想を超脱せんとする人間の努力たるべし。

此こん様な事ならまだ幾らでも列べられるだろうが、列べたつて詰

らない。皆うそ啞うそだ。啞うそでない事を一つ書いて置こう。

私はポチが殺された当座は、人間の顔が皆犬殺しに見えた。是こ

丈れだけは本当の事だ。

## 二十一

小学から中学を終るまで、落第をも込めて前後十何年の間、毎日々々の学校通い、——考えて見れば面白くもない話だが、併し其を左程にも思わなかつた。小学校の中は、内で親に小蒼蠅ことうるさく世話を焼かれるよりも、学校へ行つて友達と騒ぐ方が面白い位に思つていたし、中学へ移つてからも、人間は斯うしたものと合点がてんして、何とも思わなかつた。

しかし、凡そ学科およに面白いというものは一つも無かつた。何の学科も何の学科も、皆味みんなも卒気つんざりもない響蹙する物ばかりだったが、なかんずく就中私の最も閉口したのは数学であつた。小学時代から然う

だったが、中学へ移つてからも、是ばかりは変らなかつた。此次は代数の時間とか、幾何の時間とかになると、もう其が胸に支えて、溜息が出て、何となく世の中が悲觀された。

算術は四則だけは如何やら斯うやら了解めたが、整数分数となると大分怪しくなつて、正比例で一 寸息を吐く。が、其お隣の

反比例から又亡羊し出して、按分比例で途方に暮れ、開平開

立求積となると、何が何だか無茶苦茶になつて、詰り算術の長

の道中を浮の空で通して了つたが、代数も矢張り其通り。一次方

程式、二次方程式、簡単なのは如何になつても、少し複雑の

になると、AとBとが紛糾かつて、何時迄経つてもXに膠着いて

いて離れない。況や不整方程式には、頭も乱次になり、無理方程

式を無理に強付けられては、げんなりして、便所へ立つてホツと一息吐く。代数も分らなかつたが幾何や三角術は尚分らなかつた。初の中は全く相合せ得る物の大きさは相等しなどと真顔で教えられて、馬鹿扱にするのかと不平だつたが、其中に切売の西瓜のような弓月形や、二枚屏風を開いたような二面角が出て来て、大きなお供そなえに小さいお供そなえが附着くつついてヤツサモツサを始める段になると、もう気が逆上うわすツて了い、丸呑まるのみにさせられたギゴチない定義や定理が、頭の中でしやちこぼつて、其心持の悪いこと一通りでない。試験が済むと、早速咽喉のどへ指を突込んで留飲りゆういんの黄水きみずと一緒に吐出せるものなら、吐出して了つて清々せいせいしたくなる。何の因果で此様な可厭いやな想おもいをさせられる事か、其は薩張さつぱり分らな

いが、唯此可厭いやな想おもを忍しのばなければ、学年試験に及第させて貰えない。学年試験に及第が出来ぬと、最終の目的物の卒業証書が貰えないから、それで誠に止むことを得ず、眼を閉ねむつて毒を飲む気で辛抱した。

尤も是は数学ばかりでない。何どの学科も皆多少とも此気味がある。味わつて楽しむなどいうのは一つもない、又楽しんでひまいる暇もない。後から後からと他の学科が急立せきたてるから、狼狽あわてて片端かたはしから及第のお呪まじないの御符ごふうの積つもりうのみにして、而そして試験が済むと、直ぐ吐出してケロリと忘れて了う。

今になつて考えて見ると、無意味だつた。何の為に学校へ通つたのかと聞かれれば、試験の為にというより外はない。全く其頃の私の眼中には試験の外に何物も無つた。試験の為に勉強し、試験の成績に一喜一憂し、如何な事でも試験に關係の無い事なら、如何となれと余処に見て、生命の殆ど全部を挙げて試験の上につけていたから、若し其頃の私の生涯から試験というものを取去つたら、跡は他愛のない烟のような物になつて了う。

これは、しかし、私ばかりというではなかつた。級友という級友が皆然うで、平生の勉強家は勿論、金箔附の不勉強家も、試験の時だけは、言合せたように、一色に血眼になつて……鵜

の真似をやる、丸呑まるのみに吞込めるだけ無暗むやみに吞込む。尤も此連中は流石さすがに平生を省みて、敢て多くを望まない、責めて及第点だけは欲しいが、貰えようかと心配する、而して常そうは事毎に教師に抵抗して青年の意気の壮さかんなるに誇っていたのが、如何どうした機はずみでか急に殊勝しゆしようげ気を起し、敬礼も成る丈気を附けて丁寧にするようにして、それでも尚お危険を感じると、運動と称して、教師の私宅へおしか推懸けて行つて、哀れッぽい事を言つて来る。

私は我儘者の常として、見栄坊みえぼうの、負まけ嫌きらひだったから、平生も余り不勉強の方ではなかった。無論学科が面白くてではない、学科は何時迄経いつまでたつても面白くも何ともないが、譬たとえば競馬へ引出された馬のようなもので、同じような青年と一つ埒らちない入に鼻を列

べて見ると、負まけるのが可厭いやでいきり出す、矢鱈やたらに無上むしようにいきり出す。

平生さえ然うだったから、況いや試し験げんとなると、宛然さながらの狂人きちがいになつて、手拭ねじを捻ねつて向鉢むこうはちまき巻まきばかりでは間怠まだるツこい、氷囊こほりを頭のつへ載のけて、其上うのみから頬ほ冠おりかむむりをして、夜よの目も眠ねずに、例れいの鵜吞うのみをやる。又鵜吞うのみで大抵間たいだに合あう。間に合あわんのは作文ぶんに数学がく位ぐらいのものだが、作文は小学時代から得意の科目で、是は心配しんぱいはない。心配なのは数学の奴だが、それをも無理に狼狽あわてた鵜吞うのみ式しきで押おしとおお徹とそうとする、又不思議と或程度迄は押おしとおお徹とされる。尤も是はかね合あいもので、そのかね合あいを外あすと、落おちおちる。私も未だ試験慣れのせぬ中うち、ふと其かね合あいを外あして落おちおちた時には、親の手前、

学友の手前、流石さすがに面目めんぼくなかつたから、少し学校にも厭気が差  
 して、其時だけは一寸ちよつと学校教育なんぞを齷あく促せくして受けるのが、  
 何となく馬鹿気た事のように思われた。が、世間を見渡すと、皆みんな  
 此無意味な馬鹿気た事を平気で懸命けんめいに行つてゐる。一人として躊  
 躇ちゆうしている者はない。其中で私一人其様そのんな事を思うのは何だか薄  
 気味すきびわる悪わるかつたから、狼狽あわてて、いや、馬鹿ばか気きているようでも、  
 やつぱり矢張やっぱり必要の事なんだろうと思おも直ちして、素知そしらん顔かほして、其  
 からは落第の恥辱ちじゆくを雪すすがねば措おかぬと発奮はつぷんし、切齒せつしして、扼腕やくわん  
 して、果はたし眼まなこになつて、又鶉の真似を継続して行つた。

鶉の真似でも何でも、試験の成績さえ良ければ、先生方も満足  
 せられる、内でも親達おやが満足するから、私は其こゝで好いい事と思つて

いた。然うして多く学んで殆ど何も得る所がない中に、いつしか  
中学も卒業して、卒業式には知事さんも「諸君は今回卒業の名誉  
を荷うて……」といった。内でも赤飯せきはんを焚たいて、お目出度いお  
目出度いと親達やッぱりが右左から私を煽あおがぬ許りにして呉れた。してみ  
れば、矢張やッぱり名誉でお目出度いのに違いないと思つて、私も大おおに得  
意になつていた。

## 二十三

中学も卒業した。さて今後は如何どうするといふ愈胸いよいよの轟く問題に  
なつた。

まだ中学に居る頃からの宿題で、寐ても寤めても是ばかりは忘れる暇もなかつたのだが、中学を卒業してもまだ極きまらずに居たのだ。

極きまらぬのは私ではない。私は疾とうに極きめていた、無論東京へ行くこと。

東京は如何どんな処よだか人の噂ばかりに聞く許よで能くは知らなかつたが、私も地方育ちの青年だから、誰も皆思うように、東京へ出て何処どこかの学校へ入りさえすれば、黙もくつていても自然と運うんが向むかいて来て、或は海外留学を命ぜられるようになるかも知れぬ。若し然しかうなつたら……と目を開あいて夢を見ていたのも昨日きのうや今日の事でないから、何でも角かでも東京へ出たいのだが、さて困こつた事には、珍めづし

くもない話だけれど、金の出<sup>でどころ</sup>処がない。

父は其頃県庁の小吏であつた。薄給でかつがつ一家を支えていたので、月給だけでは私を中学へ入れる事すら覚<sup>おぼつか</sup>束なかつたのだが、幸い親譲りの地所が少々と小さな貸家が二軒あつたので、其上りで如何にか斯うにか糊塗<sup>まじく</sup>なつていたので。だから到底も私を東京へ遣<sup>や</sup>れないという父の言葉に無理もないが、しかし……私は矢張<sup>やっぱり</sup>東京へ出たい。

父は其頃未だ五十であつた。達者な人だけに気も若くて、まだまだ十年や十五年は大丈夫生っていると、傍<sup>はた</sup>の私達も思つていたし、自分も其は其氣でいた。従つて世間の親達のように、早く私を月給取にして、嫁を宛<sup>あて</sup>がって、孫の世話でもしていたいなぞと、そ

んな気は微塵もないが、何分にも当節は勤つとめむき向むすが六かしくなつて、もう永くは勤まらぬという。成程父は教育といつても、昔の寺子屋教育ぎりで、新聞も漢語字引と首引くびつびきで漸く読み覚えたという人だから、今の学校出の若い者と机を列べて事務を執とらされては、嘸さぞ辛い事も有ろうと、其そん様な事には浮うわの空の察しの無かつた私にも、話を聞けば能く分つて、同情が起らぬでもないが、しかし、それだからお前は県庁へ勤めるなどして自分一人だけの事はし為して呉れと、言われた時には情なかつた。父は然うして置いて、何ほかぞ他に気骨の折れぬ力相応の事をして県庁の方は辞職する。辞職しても当分はお前の世話にはなるまいと、財産相応の穩当な案を立てて、私の為をも思つていうのは解わっているけれど、しかし

私は如何しても矢張東京へ出て何処かの学校へ入りたい。

で、親子一つ事を反覆すばかりで何日経つても話の纏まらぬ

中に、同窓の何某はもう二三日前に上京したし、何某は此月

きずえ

末に上京するという話も聞く。私は気が気でないから、眼の色

を異えて、父に逼り、果は血氣に任せて、口惜し紛れに、金がな

いと言われるけれど、地面を売れば如何にかなりそうなものだ、

それとも私の将来よりも地面の方が大事なら、学資は出して貰わ

んでも好い、旅費だけ都合して貰いたい、私は其で上京して苦学

生になると、突飛な事を言い出せば、父は其様な事には同意が出

来ぬという、それは压制だ、いや聞分ないというものだ、親

子顔を赤めて角芽立つ側で、母がおろおろするという騒ぎ。

其時私の為には頗る都合の好い事があつた。私と同期の卒業生で父も懇意にする去る家の息子が、何処のも同じ様に東京行きを望んで、親に拒まれて、自暴やけを起し、或夜窃ひそかに有金ありがねを偷ぬす出みだして東京へ出奔すると、続いて二人程其真似をする者が出たので、同じ様な息子を持った諸方の親おやおや々々の大恐慌となつた。父も此一件から急に我がを折つて、彼方あちこち此方の親類を駈かけ廻まわつた結果、金の工面くめんが漸く出来て、最初は甚ひどく行悩んだ私の遊学の願も、存外難なく聴ゆるされて、遂に上京する事になつた時の嬉しさは今に忘れぬ。

いよいよ

愈出発の当日となった。待ちに待った其日ではあるけれど、今

となつては如何やら一日位は延ばしても好いような心持になつて

いる中に、支度はズズン出来て、さて改まつて父母と別れの

杯の真似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて不覚ホロ

りとした。母は固より泣いた、快活な父すら目出度い目出度いと

言いながら、頻に咳をして涙を拭んでいた。

詠えの俵が来る。性急の父が先ず狼狽て出して、座敷中を彷徨

しながら、ソレ、風呂敷包を忘れるな、行李は好いか、小さ

い方だぞ、コココ蝙蝠傘は己が持つてツてやる、と固より見送

つて呉れる筈なので、自分も一台の俵に乗りながら、何は載つた

か、何は……ソレ、あの、何よ……と、焦心る程尚お想出せない

で、何やら分らぬ手真似をして独り無上に車上で騒ぐ。

母も門口まで送つて出た。愈俵が出ようとする時、母は悲しそ  
うに凝と私の面を視て、「じゃ、お前ねえ、カカ身体を……」と  
までは言い得たが、後が言えないで、涙になつた。

私は故意と附元氣の高声で、「御機嫌よう！」と一礼する  
と、俵が出たから、其儘正面になつて了つたが何だか後髪を引か  
れるようで、俵が横町を出離れる時、一寸後を振向いて見たら、  
母はまだ門前に悄然と立っていた。

道々も故意と平氣な顔をして、往來を眺めながら、勉て心を紛  
らしている中に、馴染の町を幾つも過ぎて俵が停車場へ着いた。

まだ発車には余程間があるのに、もう場内は一杯の人で、  
雑

然と騒がしいので、父が又狼狽あわて出す。親しい友の誰たれかれ彼も見送りに来て呉れた。其そのかお面を見ると、私は急に元氣づいて、例いっになくさかん壮に饒舌しゃべった。何だか皆が私の挙動に注目しているように思われてならなかつた。無論友達は家うちで立たちぎわ際に私の泣いたことを知る筈はないから……

廳やがて発車の時刻になつて、汽車に乗込む。手持無沙汰な落着かぬすぶん数分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動うご出して、父の眼をしょぼつかせた顔がチラリとして直ぐ後あとになる、見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて、白ペンキの低い柵が走る、其向うの後うしろむ向きの二階家が走る、平屋が走る。片側町かたかわまちになつて、人や車が後あとへ走るのが可笑おかしい

と、其を見ている中に、眼界が忽ち豁然と明くなつて、田圃になつた。眼を放つて見渡すと、城下の町の一角が屋根は黒く、壁は白く、雑然と塊まつて見える向うに、生れて以来十九年の間、毎日仰ぎ瞻たお城の天守が遙に森の中に聳えている。ああ、家は彼下だ……と思う時、始めて故郷を離れることの心細さが身に染みて、悄然としたが、悄然とする側から、妙に又気が勇む。何だか籠のような狭隘しい処から、茫々と広い明るい空のような処へ放されて飛んで行くようで、何となく心臓の締るような気もするが、又何処か暢びりと、急に脊丈が延びたような気もする。

こうした妙な心持になつて、心当に我家の方角を見ている

と、忽ち<sup>はた</sup>礎と物に眼界を鎖<sup>とぎ</sup>された。見ると、汽車は截割<sup>たちわ</sup>つたように急な土手下を行くのだ。

## 二十五

申後れたが、私は法学研究のため上京するのだ。

其頃の青年に、政治ではない、政論に興味を持たん者は幾<sup>ほと</sup>んど無かった。私も中学に居る頃から其が面白くて、政党では自由党が大の鼻<sup>ひいき</sup>負であつたから、自由党の名士が遊<sup>ゆうぜい</sup>説に來れば、必ず其演説を聴きに行つたものだ。無論板垣さんは自分の叔父さんか何ぞのように思つていた。

実際の政界の事情は些ちっとも分つていなかった。自由党は如何どうい  
う政党だか、改進黨と如何どう違ちがうのだから、其そん様な事は分つてい  
るよな風をして、実は些ちっとも分つていなかったが、唯うぶ初心な眼で局  
外から観ると、何だか自由党の人というのと、其人の妻子は屹きつ度どう饑  
に泣いてるやうに思われて、妻子が饑うえに泣く——人情忍にんび難がたい所  
だ。その忍にんび難がたい所を忍にんんで、妻や子を棄すてて置いて、而そして自  
分は芸者狂きやういをするのじゃない、四方に奔走ほんそうして、自由民権の大  
義とを唱となえて、探偵たんていに跟つ随けられて、動やもすれば腰繩こしづなで暗くい冷ひやたい監  
獄くわくへ送おくられても、屈まがまない。偉たかいなあ！ と、こう思おもつていたか  
ら、それで好きだった。

好きは好きだったが、しかし友人の誰たれ彼かれのように、今直ぐ其

真似は仕度したくない。も少し先の事にしたい。兎角理想というものは遠方から眺めて憧憬あこがれていると、結構な物だが、直ぐ実行しようとする、種々いろいろ都合の悪い事がある。が、それでは何だか自分にも薄志はくしじ弱行やつこうのように思われて、何だか心持が悪かったが、或時何かの学術雑誌を読むと、今の青年は自己の当然修むべき学業を棄てて、動もやすれば身を政治界に投ぜんとする風ありと雖も、是れ以ての外の心得違なり、青年は須すらく客氣を抑えて先おず大に修養すべし、大おいに修養して而しかして後大のおに為す所あるべし、という議論が載っていた。私は嬉しかった。早速此持じち重説じゆうせつを我物にして、了つて、之を以て実行に逸はる友人等を非難し、而そうして窃ひそかに自ら弁護する料にしていた。

斯ういう事情で此様な心持になつていたから、中学卒業後尚お進んで何か専門の学問を修めようという場合には、勢い政治学に傾かざるを得なかつた。父が上京して何を遣りたいのだと言つた時にも、言下に政治学と答えた。飛んだ事だといつて父が夫では如何しても承知して呉なかつたから、じゃ、法学と政治学とは従兄弟同士だと思つて、法律をやりたいと言つて見た。法律学は其頃流行の学問だつたし、県の大書記官も法学士だつたし、それに親戚に、私立だけけれど法律学校出身で、現に私達の眼には立派な生活をしている人が二人あつた。一人は何処だつたか記憶がないが、何でも何処かの地方で代言をして、芸者を女房にして贅沢な生活をしていて、今一人は内務省の属官でこそあれ、好い処

を勤めている証拠には、曾て帰省した時の服装を見ると、地方では奏任官には大丈夫踏める素晴らしい服装で、何しても金の時計をぶら垂げていたと云う。それで父も法律なら好かろうと納得したので、私は遂に法学研究のため斯うして汽車で上京するのだ。

## 二十六

東京へ着いたのは其日の午後の三時頃だったが、便つて行くのは例の金時計をぶら垂げていたという、私の家とは遠縁の、変な苗字だが、小狐三平という人の家だ。招魂社の裏手の知れ難い家で、車屋に散々こぼされて、辛と尋ね当てて見ると、門構は門

構だが、潜くぐり門もんで、国で想像していたような立派な冠かぶき木門もんではなかった。が、標札を見れば此家ここに違いないから、潜くぐりを開けて中に入ると、直ぐもう其処が格子戸作りの上り口で、三度四度案内を乞うて漸やっと出て来たのを見れば、顔や手足の腫むく起きんだような若い女で、初は膝を突きそうだったが、私の風体を見て中止にして、立ちながら、何ですという。はてな、家うちを間違えたか知らと、一寸ちよつと狼狽したが、標札に確たしかに小狐おぎつね三平とあつたに違ちがいなから、姓名なを名告なつて今着いた事を言いうと、若い女は怪訝けげんな顔をして、一寸ちよつとお待ちなさいと言いつて引込ひっこんだぎり、中々出て来ない。車屋は早く仕て呉れという。私は気が気でない。が、前以て書面で、世話を頼む、引受けたと、話わが着いてから出て来たの

だし、今日上京する事も三日も前に知らせてあるのだから、今に伯母さんが——私の家では此家の夫人を伯母さんと言いつけていた——伯母さんが出て来て好いように仕て呉れると、其を頼みにしている、<sup>しば</sup>久らくして伯母さんではなくて、今の女が又出て来て、お上なさいという。荷物が有りますと、口を尖<sup>とん</sup>がらかすと、荷物が有るならお出しなさい、というから、車屋に手伝つて貰つて、荷物を玄関へ運び込むと、其女が片端から受取つて、ズンズン何処かへ持つてツて了つた。

車屋に極<sup>き</sup>めた賃錢を払おうとしたら、骨を折つたから増<sup>まし</sup>を呉れという。余所の車は風を切つて飛ぶように走る中を、のそのそと歩いて来たので、些<sup>ちっ</sup>とも骨なんぞ折つちやいない。田舎<sup>いなかもん</sup>者だと

思つて馬鹿にするなど思つたから、厭だといった。すると、車屋は何だか訳の分らぬ事を隙間もなくベラベラと饒舌りしゃべ立つて、段々大きな声になるから、私は其大きな声に驚いて、到頭言いなり次第の賃錢を払つて、東京という処は厭な処だと思つた。

車屋との悶着ちかねを黙つて衝立つッたつて視ていた女が、其が済むのを待ま兼ちかねたように、此方こつちへ来いというから、其跟そのあとに随ついて玄関の次の薄暗い間まへ入ると、正面の唐紙を女が此時ばかりは一ちよつと寸膝ちよつとを突ついてスツと開けて、黙つて私の面かおを視る。私は如何どうして好いいのだか、分らなかつたから、

「中へ入つても好いいんですか？」

と狼狽まごまごして案内の女に応援を乞うた時、唐紙の向うで、勿体ぶ

った女の声で、

「さあ、此方こちらへ。」

私は急に気が改まって、小腰を屈こごめて、遠慮勝こごに中へ入った。

と、不意に箆笥ちよつとまぼや何や角かや沢山な奇麗な道具が燦然ぼつと眼へ入って、一寸目眩ちよつとまぼしいような気がする中でも、長火鉢ひまの向うに、三十だ

か四十だか、其様そんな悠長な研究をしてる暇ひまはなかつたが、何でも私の母よりもグツと若い女の人が、厚い座布団の上にチンと澄いきなしている姿を認めたから、狼狽いきなして卒然いきな其処いきなへドサリと膝を突くと、真紅まつかになつて、倒まつかさになつて、

「初めまして……」

## 二十七

伯母さん——といつては何だか調和うつりが悪い、奥様は一寸会積ちよつとして、

「今お着きでしたか？」

「は」と固くなる。

「何ですか、お国では阿父おとうさんも阿母おかあさんもお変りは有りませんか？」

「は。」

と矢張やっぱり固くなりながら、訥弁とつべんでポツリポツリと両親の言伝ことづてを述べると、奥様は聴いているのか、いないのか、上調子うわちようしでは

あはあと受けながら、厭に赤ちやけた出がらしの番茶を一杯注いで呉れたぎりで、一向構つて呉れない。気が附いて見ると、座布団も呉れてない。

何時迄経つても主人が顔を見せぬので、

「伯父さんはお留守ですか？」

と不覚言つて了つた顔を、奥様はジロリと尻眼に掛けて、

「主人はまだ役所から退けません。」

主人と厭に力を入れて言われて、じゃ、伯父さんじゃ不好きなのか知ら、と思うと、又私は真紅になつた。

ところへバタバタと椽側に足音がして、障子が端手なくガラリと開いたから、ヒヨイと面を挙ると、白い若い女の顔——とだけ

で、其以上の細かい処は分らなかつたが、何しろ先刻取次に出たのとは違う白い若い女の顔と衝着つた。是が噂に聞いた小狐のひとりむすめ  
 独娘の雪江さんだなと思つたと、私は我知らず又固くなつて、  
 狼狽して俯向いて了つた。

「阿母さん阿母さん」と雪江さんは私が眼へ入らぬように挨拶もせず、華やかな若い艶のある美しい声で、「矢張私の言つた通だわ。明日が楽だわ。」

「まあ、そうかい」と吃驚した拍子に、今迄の奥様がヒヨイと奥へ引込んで、矢張尋常の阿母さんになつて了つた。

「厭だあ私……だから此前の日曜にしようと言たのに、阿母さんが……」といいながら座敷へ入つて来て、始めて私が眼へ入つた

のだろう。ジロジロと私の風体ふうていを視廻して、膝を突いて、母の

顔を見ながら、「誰方どなた？」

「此方このかたが何さ、阿父様おとうさまからお話があつた古屋さんの何さ。」

「そう。」

といつて雪江さんは此方こちらを向いたから、此処らでお辞儀をする

のだろうと思つて、私は又倒さになつて一礼すると、残念ながら又真紅まっかになつた。

雪江さんも一寸ちよつとお辞儀したが、直ぐと彼方あちらを向いて了つて、

「私あたし厭あよ。阿母かあさんが彼様あんな事言つて行いかなかつたもんだから：

…」

「だつて仕方がなかつたんだわね。私あたしだつて彼様あんな窮屈とこな処いへ行

くよか、芝居へ行つた方が幾ら好いか知れないけど、石橋さんの奥様に無理に誘われて辞り切れなかつたんだもの。好いわね、其代り阿父様に願つて、お前が此間中から欲しい欲しいしてツてる彼ね？」と娘の面を視て、薄笑いしながら、「彼を買つて頂いて上げるから……仕方がないから。」

「本当？」と雪江さんも急に莞爾々々となつた。私は見ないでも

雪江さんの挙動は一々分る。「本当？ そんなら好いけど……ち

よいとちよいと、其代り……」と小声になつて、「ルビー入りよ

。」

「不好意思不好意思！ ルビー入りなんぞツて、其様な贅沢

な事が阿父様に願えますか？」

「だつてえ……尋常のじやあ……」と甘たれた嬌態をする。

「そんならお止しなさいな。尋常ので厭なら、何も強いて買つて上げようとは言わないから。」

「あら！……」と忽ち機嫌を損ねて、「だから阿母さんは嫌いよ。直あだもの。尋常のじや厭だつて誰も言てやしなくつてよ。」

「そんなら、其様な不足らしい事お言いでない。」

「へえへえ、恐れ入りました」と莞爾して、「じや、尋常のも好いから、屹度よ。ねえ、阿母さん、欺しちや厭よ。」

「誰がそんな……」

「まあ、好かつた！」と又莞爾して一寸私の面を見た。

## 二十八

私は先刻さつきから存在を認めていられないようだから、其隙そのひまに窺こっそりそり雪江さんの面かおを視ていたのだ。雪江さんは私よりも一つ二つ、それとも三つみっぐらい位年下かも知れないが、お出額でこで、円い鼻で、二重あごこ顚あごこで、色白で愛嬌が有ると謂えば謂うようなものの、声程に器量きりやうは美よくなかった。が、若い女は何処となく好くて、私がうツかり面かおを視ている所を、不意に其面そのかおが此方こちらを向いたのだから、私は驚いた。驚いて又俯向うつむいて、膝前一尺通りの処きつを佻きつと視据えた。

雪江さんは又更あらためて私の様子をジロジロ視ているようだったが、

「部屋は何処にするの？」

と阿母かあさんの方を向く。

「え？」と阿母かあさんは雪江さんの面かおを視て、「あの、何のかい？

玄関脇の四畳が好かろうと思つて。」

「あんな処とこ!! ……」

と雪江さんが一寸ちよつと驚くのを、阿母かあさんが眼に物言わせて、了の

解みこませて、

「彼処あそこが一番明るくツて好いから。」

「そう」、と一切の意味を面かおから引込ひっこめて、雪江さんは澄して

つた。

「おお、そうだっけ」、と阿母かあさんの奥様は想出したように私の

方を向いて、「荷物がまだ其儘でしたっけね。今案内させますから、彼方あっちへ行つて荷物の始末でもなさい。雪江、お前ちよつと一寸案内してお上げ。」

雪江さんが起つたから、私も起つて其その跟あとに随ついて今度は椽側へ出た。雪江さんは私より脊せいが低い。ふツくりした束髪で、リボンの色は——彼あれは樺色というのか知ら。若い女の後姿というものは悪くないものだ。

椽側を後戻りして又玄関へ出ると、成程玄関脇に何だか一間ある。

「此処よ。」

と雪江さんが衝つと其処へ入つたから、私も続いて中へ入つた。

奥様は明るいといったけれど、何だか薄暗い長四畳で、入るとブクツとして変な足<sup>あしごた</sup>応えだったから、先ず下を見ると、畳は茶褐色だ。西に明<sup>あかりと</sup>取りの小窓がある。雪江さんが其を明けて呉れたので、少し明るくなつたから、尚お能く<sup>よ</sup>視廻すと、壁は元來何色だったか分らんが、今の所では濁<sup>どすぐろ</sup>黒い変な色で、一カ所壊れ<sup>くず</sup>を取<sup>とりつくろ</sup>繕<sup>あと</sup>つた痕が目立つて黄ろい球<sup>たま</sup>を描いて、人魂<sup>ひとたま</sup>のように尾を曳いている。無論一体に疵<sup>きず</sup>だらけで 処<sup>ところどころ</sup>々鉛筆の落書の痕<sup>あと</sup>を留<sup>とど</sup>めて、腰張の新聞紙の剥<sup>めく</sup>れた蔭から隠した大疵<sup>おおきず</sup>が窺<sup>そっ</sup>と面<sup>かお</sup>を出している。天井を仰向<sup>あおむ</sup>いて視ると、彼方<sup>あちこち</sup>此方の雨漏りの暈<sup>ぼか</sup>したよ<sup>う</sup>な染<sup>しみ</sup>が化物めいた模様になつて浮出<sup>うきだ</sup>して、何だか氣味<sup>きび</sup>の悪いよ<sup>う</sup>な部屋だ。

「何時の間にか掃除したんだよ。それでも奇麗になったわ」と、と雪江さんは部屋の中を視廻みまわしていたが、ふと片隅に積んであった私の荷物に目を留て、「貴方の荷物つて是れ？」と、臆面もなく人の面かおを視る。

私は狼狽あわてて壁を視詰みつめて、

「然うです。」

「机がないわねえ。私あたし所に明とこいてるのが有るから、貸あげて上あましようか？」

「なに、好いいです明日買あしたつて来るから」と、と矢張壁やっぱりを視詰みつめた儘で。

「私あたし要あらないんだから、使あつても好いくつてよ。」

「なに、好い<sup>いい</sup>です、買<sup>か</sup>つて来るから。」

「本<sup>ほん</sup>当<sup>と</sup>に好<sup>こ</sup>くつてよ、然<sup>しか</sup>う遠慮<sup>えんりょ</sup>しないでよ。今持<sup>も</sup>つて来<sup>こ</sup>てよ」、  
と蝶<sup>ちょう</sup>の舞<sup>ま</sup>うように翻<sup>ひら</sup>然<sup>り</sup>と身<sup>み</sup>を翻<sup>か</sup>えして、部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>を出<sup>で</sup>て、姿<sup>すがた</sup>は直<sup>ち</sup>ぐ見<sup>み</sup>え  
なくな<sup>な</sup>つたが、其<sup>その</sup>処<sup>ところ</sup>らで若<sup>わか</sup>い華<sup>はな</sup>やかな声<sup>こゑ</sup>で、「其<sup>その</sup>代<sup>しろ</sup>り小<sup>こ</sup>さくつて  
よ」、とい<sup>い</sup>うのが聞<sup>き</sup>えて、軽<sup>かろ</sup>い足<sup>あし</sup>音<sup>ね</sup>がパタパタと椽<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>を行<sup>い</sup>く。

私<sup>わたし</sup>は荷<sup>に</sup>物<sup>ぶつ</sup>の始<sup>はじ</sup>末<sup>ま</sup>を忘<sup>わす</sup>れて、雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>さんの出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>つた跡<sup>あと</sup>をう<sup>う</sup>つかり  
見<sup>み</sup>ていた。事<sup>こと</sup>に寄<sup>よ</sup>ると、口<sup>くち</sup>を開<sup>あ</sup>いていたか<sup>か</sup>も知<sup>し</sup>れぬ。

## 二十九

荷<sup>に</sup>物<sup>ぶつ</sup>を解<sup>ほど</sup>いてい<sup>い</sup>ると、雪<sup>ゆき</sup>江<sup>え</sup>さん<sup>が</sup>果<sup>は</sup>して机<sup>こゝろ</sup>を持<sup>も</sup>つて来<sup>こ</sup>て呉<sup>く</sup>れた。

成程小さい——が、折角てころざしの志を無にするも何だから、借りて置く事にして、礼をいって窓まど下したに据えると、雪江さんが、それよか入口の方が明るくツて好かろうという。入口では出入りではいの邪魔になると思つたけれど、折角の助言じよごんを聴かぬのも何だから、言う通りに据直すえなおすと、雪江さんが、矢張窓やっばりの下の方が好いという。で、矢張窓の下の方へ据えた。

早速私が書物を出して机そばの側に積むのを見て、雪江さんが、「本箱も無かつたわねえ。あたしとこ私ふたツ所に二つ有るけど、皆塞みんふさがつて、貸して上げられないわ。」

「なに、買つて来るから、好いです。」

「そんならね、晩に勸工場かんこうばで買つてらツしやいな。」

「え？」と私は聞直した、——  
国には無かつたから。

「小川町の勸工場で。」

「勸工場ツて？」

「あら、勸工場を知らないの？ まあ！ ……」

と雪江さんは吃驚した面をして、突然破裂したように笑い出した。娘というものは壺口をして、気取つて、オホホと笑うもの。とばかり思つてる人は訂正なさい。雪江さんは娘だけけれど、口を一杯に開いて、アハアハと笑うのだ。初め一寸仰向いて笑つて、それから俯向いて、身を揉んで、胸を叩いて苦しがつて笑うのだ。私は真紅になつて黙つていた。

先刻取次さつぎに出た女は其後そのご漸く下女と感付いたが、此時障子の蔭からヒヨコリお亀のような笑顔えがおを出して、

「何を其様そんなに笑つてらッしやるの？」

「だつて……アハハハハ！ ……古屋さんが……アハハハ！ ……」

…

「あら、一寸ちよつと、此方このかたが如何どうかなすつたの？」

無礼者ぶれいものめ奴がズカズカ部屋へ入つて来た、而してそう雪江さんの笑いが止らないで、些ちつとも要領を得ない癖に、訳も分らずに、一緒になつてゲラゲラ笑う。

其時ガラガラという車の音が門前に止つて、ガラツと門あが開くと同時に、大きな声で、威勢よく、

「お帰りッ！」

形勢は頓とみに一変した。下女は急に真面目になつて、雪江さんを棄てて置いて、急いで出て行く。

雪江さんもまだ可笑おかしがりながら涙なみだを拭ふき拭ふき、それでも大おおに落お着あいて後あとから出て行く。

主人の帰りとは私にも覺さとれたから、急いで起たち上こつて……窃こそり窓から覗いて見た。

歸つた人は丁度潜くぐりを潜る所で、まず黒の山高帽がヌツと入つて、続いて縞のズボンに靴の先がチラリと見えたかと思うと、渋紙色した髭ひげ面つらが勃むつくり然あ仰あ向むいたから、急いで首を引込ひめたけれど、間に合わなかつた。見附かツちやつた。

お帰り遊ばせお帰り遊ばせ、と口々に喋々ちようちようしく言う声が玄関でした。奥様——も何だか変だ、雪江さんの阿母かあさんの声で何か言うと、ふう、そうか、ふうふう、という声は主人に違いない。私の話に違いない。

悪い事をした、窓からなんぞ覗くんじやなかつたと、閉口している所へ下女が呼びに来て、愈いよいよ閉口したが、仕方がない。どうせ志を立てて郷関を出た男児だ、人間到る処で極きまりの悪い想いする、と腹を据えて奥へ行つて見ると、もう帰った人は和服に着易きかえて、曾て雪江さんの阿母かあさんが占領していた厚蒲団に坐っている。私は誰でも逢まっかいつけぬ人に逢うと、屹度真紅きつとまっかになる癖がある。で、此時も真紅まっかになつて、一度国で逢った人だから、久濶しばらくといつて

例の通り倒さになると、先方は心持首を動かして、若し声に腰が有るなら、その腰と思う<sup>あたり</sup>辺に力を入れて、「はい」という。父も母も宜しく申しましたという、又「はい」という。何卒<sup>どうぞ</sup>何分願いますというと、一段声を張揚<sup>はりあ</sup>げて、「はアい」という。

## 三十

晚餐<sup>ランチ</sup>になって、其晩だけは私も奥で馳走<sup>もちま</sup>になった。花模様の丸ボヤの洋灯<sup>ランプ</sup>の下で、隅ではあつたが、皆と一つ食卓<sup>むか</sup>に對い、若い雪江さんの罪の無い話を聴きながら、阿父<sup>とう</sup>さん阿母<sup>かあ</sup>さんの莞爾<sup>にこにこ</sup>々々した面<sup>かお</sup>を見て、賑<sup>にぎや</sup>かに食事して、私も何だか嬉しかったが……

臆<sup>やが</sup>て食事が済むと、阿父<sup>とう</sup>さんが又主人になつて、私<sup>わが</sup>に對<sup>むか</sup>つて徐<sup>そ</sup>ろそろ々々小むずかしい話を始めた。何でも物価<sup>こうじき</sup>高直<sup>おとつ</sup>の折柄<sup>おりから</sup>、私の入<sup>いれ</sup>る食料<sup>しょくりょう</sup>では到底<sup>とて</sup>も賄<sup>まかな</sup>い切れぬけれど、外ならぬ阿父<sup>おとつ</sup>さんの達<sup>たつ</sup>の頼みであるに因つて、不足の処は自分の方で如何<sup>どう</sup>にかする決心で、謂わば義侠心で引受けたのであれば、他<sup>ほか</sup>の学資の十分な書生のように、悠長な考えでいてはならぬ、何でも苦学すると思つて辛抱して、品行を慎むは勿論、勉強も人一倍するようになつて、聴<sup>き</sup>いていても面白くも変哲もない話だから、雪江さんは話<sup>はなし</sup>で、半<sup>なかば</sup>に小さな欠<sup>あく</sup>びを一つして、起<sup>た</sup>つて何処<sup>どこ</sup>へか行つて了つた。私は少し本意<sup>ほんい</sup>なかつたが、やがて奥まつた処で琴<sup>ね</sup>の音がする。雪江さんに違<sup>ちが</sup>ひない。雪江さんはまだ習<sup>な</sup>い初めだと見えて、琴の音色

は何だかボコン、ボコン、ベコン、ボコンというように聞えて妙だったけれど、私は鳴物は大好だ。何時聴いても悪くないと思つた。

で、遠音とおねに雪江さんの琴を聴きながら、主人の勘定高い話を聴いていると、琴の音が食料に搦からんだり、小遣に離れたりして、六田がボコン、三田でベコンというように聞えて、何だか変で、話も能く分らなかつたが、分らぬ中うちに話は進んで、

「で、家うちも下女一人外使ほかうて居らん。手不足じゃ。手不足の処とこで君の世話をするのじゃから、客扱いにはされん。そりや手紙で阿父おとつさんにも能よう言うて上げてあるから、君も心得てるじやろうな？」

「は。」

「からして勉強の合間には、少し家事も手伝うて貰わんと困る。なに、手伝うというても、大した事じゃない。まあ、取次位ぐらいのものじゃ。まだ何ぞ角かぞ他ほかに頼む事も有ろうが、なに、皆大した事じゃない。行やつて貰えような？」

「は、何でも僕に出来ます事なら……」

「そ、そ、その僕が面白い。君僕というのは同輩或は同輩以下むこに対うて言う言葉で、尊長者むこに対うて言うべき言葉でない、そんな事も注意して、僕といわずに私わたくしというて貰わんと……」

「は……不知つ気が付きませんで……」

「それから、も一つ言うて置きたいのは我々の呼方じゃ。もう君

の年配では伯父さん伯母さんでは可笑しい。これは東京の習慣通り、矢張私の事は先生と言うたら好かろう。先生、此方が御面会を願われます、先生、お使に行つて参りましょう——一向可笑しゆうない。先生というて貰おう。」

「は、承知しました。」

「で、私を先生という日になると、勢い家内の事は奥さんと言わんと権衡が取れん。先生に対する奥さんじゃ。な、私が先生、家内が奥さん、——宜しいか？」

「は、承知しました。」

これで一通り訓戒が済んで、後は自慢話になった。先生も法律は晩学で、最初は如何にも辛かったが、その辛いのを辛抱したお

蔭で、今日では内務の一等属、何とかの係長たることを得たのだという話を長々と聴かされて、私は痺が切れて、耐え切れなくなつて、泣出しそうだった。

辛と放免されて、暗黒を手探りで長四畳へ歸つて来ると、下女が薄暗い豆ランプを持って来て、お前さん床を敷つたら忘れずに消すのですよと、朋輩にでも言うように、粗率に言置いて行つて了つた。

国を出る時、此家の伯父さんの先生は、昔困っていた時、家で散々世話をして遣つた人だから、悪いようにはして呉れまいと、父は言った。私も矢張其気で便つて来たのだが、便つて来てみれば事毎に案外で、ああ、何だか妙な気持ちがある。

私は家が恋しくなつた……

三十一

私は翌日早速錦町にしきちようの某私立法律学校へ入学の手続を済ませ  
て、其処うちの生徒になつて、珍らしい中は熱心に勉強もしたが、其  
中に段々怠り勝うちになつた。それには種々いろいろ原因もあるが、第一  
の原因は家の用が多いからで。

伯父さんの先生——私は口惜くやしいから斯ういう——伯父さんの  
先生は、用といつても大した事じやないと言つた。成程一命かかに  
関しつきわるような大した事ではないが、併し其大した事でない用が

断なく有る。まず朝は下女と殆ど同時におこに覺されて、雨戸を明けさせられる。伯母さんの奥さんと分担で座敷の掃除をさせられる。其が済むと、今度は私一人の専任で庭から、玄関先から、門前から、勝手口まで掃はかせられる。少しでも塵芥ごみが残っていると、掃はきなお直しを命ぜられるから、丁寧に奇麗に掃はかなきやならん。是が中々の大役の上に、時々其処らの草むしり迄やらされてがっかり萎靡する事もある。

朝あさめし飯を済せて伯父さんの先生の出勤を見送つて了うと、学校は午後だから、其迄は身体に一寸隙ちよつとすきが出来る。其暇そのひまに自分の勉強をするのだが、其さえ時々急ぎのとうしゃもの膳写物など吩咐いいつかつて全まるつづれ潰つぶになる。

夕方学校から帰ると、伯父さんの先生はもう疾うに役所から退けていて、私の帰りを待兼たように、後から後からと用を吩咐る。それ、郵便を出して来いの、やれ、お客に御飯を出すのだから、急いで仕出し屋へ走れのと、純台所用の外は、何にでも私を使う。時には何の用だか知れもせぬ用に、手紙を持たせられて、折柄の雨降にも用捨なく、遠方迄使いに遣られて、つくづく辛いと思つた事もある。さもなくば内で取次だが、此奴が余所目には楽なよう、行つて見ると中々楽でない。漸く刑法講義の一枚も読んだかと思うと、もう頼もうと来る。聞えん風も出来ぬから、渋々起つて取次に出て、倒さになる。私のお辞儀は家内の物議を惹起して度々喧しく言われているけれど、面倒臭いから、構わず

倒さになる。でも、相手が立派な商人か何かだと、取次とりつき榮ぼえがして好いい。伯父さんの先生、其そん様な時には、ふうふうと二つ返事で、早速お通し申せと来る。上機嫌だ。其代り其そん様な客の帰る所を見ると、持つて来た物は屹きつと度持つて帰らない。立派な髭ひげの生えた人もまだ好いい。そんなのに限つて尊大振つて、私が倒さになつても、首一つ動かさぬ代り、取次いでも小言を言われる氣遣いはない。反て伯父さんの先生狼狽あわてて迎えに飛んで出る事もある。一番六むずかしいのは風体の余り立派でない人で、就なかんずく中帽子かぶを冠かぶらぬ人は、之を取次おおいぐに大に警戒を要する。自筆の名刺か何かを出されて、之を持つて奥へ行くと、伯父さんの先生名刺を一見するや、面かおをしか擡しかめて、居ると言つたかという。居るものを居ないと言われ

ますか、と腹の中では議論を吹懸けながら、口へ出しては大人しく、はい、然う申しましたという、と、チョツと舌打して、此様な者を取次ぐ奴が有るか、君は人の見別が出来んで困ると、小言を言つて、居ないと言つて返して了えという。私は脹れ面をして容易に起たない。すると、最終には渋々会いはするが、後で金を持てかれたといつて、三日も沸々言つてる。

沸々言つたつて関わないが、斯ういう処を傍から見たら、誰が眼にも私は立派な小狐家の書生だ。伯父さんの先生の畜生、自分から其気で居ると見えて、或時人に対して家の書生がといつていた。既に相手方が右の始末だから、無理もない話だが、出入の者が皆矢張私を然う思つて、書生扱にする。不平で不

平で耐<sup>たま</sup>らないが、一々弁解もして居られんから、私は誠に拗<sup>よん</sup>どころなく不承々々に小狐家の書生にされて了つて、而<sup>そう</sup>して月々食料を払つていた。

が、今となつて考えて見ると、不平に思つたのは私が未だ若かつたからだ。監督を頼まれたから、引受けて、序<sup>ついで</sup>に書生にして使う、——これが即ち親切というもので、此の外に別に親切というもの、人間に無いのだ。有るかも知れんが、私は一寸<sup>ちよつと</sup>見当らない。

体好く書生にされて私は忌々しくてならなかつたが、しかし其でも小狐家おぎつねけを出て了う気にはならなかつた。初の中うちは国元へも折々の便たよりに不平を漏して遣つたが、其も後のちには弗ふつと止めて了つた。さればといつて家うちでの取扱いが變つたのではない。相變らず書生扱にされて、小ツこ甚びどくコキ使われ、果は下女の担任であつた靴磨きをも私の役に振替えられて了つた。無論其時は私は憤激した。余程よっぽど下宿しようかと思つた、が、思つたばかりで、下宿もせんで、為させられる儘に靴磨きもして、而そして国元へは其を隠して居た。少し妙なようだが、なに、妙でも何でもない。私は実は雪江さんに惚れていたので。

惚れては居たが、夫だから雪江さんを如何どうしようという気はな

かつた。其時分は私もまだ初心うぶだったから、正直に女に惚れるのは男児の恥辱と心得ていた。女を弄ぶもてあそのは何故だか左程の罪悪とも思つて居なかつたが、苟いやしくも男児たる者が女なんぞに惚れて性しょう根ねを失うなどと、そんな腐つた、そんなやくぎな根性で何が出来ると思巻いていた。が、口で息巻く程には心で思つていなかったから、自分もいつか其程に擯斥ひんせきする恋に囚とらわれて了つたのだが、流石さすがに囚とらわれたのを恥て、明かに然うと自認し得なかつた気味がある。から、若もし其頃誰かが面と向つて私に然うと注意したら、私は屹度きつと、失敬な、惚なんぞするものか、と真紅まっかになつて怒おこつたに違ちがひない。が、実は惚れたとも思わぬ中うちに、いつか自分にも内々しだらで、こツそり、次序なく惚れて了つていたのだ。

惚れた証拠には、雪江さんが留守だと、何となく帰りが待たれる。家に居る時には心が藻脱けて雪江さんの身に添うてでも居るように、奥と玄関脇と離れていても、雪江さんが、今何の座敷で何をしているかは大抵分る。

雪江さんは宵ツ張だから、朝は大層眠たがる。阿母さんに度々起されて、しどけない寝衣姿で、脛の露わになるのも気にせず、眠そうな面をしてふらふらと部屋を出て来て、指の先で無理に眼を押開け、眶の裏を赤く反して見せて、「斯うして居ないと、附ツ着いて了つてよ」、と行って皆を笑わせる。

雪江さんは一ツ橋のさる学校へ通つていたから、朝飯を済ませると、急いで支度をして出て行く。髪は常も束髪だったが、履はきも

物の背が低いからツて、高い木履を好いて穿いていた。紫の  
 包を抱えて、長い柄の蝙蝠傘を持って出て行く後姿が私は好く  
 つて堪らなかつたから、いつも其時刻には何喰わぬ顔をして部屋  
 の窓から外を見ていると、雪江さんは大抵は見られているとは氣  
 が附かずに、一寸お尻を撫でてから、髪を壊すまいと、低く屈  
 んで徐と門を潜つて出て行くが、時とすると潜る前にヒョイと後  
 を振向いて私と顔を看合せる事がある。そうすると、雪江さんは  
 奇麗な齒並をチラリと見せて、何の意味もなく莞爾する。私は疾  
 から出そうな莞爾を顔の何処へか押込めて、強いて真面目を作つ  
 ているのだから、雪江さんの笑顔に誘われると、耐え切れなくな  
 った不覚矢張莞爾する。こうして莞爾に対するに莞爾を以てする

のを一日の楽しみにして、其をせぬ日は何となく物足りなく思つていた。いや、罪の無い話さ。

## 三十三

午後はいつも私が学校へ行つた留守に、雪江さんが帰つて来るので、掛違つて逢わないが、雪江さんは帰ると、直ぐ琴のお稽古に近所のお師匠さんの処へ行く。私は一度何かで学校が早く終つた時、態々わざわざ廻道まわりみちをして其前を通つて見た事がある。三味線さみせんのお師匠さんと違つて、琴のお師匠さんの家うちは格子戸作りでも、履脱くつぬぎに石もあつて、何処か上品だ。入口に琴曲指南山勢門人やませ何

とかの何枝と優しい書風で書いた札が掛けてあつた。窃そつと格子戸の中うちを覗いて見ると、赤い鼻緒や海老茶の鼻緒のすがつた奇麗な駒下駄が三四足行儀よく並んだ中に、一足紫紺しこんの鼻緒の可愛らしいのが片隅に遠慮して小さく脱棄ぬぎすててある。之を見違えてなるものか、雪江さんののだ。大方おおかた駒下駄ぬしの主も奥の座敷に取とり繕つくろつてチンと澄しているに違ないと思うと、そのチンと澄している処が一目なりと見たくなつたが、生あいにく憎障子たてきが閉切つてあるので、外からは見えない。唯琴の音ねがするばかりだ。稽古琴だから騒々しいばかりで趣おもむきは無ないけれど、それでも琴は何処か床しい。雪江さんは近頃大分上手になつたけれど、雪江さんではないようだ。大方まだ濟ないんだらう、なぞと思ひながら、うツかり覗いてい

たが、ふツと気が附くと、先刻さつきから側そばで何処かの八ツばかりの男の児が、青あお涕おぼなを啜すすり啜すすり、不思議そうに私の面かおを瞻み上げてあいる。子供こどもでも極きまりが悪くなつて、そこそこ々に其処の門口を離れて帰つて来た事も有つたつけが……

夕方は何だか混ごたごた雑ざつして落着かぬ中うちにも、一寸ちよつと好いい事が一つある。ランプ掃除は下女の役だが、夕方之に火を点つけて座敷々々へ配るのは私の役だ。其時だけは私は公然雪江さんの部屋へ入る権利がある。雪江さんの部屋は奥の四畳半で、便所の側そばだけれど、一寸ちよつと小奇麗いな好いい部屋だ。本箱だの、机だの、ガラス戸の箱へ入いれた大きな人形だの、袋入りの琴だの、写真挟みだの、何だの角かだの体裁なりよく列ならべてあつて、留守の中うちは整然きちんと片附かいているけれ

ど、帰つて来ると、書物を出だし放はなしにしたり、毛糸の球を転がしたりして引散ひつちらかす。何かに紛れてランプ配りが晚おそくなつた時などは、もう夕闇が隅々へ行渡つて薄暗くなつた此の部屋の中に、机ぼんやりに茫然ぼんやり頬杖ほを杖ついてる雪江さんの眼鼻の定かならぬ顔が、唯まるまる々々と微ほのじろ白く見える。何となく詩的だ。

「晚おそくなりました。」

とぶつきらぼうの私も雪江さんだけには言いつけぬお世辞も不つ覚い出て、机の上の毛糸のランプ敷じきへ窃そつとランプを載せると

「いいえ、まだ要らないわ。」

雪江さんは屹きつと度斯とういう。これが伯父さんの先生でも有ろうものなら、口とんを尖とんがらかして、「もツと手てまわし廻まわして早うせにや不い好かん

！」と来る所だ。大した相違だ。だから、家で人間らしいのは雪江さんばかりだと言うのだ。

其儘出て来るのが、何だか飽気あつけなくて、

「今日貴嬢あなたの琴のお師匠さんの前を通りました。一寸ちよつと好い家うちですね。」

「あら、そう」、と雪江さんがいう。心持首を傾かしげて、「何時頃？」

「そうさなあ……四時ごろでしたか。」

「じゃ、私あたしの行いつてた時ときだわねえ。」

「ええ」、と私は何だか極きまりが悪わるくなつて俯向うつむいて了しまう。

此話この話が発展はつせんしたら、如何どうな面白い話話になるのだから分わらんのだだけ

れど、其様な時に限って生憎と、茶の間辺で伯母さんの奥さんの意地悪が私を呼ぶ、

「古屋さん！ 早くランプを……何を愚図々々してるんだらうねえ。」

残惜しいけれど、仕方がない。其切りで私は雪江さんの部屋を出て了う。

### 三十四

一番楽しみなのは日曜だ。それも天気だと、朝から客が立込んで私は目が眩る程忙しいし、雪江さんもお友達が遊びに来たり、

お友達の処へ遊びに行ったりして、私の事なんぞ忘れているから、  
 天気は糞だ。雨降りに限る。就なかんずく中伯父さんの先生は何か余儀  
 ない用事があつて朝から留守、雪江さんは一日家うち、という雨降の  
 日が一番好い。

其様そんな日には雪江さんは屹度きつと思切て朝寝坊をして、私なんぞは  
 徐々そろそろ昼飯が恋しくなる時分に、漸う起きて来る。顔を洗つて、

御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髪を結う。結い了う頃は最  
 う午砲ドンだけれど、お昼はお腹なかが満くちくて食べられない。「私あたし廢して  
 よ」という。

部屋で机の前で今日の新聞を一寸ちよつと読む。大抵続物だけだ。そ  
 れから編棒と毛糸の球を持出して、暫くは黙つて切々セッセと編物をし

ている。私が用が有つて部屋の前でも通ると、「古屋さん、これ何になると思つて？」と編掛ちよくけを翳かざして見せる。私が見たんじや、何だか円い変なお猪口ちよくのような物で、何になるのだから見当が附かないから、分らないという、でも、まあ、当てて見ろという。熟考の上、「巾着でしょう？」という、かぶりと頭振を振る。巾着でないとする、手袋には小さし、靴下でもなさそうだし、「ああ、分つた！においぶくろ 匂袋だ」と凶星を言つた積つもりでいうと、雪江さんは吃驚びつくりして、「まあ、可厭いやだ！においぶくろ 匂袋だなんぞつて……其様そんな物は編物にやなくつてよ。」においぶくろ 匂袋においぶくろ でもないとする、もう私には分らない。降参して了うと、雪江さんはにっこり莞爾にっこりともしないで、「これ、人形の手袋。」

雪江さんは一つ事を何時迄もしているのは大嫌いだから、私はまだ自分の部屋の長四畳へ帰るか帰らぬ中に、もう編物を止めて琴を浚さらっている。近頃では最うポコンのベコンでも無くなった。斯うして聴いていると、如何しても琴に違いないと、感心して聴き惚きほれていると、十分と経たぬ中に、ジャカジャカジャンと引搔ひっかき廻まわすような音がして、其切それぎりパタリと、琴の音は止む……ともう茶の間で若い賑にぎやかな雪江さんの声が聞える。

忽ちドタドタドタと椽側を駈けて来る音がする。下女の松に違ちがいない。後あとからパタパタと追蒐おつかけて来るのは、雪江さんに極きまつてる。玄関で追付おついて、何を如何どうするのだから、キヤツキヤツと騒ぐ。松が敵かなわなくなつて、私の部屋の前を駈脱かけぬけて台所へ逃込む。雪

江さんが後あとから追おっか蒐かけて行つて、また台所で一騒動やる中うちに、ガラガラガチャンと何かこわが壊れる。阿母かあさんが茶の間から大きな声で叱ると、台所は急に火の消えたようにひっそりに闐寂となる。

私は、国に居る時分は、お向うのお芳よっちゃん——子供の時分によ能く飯ままごと事ことをして遊んだ、あのお芳よっちゃんが好きだった。お芳よっちゃんよは小さい時には活潑な児こだったよが、大きくなるに随つれて、大層落着いて品の好いい娘むすめになつて、私は其様子が何となく好きだったが、雪江さんはお芳よっちゃんとは正反対だ。が、雪江さんも悪くない、なぞと思いながら、茫ぼんやり然ぜん机こに頬杖ほを突つている脊中せきちゆうを、誰だかワツといつてドンと撞つく。吃びっくり驚おどして振ふり返かえると、雪江さんがキヤツキヤツといいながら、逃にげて行くしどけない後姿ごしが見え

る。私は思わず莞爾にっことなる。

莞爾にっことなった儘で、尚お雪江さんの事を思続けて、果は思う事が人に知れぬから、好いいようなものの、怪しからん事を内々思っている、茶の間の椽側あたりで、オーという例の艶つやのある美しい声が聞える。初は地声の少し大きい位の処から、段々に甲かんだ高かに競せりあ上げて行つて、糸のように細くなつて、何かを突脱けて、遠い何処かへ消えて行きそうになつて、又段々競せりさが下つて来て、果はパツと拵ぢげたような太い声になつて、余念がない。雪江さんが肉声の練習をしているのだ。

私は其時分吉田松陰崇拜であつた。将来の自由党の名士を以つて自任しているのなら、グラッドストーンかコブデン、ブライトあたり傾倒すべきだが、何如した機だつたか、松陰先生に心酔して了つて、書風まで力めて其人に似せ、窃に何回猛士とか僭して喜んでいた迄は罪がないが、困つた事には、斯うなると世間に余り偉い人が無くなる。誰を見ても、先ず松陰先生を差向けて見ると、一人として手応のある人物はない。皆一溜りもなく敗亡する。それを松陰先生の後に隠れて見ていると、相手は松陰先生に負るので、私に負るのではないが、何となく私が勝つたよううな気がして、大臣が何だ、皆門下生じやないか。自由党の名士

だって左程偉くもない。況いわんや学校の先生なんぞは只の学者だ、皆みんな降らない、なぞと鼻息を荒くして、独りで威張つていた。私なぞの理想はいつも人に迷惑を懸ける許りで、一向自分の足たしになつた事がないが、側はたから見たら嘸さぞ苦々しい事であつたらう。兎も角もこうして松陰先生大の崇拜で、留りゅう魂こん録ろくは暗あん誦しよしていた程だつたが、しかし此松陰崇拜が、不思議な事には、些ちつとも雪江さんを想う邪魔にならなかつたから、其時分私の眼中は天下唯松陰先生と雪江さんと有るのみだつた。

で、いつも学校の帰りには此二人の事を考え考え帰るのだが、或日——たしか土曜日だつたかと思う、土曜日は学校も早仕舞なので、三時頃にそうして二人の事を考えながら帰つて見ると、主

人夫婦はいつも茶の間なのに、其日は茶の間に居ない。書齋かと思つて書齋へ行こうとすると、椽側の尽頭はずれの雪江さんの部屋で、雪江さんの声で、

「誰？」

という。私は思わず立止つて、

わたくし  
「私です。」

「古屋さん？」

という声と共に、部屋の障子が颯さっと開いて、雪江さんが面かおだけ出して、

「今日は皆みんな留守よ。」

「え？」と私は耳が信ぜられなかった。

「阿父とうさんも阿母かあさんもね、先刻さつき出懸けてよ。」

「そうですか」、と何気なく言つたが、内々ないないは何だか急に嬉しくなつて来て、

「松は？」

「松はお湯ゆへ行つて未だ歸つて来ないの。」

「じゃ、貴嬢あなたお一人？」

「ええ……一寸ちよつと入らツしやいよ、此処へ。好い物があるから。」

と手招てまねぎをする。斯うなると、松陰先生崇拜の私もガタガタと震い出した。

前にも断つて置いた通り、私は曾て真劍に雪江さんを如何かしようと思つた事はない。それは決して無い。度々怪しからん事を想つて、人知れず其を楽しんで居たのは事実だけれど、勸業債券を買つた人が当籤せぬ先から胸算用をする格で、ほんの妄想だ。が、誰も居ぬ留守に、一寸入らツしやいよ、と手招ぎされて、驚破こそと思ふ拍子に、自然と体の震い出したのは、即ち武者震いだ。千載一遇の好機会、逸してなるものか、というような氣になつて、必死になつて武者震いを喰止めて、何喰わぬ顔をして、呼ばれる儘に雪江さんの部屋の前へ行くと、屈んでいた雪江さんが、其時勃然面を挙げた。見ると、何だか口一杯頬張つてい

て、私の面かおを見て何だか言う。言う事は能く解らなかつたが、側そばに焼芋が山程盆に載つていたから、夫で察して、礼を言つて、一ちよつと寸躊躇よつとしたが、思切つて中へ入つて了つた。

雪江さんはお薩さつが好物だつた。私は好物ではないが、何故だか年中空腹を感じているから、食後だつて十切位ときれぐらいはしてやる男だが、此時ばかりは芋どころでなかつた。切しきりに勧められるけれど、難有ありがとう難有かっうとばかり言つて、手を出さなかつた。何だかもう赫かっとなつて、夢中で、何だか霧にでも包まれたような心持で、是から先は如何どうなる事やら、方角が分らなくなつたから、彷徨うろろうしていと、

「貴方あなたは遠慮深いのねえ。男ツて然う遠慮するもんじやなくツて

よ。」

と何にも知らぬ雪江さんが焼芋の盆を突付ける。私は今其処どころじやないのだが、手を出さぬ訳にも行かなくなつて手を出すと、生憎あいにく手先がぶるぶると震えやがる。

「如何どうして其様そんなに震えるの？」

と雪江さんが不審そうに面かおを視る。私は愈狼狽いよいよして、又真紅まっかになつて、何だか訳の分らぬ事を口の中で言つて、周章あわてて頬張ると、

「あら、皮ごと喰べて……皮は取つた方が好いいわ。」

「なに、構わんです」と仕方が無いから、皮ぐるみムシヤムシヤ喰やりながら、「何は……何処いへ入いらしたんです？」

「吉田さんへ」、と雪江さんは皮を剥く手を止めて、「私些とも

知らなかつたけど、今晚が春子さんのお輿入なんですつて。そ

ら、媒人なこうどでしよう家は？ だから、阿父とうさんも阿母かあさんも早め

に行つてないと不好いけなつて、先刻さつき出て行つたのよ。」

これで漸く合点が行つたが、それよりも爰こゝに一寸吹聴ふいちようし

て置かなきやならん事がある。私は是より先春しゆん色梅曆しよくうめぐよみと

いう書物を読んだ。一体小説が好きで、国に居る時分から軍記物

や仇討物は耽讀たんどくしていたが、まだ人情本という面白い物の有る

ことを知らなかつた。これの知り初めが即ち此春しゆん色梅曆しよくうめぐよみ

で、神田に下宿している友達の処から、松陰伝と一緒に借りて来

て始て読んだが、非常に面白かつた。此梅曆よに拠ると、斯ういう

場合に男の言うべき文句がある。何でも貴嬢あなたは浦山敷うらやましく思わないかとか、何とか、ヒョイと軽く戯談じょうだんを言つて水を向けるのだ。思切つて私も一つ言つて見ようか知ら……と思つたが、何だか、どうも……ソノ極きまりが悪い。

「大變立派なお支度よ。何でもね、箆筒はしとうが四棹よさお行くンですつて。

それからね、まだ長持だの、挟箱はさみばこだの……」

ああ、もう駄目だ。長持や挟箱はさみばこの話になつちや大事去つた、

と後悔しても最う追付おツつかない。雪江さんは、何処が面白いのだから、

その長持や挟箱の話に夢中になつて了つて、其から其と話し続け

て、盛返したくも盛返す隙がない。仕方が無いから、今に又機会おき

も有ろうと、雪江さんの話は浮の空に聞いて、只管ひたすら其機会おきを待

つていと、忽ちガラツと障子が開いて、

「あら、おたのしみ！ ……」

吃驚して振り返ると、下女の松めが何時戻ったのか、見とも  
 ない面を罅裂そうに莞爾つかせて立ってやがる。私は余程飛  
 菟つて横面をグワンと殴曲げてやろうかと思つた。腹が立つて  
 腹が立つて……

三十七

千載一遇の好機会も松に邪魔を入れられて滅茶々々になつて了  
 ったが、松が交つて二つ三つ話をしてる中に、間もなく夕方に

なった。夕方は用が有るから、三人ばらばらになって、私はラン  
 プ配りやら、戸締りやら、一切り立働いて、例の通り部屋で晩飯  
 を済すと、また身体に暇が出来た。雪江さんは一番先に御飯を食  
 べて、部屋へ籠った儘音沙汰がない。唯松ばかり後仕舞で忙し  
 そうで、台所で器物を洗う水の音がボシヤボシヤと私の部屋へ迄  
 聞える。

私は部屋で独りランプを眺めて徒然としていているようで、心は中  
 々忙しかつた。婚礼に呼ばれて行つたとすると、主人夫婦の帰る  
 のには未だ間が有る。帰らぬ中に今一度雪江さんと差向いになり  
 たい。差向いになって何をするのだから、それは私にも未だ極らな  
 いが、兎に角差向いになりたい、是非なりたい、何か雪江さんの

部屋へ行く口実はないか、口実は……と藻搔くけれど、生憎口  
 実が看附からない。うずうずして独りで焦心していると、ふと椽側  
 にバタリバタリと足音がする。其足音が玄関へ来る。確かに雪江  
 さんだ。部屋の前を通越して台所へ行くか、それとも万一障  
 子が開くかと、成行を待つ間の一分に心の臓を縮めていると、  
 驚破、障子がガタガタと……開きかけて、グツと支えたのを其儘  
 にして、雪江さんが隙間から覗込みながら、

「勉強？」

と一寸首を傾げた。これが何を聞く時でも雪江さんの為る癖  
 で、看慣れては居るけれど、私は常も可愛らしいと思う。不断着  
 だけれど、荒い縞の着物に飛白の羽織を着て、華美な帯を締めて、

障子に掴つかまつて斜はすに立つた姿も何となく目に留とまる。

ああ求むる者に与えられたのだ。神よ……といたいような気になって、無論莞爾にこにこ々々となつて、

「いいえ……まあ、お入んなさい。」

「じゃ、私話あたしして入いくわ。奥は一人で淋しいから。」

珍客々々！ 之を優待せん法はない。よ、よ、と雪江さんが掛声をして障子を明けようとするけれど、開あかないのを、私は飛んで行って力任せにウンと引開けた。何だか領元えりもとからぞくぞくする程嬉しい。

生憎あいにくと火鉢は私の部屋には無かつたけれど、今迄敷いていた赤ゲツトを、四ツに畳んだのを中央まんなかへ持出して、其でも裏反うらがえ

しにして勧めると、遠慮するのか、それとも小汚こぎたないと思つたのか、敷いて呉れないから、私は黙つて部屋を飛出した。雪江さんは後あとで定めて吃驚びっくりしていたろうが、私は雪江さんの部屋へ座布団を取りに行つたので、是だけは我ながら一生の出来だつたと思う。

席が出来ると、雪江さんが、

「貴方あなた、御飯ごはんが食べられて？ 私何あたしぼ何でも喰べられなかつたわ、余あんまり先刻さつき詰つ込んだもんだから。」

と微笑にっこりする。何時いつ見ても奇麗はなみな歯並はなみだ。

私も矢張やっぱり莞爾にっこりして、

「私も食べられませんでした……」

おおうそ  
大嘘！ 実は平生いっしょの通り五杯喰べたので。

雪江さんは国産れでも東京育ちだから、

「……にもお芋があつて？」

「有りますとも。」

「じゃ、帰つても不自由はないわねえ。」

と又にっこり微笑する。

私も高笑いをした。雪江さんの言草が可笑おかしかつたばかりじゃない。実は胸に余る嬉しさやら、何やら角かやら取交とりませて高笑いしたのだ。

それから国の話になつて、国の女学生は如何どんな風をしているの、英語は何どのくらい位の程度だの、洋楽は流行はやるかのと、雪江さんは其そ

様な事ばかり気にして聞く。私は大事の用を控えているのだ。其それどころ  
 処ぢやないけれど、仕方がないから相手になつていると、チ  
 ョツ、また松の畜ちくしやう生せいが邪魔に来やがった。

## 三十八

松が来て私はうんざりして了つたが、雪江さんは反かえつて差さしむか  
 向いの時よりはすみ出して、果は松の方へ膝を向けて了つて、松  
 ばかりを相手に話をする。私は居るか居ないか分らんようになつ  
 て了つた。初は少からず不平に思ったが、しかし雪江さんを観て  
 いるのには、反て此方が都合が好いい。で、母屋おもやを貸切つて、底ひさしで

満足して、雪江さんの白いふツくりした面かおを飽かず眺めて、二人の話はなしを聴いていると、松も能く饒舌しゃべるが、雪江さんも中々負よていない。話は詰らん事ばかりで、今度開店した小間物屋は安売だけれど品しなが悪いの、お湯屋ゆやのお神さんのお腹がまた大きくなつて来月が臨月だの、八百屋の猫が児を五足生んで二足喰べて了つたそうだと、要するに愚にも附かん話ばかりだが、しかし雪江さんの様子が好いい。物を言う時には絶えず首を揺うごかす、其度にリボンが飄々ひらひらと一緒に揺うごく。時々は手真似もする。今朝結いつた束髪あつりめがもう大分乱れて、後毛おくれげが頬ほを撫なでるのを蒼蠅うるさそうに搔かきあ上げる手て附つも好いい。其様そんな時には彼あれは友禅メリンスというものだから、縮ちりめ緬めんだか、私には分らないが、何でも赤い模様や黄ろい形かたが雑ごちやご

然ちやと附いた華美はでな襦袢じゆばんの袖口から、少し紅味あかみを帯びた、白い、滑すべつこそうな、柔かそうな腕が、時とすると二の腕まで露あらわれて、も少し持上げもちやたら腋の下が見えそうだと、気を揉んでうちいる中に、又旧もとの位置に戻つて了う。雪江さんは処女むすめだけれど、乳の処がふツくりと持上つている。大方乳首なんぞは薄赤くなつてゐるばかりで、有るか無いか分るまい……なぞと思ひながら、雪江さんの面かおばかり見ていると、いつしか私は現実を離れて、恍惚うっとりとなつて、雪江さんが何だか私の……妻さいでもない、情人ラヴでもない……何だか斯う其様そんなような者に思われて、兎に角私の物のように思われて、今は斯うして松という他人を交ませて話をしてゐるけれど、今に時刻が来れば、二人一緒に斯う奥まった座敷へ行く。と、もう其処

に床が敷つてある。夜具も郡内か何かだ。私が着物を脱ぐと、雪江さんが後からフワリと寝衣を着せて呉れる。今晚は寒いわねえとか雪江さんがいう。む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帯をグルグルと巻いて床へ潜り込む。雪江さんが私の脱棄を畳んでいゝ。其様な事は好加減にして早く来て寝なと私がいう。あいといつて雪江さんが私の面を見て微笑する……

「ねえ、古屋さん、然うだわねえ？」

と雪江さんが此方に向いたので、私は吃驚して眼の覚めたような心持になつた。何でも何か私の同意を求めているのに違ひないから、何だか仔細は分らないけれど、

「そうですとも……」

と跋ぼつを合わせる。

「そら、御覧な。」

と雪江さんは又松の方を向いて、又話に夢中になる。

私はホツと溜息をする。今の続きを其儘にしてううのは惜しい。もう一度幻想でも何でも構わんから、もう一度、今の続きを考えたいと思うけれど、もう気が散つて其心持になれない。仕方がないから、黙つて話を聴いている中うちに、又いつしか恍惚うつとりと腑はらが脱けたようになって、雪江さんの面かおが右を向けば、私の面かおも右を向く。雪江さんの面かおが左を向けば、私の面かおも左を向く。上を向けば、上を向く、下を向けば下を向く……

## 三十九

パタリと話が休やんだ。雪江さんも黙もつて了りう、松も黙もつて了りう。何処どこでか遠方とんぱうで犬の啼声なきごゑが聞える。所謂いわゆる天使てんしが通とつたのだ。雪江ゆきえさんは欠あびをしながら、序ついでに伸のびもして、

「もう何時いつだろう？」

「まだ早はやいです、まだ……」

と私わたしが狼狽あわてて無理無理に早はやい事ことにしてして了りう心こゝろを松まつは察さしないで、

「もう九時過すぎぎたでしょうよ。」

「阿父とうさんも阿母かあさんも遅おそいのねえ。何なにを為してるンだろう？」

と又また欠あびをして、「ああああ、古屋ふるやさんの勉強めいけんの邪魔じゃましちゃッ

た。あたし私もう奥へ行くわ。」

私ちっが些とも邪魔な事はないといって止めたけれど、最う斯うなつては留とまらない、雪江さんは出て行つて了う。松も出て行く。私一人になつて了つた。詰らない……

ふと雪江さんの座蒲団が眼に入る……之れを見ると、何だか捜みつかしていた物が看附つたような気がして、卒然いきなり引浚ひっさらつて、急いで起上たちあがつて雪江さんの跡を追つた。

茶の間の先の暗い処で雪江さんに追付おっついた。

「なあに？ ……」

と雪江さんの吃驚びっくりしたような声がして、大方振向いたのだらう、面かおの輪廓だけが微ほの白しろく暗あん中ちゆうに見えた。

「貴嬢あなたの座布団を持って来たのです。」

「あ、そうだツけ。忘れちゃツた。爰ここへ頂戴ちようだい」、と手を出したようだった。

私は狼狽あわてて座布団を後へ匿かくして、

「好いいです、私が持つてくから。」

「あら、何故？」

「何故でも……好いいです……」

「そう……」

と何だか変に思った様子だったが、雪江さんは又暗中を動き出す。暗黒くらやみで能くは分らないけれど、其姿が見えるようだ。私も跡から探足さぐりあしで行く。何だか気が焦あせる。今だ、今だ、と頭の何

処わめかで喚く声がする。如何どうか為しなきやならんような気がして、む  
 ずむずするけれど、何こわだか可怕こわくて如何どうも出来ない。咽喉のどが乾かわ  
 て引ひ付きつそうで、思おもわずグビリと堅かた唾たを吞くんだ……と、段々明あ  
 くなつて、雪江さんの姿が瞭はつきり然明あるみに浮出うす。もう雪江さん  
 の部屋の前へ来て、雪江さんの姿は衝つと障子の中うちへ入いつて了しまつた。  
 其を見ると、私は萎靡がっかりした。惜あしいような気のする一方で、何  
 故ゆだか、まず好あかつたと安心あした気味もあつた。で、続ついて中へ  
 入いつて、持もつて来た座布団を机の前に敷しいて、其処そこを退のくと、雪  
 江さんは礼を言いながら、入替いりかわつて机の前に坐まつて、

「遊あんでらつしやいな。」

と私の面かおを瞻み上あげた。ええとか、何とかいって脚蹠もじもじしている

私の姿を、雪江さんはジロジロ視ていたが、

「まあ、貴方あなたは此地こっちへ来てから、余程よっぽど大きくなつたのねえ。今じゃ私あたしとは屹度きつと一尺から違つてよ。」

「まさか……」

「あら……屹度きつと違ちよつとうわ。一寸然ちよつとうしてらッしやいよ……」

といいながら、衝つと起たつたから、何を為するのかと思つたら、ツカツカと私の前へ来て直ひたと向合あつた。前髪あごが顚あごに触れそうだ。紛ぶんと好いい匂においが鼻はなを衝つく。

「ね、ほら、一尺は違ちがうでしょう？」と愛度あどけ気けない白しろい面かおが何なん気げなく下したから瞻み上あげる。

私はわなわなと震ふるい出した。目めが見みえなくなつた。胸むねの鼓動こどうは

脳へまで響く。息が逸はずんで、足が竦すくんで、もう凝じっとして居られな  
い。抱付くか、逃出すか、二つ一つだ。で、私は後のちの方針を執とつ  
て、物をも言わず卒いきなり然雪江さんの部屋を逃出して了つた……

## 四十

何故彼あのとき時私は雪江さんの部屋を逃出したのだというと、非常  
に怕おそろしかったからだ。何が怕おそろしかったのか分らないが、唯何  
がなしに非常に怕おそろしかったのだ。

生死の間あいだに一線を劃して、人は之を越えるのを畏おそれる。必ずし  
も死を忌いむからではない。死は止むを得ぬと観念しても、唯此一

線が怕ろしくて越えられんのだ。私の逃出したのが矢張それだ。  
女を知らぬ前と知った後との分界線を俗に皮切りという。私は性  
慾に駆られて此線の手前迄来て、これさえ越えれば望む所の性慾  
の満足を得られると思ひながら、此線が怕ろしくて越えられな  
ったのだ。越えたくなくて越えなかつたのではなくて、越えたく  
ても越えられなかつたのだ。其後幾年か経つて再び之を越えん  
とした時にも矢張怕ろしかつたが、其時は酒の力を藉りて、半  
狂気になつて、漸く此怕ろしい線を踏越した。踏越してから酔  
が醒めると何とも言えぬ厭な心持になつたから、又酒の力を藉り  
て強いて纒に其不愉快を忘れていた。此様な厭な想いをして迄も  
性慾を満足させたかつたのだ。是は相手が正当でなかつたから、

即ち売女ばいじょであつたからかというに、そうでない。相手は正当の新婦と相知る場合にも、人は大抵皆然うだと云う。殊に婦人が然うだという。何故だろう？

之と縁のある事で今一つ分らぬ事がある。人は皆隠かくれてエデンの果を食このみくらつて、人前では是を語ることさえ恥はずる。私の様に斯うして之を筆にして憚らぬのは余程力むから出来るのだ。何故だろう？ 人に言われんような事なら、為せんが好いいじやないか？ 敢てするなら、誰たれの前も憚らず言うが好いいじやないか？ 敢てしなから恥はずるとは矛盾でないか？ 矛盾だけれど、矛盾と思う者も無いではないか？ 如何どういう訳だ？

之を靈肉の衝突というか？ しかれば、靈肉一致したら、如何どう

なる？ 男女相知るのを怕ろしいとも恥かしいとも思わなくなるのか？ 畜生ちくしょうと同じ心持になるのか？

トルストイは北方の哲人だと云う。此哲人は如何どんな事を言っている。クロイツェル、ソナタの跋に、理想の完全に実行し得べきは真の理想でない。完全に実行し得られねばこそ理想だ。不犯ふぼんはキリストきよう基督教の理想である。故に完全に実行の出来ぬは止むを得ぬ、キリストきよう基督教徒は之を理想として終生追求すべきである、と言って、世間の夫婦には成るべく兄妹けいまいの如く暮らせと勧めている。

何の事だ？ 些ちっとも分らん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきでないか？ 不犯ふぼんが理想で、女房を貰つて、子を生ませていたら、普通の墮落に輪を掛た墮落だ。加之しかも一旦貰つた女房は

去るなど言うでないか？ 女房を持つのが墮落なら、何故一念発起して赤の他人になつたえといわぬ。一生離れるなどは如何いう理由だ？ 分らんじやないか？

今食う米が無くて、ひもじい腹を抱て考え込む私達だ。そんな伊勢屋の隠居が心学に凝り固まったような、そんな暢気な事を言つて生きちやいられん！

## 四十一

其後間もなく雪江さんのお婿さんが極つた。お婿さんが極ると、私は何だか雪江さんに欺かれたような心持がして、口惜しくて耐

らなかつたから、国では大不承知であつたけれど、口実を設けて体よく小狐おぎつねの家うちを出て下宿して了つた。

馬鹿な事には下宿してから、雪江さんが万一鬱ひよつとふさいでいぬかと思つて、態々わざわざ様子を見に行つた事が二三度ある。が、雪江さんはいつも一向鬱ふさいで居なかつた。反ツてお媚さんが極きまつて怡々いそいそしているようだつた。それで私も愈忌いよいよいまいま々しくなつて、もう余り小狐へも足踏あしぶみせぬ中うちに、伯父さんが去る地方の郡長に転じて、家族を引纏めて赴任して了つたので、私も終ついに雪江さんの事を忘れて了つた。これでお終局しまいだ。

余り平凡だ下らない。こんなのは単純な性慾の発動というもので、恋ではない、恋はも少ちっと高尚な精神的の物だと、高尚な精神

的の人は言うかも知れん。然うかも知れん。唯私のような平凡な者の恋はいつも斯うだ。先ず無意識或は有意識ゆういしきに性慾が動いて満足を求めめるから、理性や趣味性が動いて其相手を定めて、始めて其処に恋が成立する。初から性慾の動かぬ場合に恋はない。異性でも親兄弟に恋をせぬのは其為だ。青年の時分には、性慾が猛烈に動くから、往々理性や趣味性の手を待たんで、自分と盲動して撞着ぶつつた者を直相手すくにする。私の雪江さんに於けるが、即ち殆ど其だ。私共の恋の本体はいつも性慾だ。性慾は高尚な物ではない、が、下劣な物とも思えん。中性だ、インヂフェレントの物だ。私共の恋の下劣に見えるのは、下劣な人格が反映するので、本体の性慾が下劣であるのではない。

で、私の性慾は雪江さんに恋せぬ前から動いていた。から、些ちつとも不思議でも何でもないが、雪江さんという相手を失った後のちも、私の恋は依然として胸に残っていた。唯相手のない恋で、相手を失つて彷徨うろろうろしている恋で、其本体は矢張り満足を求めて得ぬ性慾だ。露骨に言つて了えば、誠に愛想あいその尽きた話だが、此猛烈な性慾の満足を求むるのは、其時分の私の生存の目的の——全部とはいわぬが、過半であつた。

これは私ばかりでない、私の友人は大抵皆然うであつたから、皆此頃からポツポツ所謂いわゆる「遊び」を始めた。私も若し学資に余裕が有つたら、矢張ヤッぱり「遊」んだかも知れん。唯学資に余裕がなかつたのと、神経質で思切つた乱暴が出来なかつたのとで、遊びた

くも遊び得なかつた。

友人達は盛さかんに「遊」ぶ、乱暴に無分別に「遊」ぶ。其を觀ていと、羨うらやましい。が、弱い性質の癖に極めて負惜しみだつたから、私は一向羨うらやましそうな顔もしなかつた。年長の友人が誘つても私が応こたぜぬので、調から戯かいに、私は一人で墮落して居るのだらうというよような事を言つた。恥かかしい次第だが、推測通りであつたので、私は赫かとなつた。血け相つを変かえて、激論を始めて、果なはぐりあいあ合あまでして、遂に其友人とは絶交して了つた。

斯かうして友人と喧嘩けん迄して見れば、意地としても最もう「遊」ばれない。で、不本意ながら謹きん直家ちよくかになつて、而そして何ともえたいの知れぬ、謂いれのわない煩悶ぼんに囚とらられていた。

## 四十二

ああ、今日は又頭がふらふらする。此様な日にや碌な物は書け  
まいが、一日抜くも残念だ。向鉢巻むこうはちまきでやツつけろ！

で、私は性慾の満足を求めても得られなかつたので、煩悶して  
いた。何となく世の中が悲觀されてならん。友人等は「遊」ぶ時  
には大に「遊」んで、勉強する時には大に勉強して、何の苦もな  
く、面白そうに、元氣よく日を送っている。それを観ていると、  
私は癩しやくに触ふつて耐たまらない。私の煩悶して苦むのは何となく友人等  
の所為せいのように思われる。で、責めてもの腹慰はらいせに、薄志の弱行

のと口を極めて友人等の公然の墮落を罵つて、而して私は独り超然として、内々ないないで墮落していた。若し友人等の墮落が陽性なら、私の墮落は陰性だった。友人等の墮落が露骨で、率直で、男らしいなら、私の墮落は……ああ、何と言おう？ 人間の言葉で言えない。私は畜生ちくしやうだった……

が、こつそり一人で墮落するのは余り没趣味で、どうも夫それでは趣味性が満足せぬ。どうも矢張異性の相手が欲しい。が、其相手は一寸得られぬので、止むを得ず当分文学で其不足を補つていた。文学ならば人聴ひとぎきも好い。これなら左程せに銭も入らぬ。私は文学を女の代りにして、文学を以つて墮落を潤じゆん色しよくしていたのだ。私の謂う文学は無論美文学の事だ、殊に小説だ。小説は一体如ど

何ういうものだから、知らん、唯私の眼に映ずる小説は人間の墮落を  
 潤じゆん色しよくするものだ。通人の話に、道楽の初は唯色いろを漁ぎよする、膏こ  
 盲うこうに入ると、段々贅沢ぜいさくになって、唯色いろを漁ぎよするのでは面白くな  
 くなる、惚れたとか腫はれたとか、情じよう合あいで異性と絡からんで、唯の  
 漁ぎよ色しよくに趣おもむきを添おえたと云う。其処だ、其処が即ち文学の  
 需要の起る所以ゆえんだ。少くも私は然うであつた。で、此目的で、最  
 初は小狐おぎつねに居た頃喰付いた人情本を引続き耽たんどく読してみたが、  
 数を累かさねると、段々贅沢ぜいさくになって、もう人情本も鼻に附く。同じ  
 性慾の発展の描写でも、もう少し趣味のある描写を味わつてみたい。  
 そこで、種いろ々いろと小説本を涉しやうりよう獵ようして、終ついに当代の大家の作に  
 及んで見ると、流石さすがは明治の小説家だ、性慾の発展の描写が巧たくみに

人生観などで潤じゆんしよく色いろされてあつて、趣味がある、面白い。斯う  
いう順序で私の想像で墮落する病やまいますますうこうは益膏えきこう盲めくらに入つて、終ついには西  
洋へ迄手を出して、チツケンスだ、サツカレーだ、ゾラだ、ユゴ  
ーだ、ツルゲーネフだ、トルストイだ、という人達の手を藉かりて、  
人並にしていれば、中性のインヂフェレントの性慾を無理に不自  
然な病的の物にして、クラフトエービングやフォレールの著書中  
に散見するような色情狂に想像で成済なりすまして、而そして独り高尚が  
つていた。

いや、独り高尚がつていたのでない。それには同気相求めて友  
が幾いくたり人も出来た。同県人で予備門から後文科のちへ入いった男が有つ  
たが、私は殊に其感化を受けた。ああ、皆自分が悪かつたので、

人を怨んでは済まないが、私は今でも此男に逢うと、何とも言えぬ厭な心持になる。儘になるなら刺違さしちがえて死で了いたく思う事もある。

## 四十三

私が感化を受けた友というのは私より一つ二つ年上であつた。文学が専門だから、文学書は私より余計読でいたという丈で、何でもない事だが、それを私は大層偉いように思つていた。まだフアウストを読まぬ時、フアウストの話きかを聴される。なに、友は愚にも附つかん事を言っているのだが、其愚にも附かん事を、人生だ、

智慾だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脱げだつだ、というような意味の有り気な言葉で勿体を附て話されると、何だか難ありがた有がたくなつて来て、之を語る友は偉いと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。友は唯私より少し早くファウストという古本ふるほんを讀よんだ丈の事だ。讀んで分つた所で、ファウストが何程どれほどの物だ？ 技巧の妙を除いたら、果してどれ程の価値がある？ 況いや友わんはあやふやな語学の力で分らん処を飛ばし飛ばし讀んだのだ。讀んで幼稚な頭で面白いと感じた丈だ、それも聞き怯おじして、從頭てんから面白いに極きめて掛つて、半分は雷同で面白いと感じた丈だ。讀んで十分に味わい得た所で、どうせ人間の作つた物だ、左程の物でもあるまいに、それを此様こんな讀方をして、難ありがた有がたがつて、偶之たまたまを讀まぬ者を何程どれほど劣等の人間

かのように見<sup>み</sup>下<sup>くだ</sup>し、得意になつて語る友も友なら、其を聴いて敬服する私も私だ。心ある人から観たら、嘸<sup>さ</sup>ぞ苦々しく思われたらう。

此友から私は文学の難<sup>ありがた</sup>有<sup>い</sup>訳<sup>を</sup>種<sup>いろいろ</sup>々と説き聴かされた。今ではもう大抵忘れて了つたけれど、何でも文学は真理に新しい形を賦<sup>ふ</sup>して其生命を直接に具体的に再現するものだ、とか聴かされて、感服した。自然の真相は普通人に分らぬ、詩人が其主観<sup>とお</sup>を透して描いて示すに及んで、始めて普通人にも臆<sup>おぼろげ</sup>氣に分つて人間の宝となる、とか聴かされて、又感服した。恋には人間の真髓が動く、とか聴かされて、又感服した。其他<sup>そのた</sup>まだ種<sup>いろいろ</sup>々聴かされて一々感服したが、此<sup>こん</sup>様な事は皆愚<sup>たわごと</sup>言<sup>こと</sup>だ、世迷<sup>よまいごと</sup>言<sup>こと</sup>だ。空想に生

命を託して人生を傍観するばかりで、古本と首引くびびきして瞑想するばかりで、人生に生命を託して人生と共に浮沈ふちんじょうか上下せんでも、人生の活機くわつきに触れんでも、活眼を以て活勢を機微あいだの間に察し得んでも、如何どうかして人生が分るものとしても、友のいうような其様そのんな文学は、何処かで誰かが空想した文学で、文学の實際でない。文学の實際は人間の墮落じゆんしよくを潤みかた色しよくして、懦弱だじやくな人間を更に懦弱だじやくにするばかりだ。私の觀方みかたは偏へんしているというか？ 唯弊へいを見て利を見ぬというか？ しかし利よりも弊へいの勝つたのが即ち文学の實際ではないか？ 私の觀方みかたより文学の實際が既に弊へいに偏へんしているではないか？

ああ、しかし、文学を責めるより、友を責めるより、自ら責め

の方が当つていよう。私のような斗筭やくぎな者は、例えば聖賢の遺書を讀んでも、矢張害やっぱりを受けるかも知れん。私は自然だ人生だと口には言つていたけれど、唯書物で其様そんな言葉を覚えただけで、意味が能く分つていゝるのではなかつた。意味も分らぬ言葉を弄もてあそんで、いや、言葉に弄もてあそばれて、可惜浮世あたらを夢にして渡つた。詩人と名が付きや、皆普通の人より勝まさつてるように思つていた。小説、殊に輸入小説には人生の真相が活字の面おもてに浮いてゐるように思つていた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るように思つていた。作の新旧を論じて其価値を定めていた。自分は此様こんな下らん真似をしていながら、他の額たに汗あせして着実の浮世を渡る人達たまたまが偶文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物ののしと罵り、俗衆ののしと罵つて、独り自みずから高しとし

ていた。独り自ら高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落していた。

ああ、恥かしくて顔が熱<sup>ほて</sup>る。何たる苦々しい事であつた。私は当時の事を想い出す<sup>いだ</sup>度に、人通りの多い十字街<sup>よつっじ</sup>に土下座して、通る人毎に、踏んで、蹴て、唾を吐懸けて貰<sup>た</sup>い度<sup>たい</sup>のような心持になる……

## 四十四

文学の毒に中<sup>あて</sup>られた者は必ず終<sup>つい</sup>に自分も指を文学に染めねば止まぬ。私達が即ち然うであつた。先ず友が何か下らぬ物を書いて

私に誇ひけら示した。すると私も直ぐ卑さしい負ぬ気を出して短篇を書いた。どうせ碌な物ではない。筋はもう忘れて了つたが、何でも自分を主人公にして、雪江さんが相手の女主人じよしゅじんこう公で、紛ごたごた紜ごたごたした挙句に幾いくたび度となく姦淫するのを、あやふやな理想や人生観で紛まぎらかして、高尚めかしてすじり振もじった物であつたように記憶する。自惚うぬぼれは天性だから、書上げると、先ず自分と自分に満足して、これなら当代の老大家の作に比しても左さして遜そん色しよくは有るまい、友に示みせたら必ず驚くと思つて、示みせたら、友は驚かなかつた。好いい処もあるが、もう一息だと言う様なことをいう。私は非常に不平だつた。が、局量の狭い者に限つて、人の美を成すを喜ばぬ。人を褒ほめれば自分の器量が下るとでも思うのか、人の為し

た事には必ず非難を附けたがる、非難を附けてその非難を附けたのに必ず感服させたがる。友には其癖があつたから、私は友の評を一概に其癖の言わせる事にして、実に卑劣な奴だと思つた。

何とかして友に鼻を明させて遣りたい。それには此短篇を何処かの雑誌へ載せるに限ると思つた。雑誌へ載せれば、私の名も世に出る、万ひよつと一したら金も獲られる、一挙兩得だというような、愚劣な者の常として、何事も自分に都合の好い様にばかり考えるから、其そん様な虫の好い事を思つて、友には内ないない々々で種いろいろ々と奔走して見たが、如何どうしても文学の雑誌に手蔓てづるがない。其そのうち中に或人が其は既に文壇で名を成した誰たれかに知ちかづき己おのれになつて、其人の手を

経て持込むが好いと教えて呉れたので、成程と思つて、早速てづる手蔓を求めて某大家の門を叩いた。

某大家は其頃評判の小説家であつたから、立派な邸宅を構えていようとも思わなかつたが、定めて瀟洒しょうしゃな家うちに住つて閑雅な生活をしているだろうと思つて、根岸ねぎしの其宅を尋ねて見ると、案外見すばらしい家うちで、文壇で有名な大家のこれが住居すまいとは如何どうしても思われなかつた。家うちも見窄みすぼらしかつたが、主人も襟えり垢あかの附た、近く寄つたら悪臭わるぐさい匂においが紛まじりしそつな、銘仙めいせんか何かの衣服きで、銀縁眼鏡ぎんぶちめがねで、汚い髻ひげの処ところ斑まだらに生えた、土気色をした、一寸見れば病人ちよつとのような、陰気な、くすんだ人で、ねちねちとした弁で、面かおを看合みあせると急いで俯向うつむいて了う癖がある。通され

たのは二階の六畳の書齋であつたが、庭を瞰みおろ下すと、庭には樹から樹へ紐ひもを渡して襦袢おしめが幕のように列べて乾ほしてあつて、下座したざし敷きで赤児あかごのピイピイ泣く声こゑが手に取るように聞える。

私は甚ひどく輕蔑の念を起した。殊に庭の襦袢おしめが主人の人格を七分方下げるように思つたが、求むる所があつて来たのだから、質樸な風をして、誰たれも言うような世辞を交ませて、此人の近作を読んで非常に敬服して教えを乞こひに來たようにいうと、先生畳じつを凝みと視詰つめて、あれは咄嗟とつさの作で、書懸かきかけると親類に不幸が有つたものだから、とかいうような申訳めいた事を言つて、言外に、落着いて書いたら、という余意を含める。私は腹の中で下らん奴だと思つたが、感服した顔をして媚こびたような事を言つと、先生万更まんざら

厭な心持もせぬと見えて、稍調子付いて来て、夫から種々文学上の事に就いて話して呉れた。流石は大家と謂われる人程あつて、驚くべき博覧で、而も一家の見識を十分に具えていて、ムツツリした人と思いの外、話が面白い。後進の私達は何の点に於ても敬服しなければならん筈であるが、それでも私は尚お輕蔑の念を去る事が出来なかつた。で、終局しまいに只ほんの看みて貰えば好いいように言つて、雑誌へ周旋を頼む事は噫おくびにも出さないで、持つて行つた短篇を置いて、下宿へ歸つて来てから、又下らん奴だと思つた。

## 四十五

某大家は兎に角大家だ。私は青二才だ。何故私は此人を輕蔑したのか？襟えり垢あかの附いた着物を着ていたとて、庭に襦むつき袢きが乾ほしてあつたとて、平生へいせい名利めいりの外ほかに超然たるを高しとする私の眼中に、貧富の差は無い筈である。が、私は實際先生の貧乏臭いのを看て、輕蔑の念を起したのだ。矛盾だ。矛盾ではあるが、矛盾が私の一生だ。

医者の不養生という。平生思想を性命として、思想に役せられている人に限つて、思想が薄弱で正可まさかの時の用に立たない。私の思想が矢張りやつぱ其だった。

けれど、思想々と大層らしく言うけれど、私の思想が一体何んだ？大抵は平生親しむ書卷うちの中から拾つて来た、謂わば古手

の思想だ。此蒼褪あおぞめた生氣のない古手の思想が、意識の表面で凝こつて髣髴ほうふつとして別天地を拓ひらいている処を見ると、理想だ、人生観だというような種々の觀念が美しい空想の色彩を帯びて其そのうち中に浮游うきうしていて、腹が減すいた、錢が欲しいという現実界に比べれば、はるかに美しいように見える。浮氣うきな不真面目な私は直ぐ好いい処を看附けたという氣になつて、此別天地へ入り込んで、其処から現実界を眺めて罵ののしつていたのだ。我存在の中心を古手の思想に託たくして、夫それで自ら高みしとしていたのだ。が、私の別天地は譬たとえば塗ぬり盆ぼんへ吹懸ふけた息氣いきのような物だ。現実界に触れて実感えを得ると、他愛もなく剥はげて了しまう、剥はげて木き地じが露あらわれる。古手の思想は木地を飾つても、木地を蝕する力に乏しい。木地に食入つて吾

を磨くのは実感だのに、私は第一現実を輕蔑していたから、その  
実感を得る場合が少く、偶得た実感も其取扱を誤っていたから、  
木地の吾を磨く足にならなかつた。従つて何程古手の思想を積ん  
で見ても、木地の吾は矢張故のふやけた、秩序のない、陋劣な  
吾であつた。

こうして別天地と木地の吾とは別々であつたから、別天地に遊  
んでいる時と、吾に戻つた時とは、勢い矛盾する。言行は始終一  
致しない。某大家に対しても、未だ会わぬ中は多少の敬意を有つ  
ていたけれど、一たび其人の土氣色した顔が見え、襟垢が見え、  
襠褌が見えて想像中の人が現実の人となると、木地の吾が、貧乏  
だから下らんと、別天地では流行せぬ論法で論断して之を輕蔑し

て了つたのだ。

唯当時私はまだ若かつたから、陋劣ろうれつな吾にしても、私の吾には尚お多少の活気が有つて、多少の活機を捉え得た。文壇の大家になると、古手の思想が凝固こりかたまつて、其人の吾は之に压倒せられ、纔わずかに残喘ざんぜんを保っているようなのが幾らもある。斯ういう人が、現実に触れると、気の毒な程他愛の無い人になる。某大家が即ち其であつた。だから、人生を論じ、自然を説いて、微ひらを拆ひらき、幽ひらを闡ひらく頭はあつても、目前で青二才の私が軽蔑しているのが、先生には終ついに見えなかつたのだ。

二三日して行つて見ると、先生も友と同じ様に、好い処も有るが、もう一息だというような事を言う。嘘だ。好い処も何も有るのじゃない。不出来だと直言が出来なくて斯う言つたのだ。先生も目が見えん人だが、私も矢張やっぱり自分の事だと目が見えんから、其を真まに受けて、書直して持つて行くと、先生が氣の毒そうに趣向をも少し變えて見ろと云う。言う通りに趣向をも少し變えて持つて行くと、もう先生も仕方がない、不承々々に、是で好いと云う。なに、是で好い事は些ちつとも無いのだが、先生は氣が弱くて、もう然う然うは突戻し兼たのだ。先生に曰わせると、之を後進に対する同情だという。何の同情の事が有るものか！ 少しでも同情が有

るなら、頭から叱付けて、文学などに断念させるが好いのだ。是が同情なら、同情は「え切らん」の別名だ。どうせ思想に囚われて活機の分らぬ人の為る事だから、お飾の思想を一枚剥れば、下からいつも此様な愛想の尽きた物が出て来るに不思議はないが、此方も此方だ、其様な事は少しも見えない。本当に是で好い事だと思つて、其言葉の尾に縋つて、何処かの雑誌へ周旋をと頼んだ。こんなのを盲目の紛れ当りと謂うのだろう。機を制せられて、先生も仕方がなさそうに是も受込む。私達の応対は活きた人には側で聴いていられたものであるまい。

一月程して私の処女作は或雑誌へ出た。初恋が霜げて物にならなかつた事を書いたのだからとて、題は初霜だ。雪江さんの記念

に雪江せつこうと署名した。先生が筆を加えて私の文は行方不明になつた処も大分あつたが、兎も角も自分の作が活字になつたのが嬉しくて嬉しくて耐たまらない。雑誌社から送つて来るのを待ちかねて、近所の雑誌店へ駆付けて、買つて来て、何遍か繰返して読んでも読んでも読飽よみあかなかつた。真面目な人なら、此処らで自分の愚劣を悟る所だろうが、私は反うぬぼて自惚うぬぼれて、此分で行けば行ゆくゆく々は日本の文壇を震しんが駭がいさせる事も出来ようかと思つた。

聊いささかながら稿料も貰えたから、二三の友を招いて、近所の牛肉店で祝宴を開いて、其晩遂に「遊び」に行つた。其時案外不愉快であつたのは曾て記した通り。皆嬉しさの余りに前後を忘却したので。

これが私の小説を書く病付きで又「遊び」の皮切であつたが、それも是も縁の無い事ではない。私の身では思想の皮一枚剥れば、下は文心即淫心だ。だから、些とも不思議はないが、同時に両方に夢中になつてる中に、学校を除籍された。なに、月謝の滞りが原因だつたから、復籍するに造作はなかつたが、私は考えた、「寧その事小説家になつて了おう。法律を学んで望み通り政治家になれたつて、仕方がない。政治家になつて可<sup>あた</sup>惜一生を物質的文明に献<sup>あ</sup>げて了うより、小説家になつて精神的文明に貢献した方が高尚だ。其方が好<sup>い</sup>い……」どうも仕方がない。活眼を開いて人生の活相を觀得なかつた私が、例の古手の旧式の思想に捕<sup>と</sup>われて、斯う思つたのは仕方がないが、夫<sup>それ</sup>にしても、同じ思想に捕<sup>と</sup>われる

にしても、もう少し捕えられ方が有りそうなものだった。物心ぶっしん一  
 如によと其様な印度臭いんどくさい思想に捕われるのではないが、所謂いわゆる物質的文  
 明は今世紀の人を支配する精神の発動だと、何故思おもれなかつたろ  
 う？ 物質界と表裏して詩人や哲学者が顧かえりみぬ精神界が別にある  
 と、何故思おもれなかつたろう？ 人間の意識の表面うかんに浮だ別天地の  
 精神界と違つて、此精神界は着実で、有力で、吾々の生存に大関  
 係があつて、政治家は即ち此精神界を相手に仕事をするものだと、  
 何故思おもわれなかつたろう？ 此道理をも考えて、其上で去就を決  
 したのなら、真面目な決心とも謂えようが……ああ、しかし、何ど  
 の道思想みちに捕われては仕方がない。私は思想で、自ら欺いて、其そ  
 様な浅墓あさはかな事を思つていたが、思想に上らぬ實際の私は全く別

の事を思っていた。如何どうな事を思っていたかは、私の言う事では分らない、是から追々すす為る事で分る。

## 四十七

私は其時始て文士になろうと決心した、トサ後のちには人にも話していたけれど、事実でない。私は生来いま未だ曾て決心をした事の無い男だ。いつも形勢が既に定さだまつて動かすべからずなつて、其形勢に制せられて始て決心するのだから、学校を除籍せられたばかりでは、未だ決心が出来なかつた。唯下宿ねころに臥転ねころんでグズリグズリとして文士に為りそうになつていたのだ。

始めて決心したのは、如何してか不始末が国へ知れて父から驚いた手紙の来た時であつた。行懸りで愚図々々はしていられなくなつたから、始めて斯うと決心して事実を言つて同意を求めてやると、父からは怒つた手紙が来る、母からは泣いた手紙が来る。親達が失望して情ながる面は手紙の上に浮いて見えるけれど、こうなると妙に剛情になつて、因襲の陋見に囚われている年寄の白髪頭を冷笑していた。親戚の某が用事が有つて上京した序に、私を連れて帰ろうとしたが、私は頑として動かなかつた。そこで学資の仕送りは絶えた。

こうなるは最初から知れていながら、私は弱つた。仕方がないから、例の某大家に縫つて書生に置いて貰おうとすると、先生は

相変らずグズリグズリと煮切らなかつたが、奥さんが飽<sup>あく</sup>迄<sup>まで</sup>不承知で、先生を差<sup>さ</sup>措<sup>お</sup>いて、御自分の口から断<sup>きつぱり</sup>然断<sup>り</sup>られた。私は案外だった。頼めば二つ返事で引受けて呉れるとばかり思っていたから、親戚の者が連れて行こうとした時にも、言わでももの広言迄吐いて拒んだのだが、こう断られて見ると、何だか先生夫婦<sup>あごむ</sup>に欺<sup>あざむ</sup>かれたような気がして、腹が立って耐<sup>な</sup>らなかつた。世間の人は皆私の為に生きていような気でいたからだ。

もう斯うなつては、仕方がない、書けても書けんでも、筆で命<sup>つな</sup>を繋<sup>つな</sup>ぐより外<sup>ほか</sup>仕方がない。食うと食わぬの境になると、私でも必死になる。必死になつて書いて書いて書<sup>かき</sup>捲<sup>まく</sup>つて、その度に、悪感情は抱<sup>いだ</sup>いていたけれど、仕方がないから、某大家の所へ持つて

行つて、筆を加えて貰つた上に、売つて迄貰つていた。其が為には都合上門人とも称していた。然うして一二年苦しんでいる中に、うちどうやら曲りなりにも一本立が出来ると、急に此前奥さんに断られた時の無念を想おも出して、夫からは根岸のお宅へも無沙汰ぶさたになつた。もう先生に余り用はない。先生は或は感情を害したかも知れないが、先生が感情を害したからつて、世間が一緒になつて感情を害しはすまいし……と思つたのではない、決して左様そんな軽薄な事は思わなかつたが、私の行為を後あとから見ると、詰り然う思つたと同然になつている。

先生には用が無くなつたが、文壇には用が有るから、私は広く交際した。大抵の雑誌には一人や二人の知己が出来た。こうして

交際を広くして置くと、私の作が出た時に、其知己が余り酷くは  
 評して呉れぬ。無論感服などする者は一人もない。私などに感服  
 しては見識に関わる。何かしら瑕疵きずを見付けて、其で自分の見識  
 を示した上で、しかし、まあ、かなりの作だと云う。褒ほめめる時には  
 屹きつと度然う云う。私は局量じやうりやうが狭いから、批評家等が誰たれも許しもせぬ  
 のに、作家よりも一段上座じやうざに坐り込んで、其処あやふやから曖昧な鑑  
 識で軽率に人の苦心の作を評して、此方の鑑定に間違いはない、  
 其通り思うて居れ、と言わぬばかりの高慢つらつきの面付しやくさわが癢かに触ふつて  
 耐たまらなかつたが、其を彼かれ此これ言いうと、局量じやうりやうが狭いと言われる。成  
 程其は事実だけれど、そう言われるのが厭いとだから、始終黙おこつて憤  
 つていた。其癖批評家の言う所で流行おもむの趨おもむく所を察して、勉めて

其に後れぬようにと心掛けていた……いや、心掛けていたのではない、其そん様な不見識な事は私の尤も擯斥ひんせきする所だったが、後あとから私の行為を見ると矢張やっぱり然う心掛けたと同然になっている。

## 四十八

久しばらく文壇を彷徨うろろうろしている中うちに、当り作が漸く一つ出来た。批評家等は筆を揃えて皆近年の佳作だと云う。私は書いた時には左程にも思わなかったが、然う言われて見ると、成程佳作だ。或は佳作以上で、傑作かも知れん。私は不断紛々たる世間の批評以外に超然かおつきとしている面色かおつきをしていて、実は非難けなされると、非常に

腹が立つて、少しでも褒められると、非常に嬉しかったのだ。

当り作が出てからは、黙つていても、雑誌社から頼みに来る、書肆しよしから頼みに来る。私は引張ひっぱりだこ風だ……トサ感じたので、なに、二三軒からの申込が一時いちよつとかさ一寸累かさなつたのに過ぎなかつた。

嬉しかつたので、調子に乗つて又書くと、又評判が好いい。斯うなると、世間の注目は私一身あつに叢あつまつているような気がして、何だか嬉しくて嬉しくて耐たまらないが、一方に於ては此評判を墜おとしては大変という心配も起つて来た。で、平生は眼中に置かぬらしく言つていた批判家等ひひようからに褒ほめられたいが一杯いはいよで、愈いよ文学に熱中して、明けても暮れても文学の事ばかり言い暮らし、眼中唯文学あるのみで、文学の外ほかには何物もなかつた。人生あつての文学ではなく

て、文学あつての人生のような心持で、文学界以外の人生には殆ど何の注意も払わなかつた。如何なる国家の大事が有つても、左程胸に響かなかつた代り、文壇で鼠がゴトリというと、大地震の如く其を感じて騒ぎ立てた。之を又真摯しんしの態度だとかいつて感服する同臭味どうしゅうみの人が広い世間には無いでもなかつたので、私は老人がお宗旨に凝るいよいよように、愈文学に凝固こりかたまつて、政治が何だ、其日送りの遣繰やりくりしごと仕事じやないか？ 文学は人間の永久の仕事だ。吾々は其高尚な永久の仕事に従う天の選民だと、其日を離れて永久が別に有りでもするよな事を言つて、傲然として一世を睥へいげ睨いしていた。

文学上では私は写実主義を執とつていた。それも研究の結果写実

主義を是<sup>ぜ</sup>として写実主義を執<sup>とつ</sup>たのではなくて、私の性格では勢い写実主義に傾かざるを得なかつたのだ。

写実主義については一<sup>ちよつと</sup>寸今の自然主義に近い見解を持って、此<sup>こん</sup>様な事を言つていた。

写実主義は現実を如実に描写するものではない。如実に描写すれば写真になつて了う。現実の（真<sup>しん</sup>とは言わなかつた）真味を如実に描写するものである。詳しく言えば、作家のサブジエクチュイチー即ち主観に摂取し得た現実の真味を如実に再現するものである。

人生に目的ありや、帰趨ありや？ 其<sup>そん</sup>様な事は人間に分るものでない。智の力で人生の意義を掴<sup>つか</sup>まんとする者は狂せざれば、自

殺するに終る。唯人生の味なら、人間に味える。味つても味つても味い尽せぬ。又味わえば味わう程味が出る。旨い。苦中にも至味はある。其至味を味わい得ぬ時、人は自殺する。人生の味は無限だけれど、之を味わう人の能力には限りがある。

唯人は皆同じ様に人生の味を味わうとは言えぬ。能く料理を味わう者を料理通という。能く人生を味わう者を芸術家という。料理通は料理人でない如く、能く人生を味わう芸術家は能く人生を經理せんでも差支えはない。

道德は人生を經理するに必要なだろうけれど、人生の真味を味わう助にはならぬ。芸術と道德とは竟に没交渉である。

是が私の見解であつた。浅薄はさて置いて、此様な事を言つて、

始終言葉に転ぜられていたから、私は却て普通人よりも人生を觀得なかつたのである。

## 四十九

私の文学上の意見も大業だが、文学については先<sup>ま</sup>あ其<sup>そ</sup>様な他愛のない事を思つて、浮れる積<sup>つも</sup>りもなく浮れていた。で、私の意見のようになると、味<sup>あじ</sup>わ<sup>わ</sup>るるものは人生で、味わうものは作家の主觀であるから、作家の主觀の精粗に由て人生を味わう程度に深淺の別が生ずる。是<sup>こゝ</sup>に於て作家は如何<sup>どう</sup>しても其主觀を修養しなければならん事になる。

私は行々は大文豪になりたいが一生の願だから、大に人生に  
 触れて主観の修養をしなければならん。が、漠然人生に触れるの  
 主観を修養するのと言つてる中は、意味が能く分つていよう  
 も、愈実行する段になると、一寸まごつく。何から何如手を着  
 けて好いか分らない。政治や実業は人生の一現象でも有ろうけれ  
 ど、其様な物に大した味はない筈である。といつて教育でもない  
 し、文壇は始終触れているし、まあ、社会現象が一番面白そうだ。  
 面白いというのは其処に人生の味が濃かに味わわれる謂である。  
 社会現象の中でも就中男女の關係が最も面白そうだが、其面  
 白味を十分に味わおうとするには、自分で実験しなければならん。  
 それには一寸相手に困る。人の恋をするのを傍観するのは、宛

も人が天てん麩ぶら羅を喰つてるのを観て其味を想像するようなものではあるけれど、実験の出来ぬ中うちは傍観して満足するより外ほか仕方がない。が、新聞の記事では輪廓だけで内容が分らない。内容を知るには、恋する男女の間に割込んで、親しく其恋を觀察するに限るが、恋する男女が其処おっらに落こちても居ない。すると、当分まず恋の可ポツシビリチイ能を持って居る若い男女を觀察して満足して居なければならん。が、若い男を觀察したつて詰らない。若い男の心持なら、自分でも大抵分る。恋の可ポツシビリチイ能を持って居る若い女の觀察が当面の急務だ。と、こう考え詰めて見ると、私の人生研究は詰り若い女の研究に帰着する。

で、帰着点は分つたが、矢張実行が困難だ。若い女を研究する

といつて、往来に衝立<sup>つ</sup>つたつていて通る女に一々触れもされん。勢い私の手の届く所から研究に着手する外はない。が、私の手の届く所だと、まず下宿屋のお神さんや下女になる。下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてる。若いお神さんはうツかり触れると危険だ。剩<sup>あ</sup>す所は下女だが、下女ではどうも喰い足りない。忙がしそうにしている所を捉<sup>つか</sup>まえて、一つ二つ物を言うと、もう何番さんかでお手が鳴る。ヘーイと尻上りに大きな声で返事をして、跡をも閉めずにドタドタと座敷を駈出して行くのでは、余り没趣味だ。下女が没趣味だとすると、私の身分ではもう売<sup>ばい</sup>女<sup>じよ</sup>に触れて研究する外はないが、これも大<sup>おお</sup>店<sup>みせ</sup>は金が掛り過るから、小<sup>こ</sup>店<sup>みせ</sup>で満足しなければならん。が、小<sup>こ</sup>店<sup>みせ</sup>だと、相手が越後の国<sup>かんばら</sup>蒲原郡<sup>ごおり</sup>何<sup>なに</sup>にむ

村<sup>ら</sup>の産の鼻ひしやげか何かで、私<sup>わ</sup>等<sup>ら</sup>が国<sup>くに</sup>さきでと、未<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>国<sup>くに</sup>訛<sup>なまり</sup>が取れないのになる。往々にして下女にも劣る。尤も是は少し他に用事も有ったから、其用事を兼ねて私は絶えず触れていたが、どうしても、どう考えて見ても、是では喰い足らん。どうも素<sup>しろう</sup>人の面白<sup>と</sup>い女に撞<sup>ぶつ</sup>着<sup>か</sup>つて見たい。今なら直ぐ女学生という所だが、其時分は其<sup>そ</sup>様<sup>ん</sup>な者に容易に接近されなかつたから、私は非常に煩悶していた。

馬鹿なツ！ 其<sup>そ</sup>様<sup>ん</sup>な事を言つて、私は女房が欲しくなつたのだ。

人生の研究というような高尚な事でも、私なぞの手に掛ると、詰り若い女に撞着<sup>ぶつ</sup>りたいなぞという愚劣な事になつて了う。普通の人なら青年の中<sup>うち</sup>は愚を意識して随分愚な真似もしようけれど、私は其を意識しなかつた。矢張<sup>やっぱ</sup>私共でなければ出来ぬ高尚な事のように思つて、切<sup>しきり</sup>に若い女に撞着<sup>ぶつ</sup>りたがっている中<sup>うち</sup>に、望む所の若い女が遂に向うから来て撞着<sup>ぶつ</sup>つた。

それは小石川の伝通<sup>でんづう</sup>院脇の下宿に居る時であつた。此下宿は体裁は余り好くなかつたが、それでも所<sup>いわゆる</sup>謂<sup>い</sup>高等下宿で、学生は大学生が一人だつたか、二人だつたか、居たかと思う。余<sup>あと</sup>は皆小官吏や下級の会社員ばかりで、皆朝から弁当を持って出懸<sup>で</sup>けて、午後は四時過でなければ帰つて来ぬ<sup>れんじゆう</sup>中<sup>うち</sup>だから昼の中は家内

が寂然とする程静かだった。

私は此家で一番上等にしてある二階の八畳の部屋を占領していた。なに、一番上等といつても、元来下宿屋に建てた家だから、建前は粗末なもので、動もすると障子が乾反つて開閉に困難するような安普請ではあつたが、形の如く床の間もあつて、年中鉄舟先生やら誰やらの半折物が掛けてあつて、花活に花の絶えたことがない……という結構らしいが、其代り真夏にも寒菊が活てあつたりする。造花なのだ。これは他の部屋も大同小異だったが、唯た一つ他の部屋にはなくて、此部屋ばかりにある、謂わば此部屋の特徴を成す物があつた。それは姿見で、唐草模様の浮出した紫檀匱の縁の、対うと四角な面も長方形になる、

勸工場かんこうば仕込しこの安物ではあつたけれど、兎も角も是が上等室の標シムボール象うやうやとして恭しく床の間に据えてあつた。下にもまだ八畳が一ひ間とまあつたが、其処には姿見がなかつた。同じような部屋でありながら、間代が其処より此処の方が三割方高かつたのは、半分は此姿見の為だつたかとも思われる。

部屋は此通り余り好くはなかつたが、取得とりえは南向で、冬暖かであつた。夏涼しかつた。其に一番はずれ尽頭の部屋で階はしご子段ごだんにも遠かつたから、た他の客が通り掛りに横目で部屋の中を睨にらんで行く憂いはなかつた。も一つ好い事は——部屋の事ではないが、此家このうちは下宿料の取立が寛大だつた。亭主は居るか居ないか分らんような人で、お神さくりまわん一人で繰廻くりまわしているようだったが、快活で、腹の大きい人で、

少し居いな馴染なじんだ者には、一月二月下宿料が滞とどつても、宜しゅうございます、御都合の好いい時で、といつてビリビリしない。収入の不定な私には是が何よりだったから、私は二年越こ此家このうちに下宿して居た。

或日朝から出て昼過に帰ると、帳場に看慣みなれぬ女が居る。後うしろ向むきだつたから、顔は分らなかつたが、根下ねさりの銀杏いちようがえ返しで、黒縮緬くろちりめんだか何だかの小さな紋の附いた羽織を着て、ベタリと坐つてる後姿が何となく好かつたが、私がお神さんと物を言つてる間、其女は振向いても見ないで、黙つて彼方向あちらいて烟草たばこを喫すつていた。

部屋へ来る跡から下女が火を持って来たから、捉つかまえて聞くと、

今朝殆ど私と入いりちが違ちがいに尋ねて来たのだそうで、何でもお神さんの身寄だとかで、車で手荷物なぞも持って来たから、地方の人らしいと云う。唯それぎり其切で、下女の事だから要領を得ない。

「如何どんな女にだい？」

「あら、今御覧なすつたじや有りませんか？」

「後うしろむ向むきで分わらなかつた。」

「別べつ品びんですよ」、といつて下女は莞爾にこにこ々々にしている。

「丸顔かい？」

「いいえ、細ほそ面おもてでね……」

「色どは如何どんなだい？ 白しろいかい？」

下女は黙もくつて私の面かおを見ていたが、

「大層お気が揉めますのね。何なら、もう一遍下へ行つて見ていらしつたら……」

誰にでも翻弄ほんろうされると、途方に暮れる私だから、拗よんどころなく苦笑にやりとして黙つて了うと、下女は高たか笑わらいして出て行つて了た。

五十一

臆やがて夕飯時ゆうめしどきになつた。部屋々々へ膳を運ぶ忙がしそうな足音が廊下に轟かしまいて、何番さんがお急ぎですよ、なぞと二階から金切声かしまで聒わめしく喚いそぎく中を、バタバタと急あし足あしに二人ばかり来る女の

足音が私の部屋の前で止ると、

「此方こっちが一番さんで、夫それから二番さん三番さんと順になるンです  
から何卒どうぞ……」

というのは聞慣れた小女ちびの声で、然う言棄てて例の通り端手はしたな  
くバタバタと引返ひっかえして行く。

と、跡に残った一人が障子の外うずくに蹲うずくまった気配けはいで、スルスルと  
障子あが開いたから、見ると、彼あのおんな女あのおんなだ、彼あのおんな女あのおんなに違ちがいない。

私は急いで余所を向いて了よつたから、能よくは、分わらなかつたが、  
何でも下女の話の通り細ほそ面おもてで、蒼白あざい、淋かしい面おもて相ちの、好いい

女おんなだ……と思おもつた。年頃としごろは二十五六……それとも七か……いや、  
八か……女の歳は私には薩張さつぱり分わらない。もう羽織つむぎはなしで、紬つむぎだ

か銘仙だか、夫とも更もっと好いい物だか、其も薩張さつぱり分りなかつたが、何なにしても半襟なまの掛かつた柔なか物で、前まえ垂だれを締しめて居いたようだった。障子しょうじを明あけると、上目かみめでチラと私わたしの面かおを見て、一寸ちよつと手を突ついて辞儀しぎをしてから、障子しょうじの影かげの膳ぜんを取とり上あげて、臆おそした体ていもなくスルスルと内うちへ入いつて来て、「どうもお待まちせ申ましまして」、といいいながら、狼狽まごまごして居いる私わたしの前まへへ据すえた手先てまへを見ると、華奢きゃしゃな蒼白そうはくい手で、薬指やくさきに燦きらと光あつて居いたのは本物ほんぶつのゴールド、リングと見た。まさかめめッきき正可まさか鍍金めっきじゃ有あるまい、飯櫃めしびつも運はり込こんでから、

「お湯お湯はござございますか知しら。」

と火鉢やかんの葉ちよつと罐とを一ちよつと寸取ちよつとつて見て、

「まだ御座ごいますようですね。じゃ、お後あとにしまししよう。御緩ごゆつく

りと……」

と会釈して、スツと起つた所を見ると、スラリとした後姿うしろつき

だ。ああ、好い風ふうだ、と思つている中に、もう部屋を出て了つて、

一寸小腰ちよつとを屈かがめて、跡を閉めて、バタバタと廊下を行く。

別段異かわつた事もない。小娘でないから、少しは物慣れた処もある

つたろうが、其は当あたりまえ然なだ。風ふうに一寸垢あかぬけ脱だのした処が有つ

たかも知れぬが、夫それとても浮気男の眼を惹ひく位の価値で大した女

ではなかつたのに、私は非常に感服して了つた。尤も私の不断接

している女は、厭にお澄しだったり、厭なれなれに馴なれなれしかつたりして、

一見して如何にも安ッぽい女ばかりだつたから、然ういのを看み

慣なれた眼には少しは異ちがつて見えたには違ちがいない。

何物だろうと考えて見たが、分らない。或は黒人くろうと上りかとも思つてみたが、下町育ちは山の手の人とは違う。此処のお神さんも下町育ちだと云う。そういえば、何処か様子に似た処もある。或は下町育ちかも知れぬとも思つた。

素性は分らないが、兎に角面白そうな女だから、此様こんなのを味わつたら、女の真味が分るかも知れん。今に膳を下げに来たら、今度こそは勇気を振起して物を言つて見よう、私のように黙つて居ては、何時迄いつまで経つても接近は出来ん、なぞと思つて居ると、隣室で女の笑い声がする。下女の声ではない。今のに違いない。隣の俗物め、もう捉つかまえて戯じやうだん言でも言つてると見える。

## 五十二

其晩膳を下げに来るかと心待に待つていたら、其には下女が来て、女は顔を見せなかつた。翌朝よくあさは女が膳を運んで来たが、卒いざとなる何となく気き怯おそれがして、今は忙いそしそうだから、昼の手隙てすきの時にしよう、という気になる。で、言うべき文句迄こしら拵へえて、掻くようにして昼を待つていと、昼が来て、成程てす手隙きだから、他ほかの者は遊あそんでいて小女ちびが膳を運んで来る。

三四日経たつた。いつも女の助すけるのは朝晩の忙いそがしい時ときだけで、昼は顔も出さない。考かんえて見ると、奉公人でないから其筈はずだが、私は失望した。顔は度々合あせるから漸しく分わつたが、能よく見ると、

雀斑そばかすが有つて、生際はえぎわに少し難が有る。髪も更少もすこし濃かつたらと思われたが、併し何となく締りのあるキリツとした面相かおだちで、私は矢張やっぱりい好いと思つた。名はお糸といつてお神さんの姪だとか云う。皆下女からの復聞またぎきだ。

何とかして一日も早く接近したいが、如何どうも顔を合せると、物が言えなくなる。昼間廊下で行逢つた時など、女は小腰を屈かがめて会釈するような、せんような、曖昧な態度で摺脱すりぬけて行く。其様そんな時に接近したがつてる事は色にも出さずに、ヒヨイと、軽く、些ちつと話に入らツしやい、とか何とか言つたら、最終しまいには来るようになるかも知れんとは思ふけれど、然う思ふばかりで、私の口は重たくて、ヒヨイと、軽く、其様そんな事が言えない。

度々面かおを合せても物を言わんから、段々何だか妙に隔てが出来て来て、改めて物を言うのが最う変になつて来る。此分だと、余よ程ツほど何か変つた事が、例えば、火事とか大地震とかがあつて、人心の常軌を逸する場合でないと、隔ての関を破つて接近されなくなりそうだ。ああ、初て部屋へ来た時、何故私は物を言わなかつたろうと、千せん悔かい万ばん悔かい、それこそ臍ほぞを噬かむけれど、追付おっつかない。然るに、私は接近が出来ないで此こん様なに煩悶しているのに、隣の俗物は苦もなく日増しに女に親しむ様子で、物を言い交かわす五分間がいつか十分二十分になる。何だか知らんが、睦まじそうに密々ひそひそ話わしているような事もある。一度なんぞ女に脊中を叩かれて俗物にこにこが莞爾にこにこ々々している所を見懸けた。私は気が気でない……

藻掻いていると、確か女が来てから一週間目だったかと思う、朝からのビシヨビシヨ降りぶが昼過ても未だ止まない事があつた。

鬱陶敷うつとうしくで、気が滅入つて、幾ら書いても思う様に書けないから、私はホツとして、頭を抱えて、仰向あおもむきに倒れて茫然としていたが、

「早く如何どうかせんと不好いかん！」

と判然はつきりと独言ひとりごとをいつて起反おきかえつた。独言ひとりごとは小説に關

係した事ではないので、女の事なので。

すると、余り遠くでない、去迎さりとて近くでもない何処かで、ポツ

ンポツンと意気な音ねがする。隣の家で能く琴を浚さらっているが、三味線みせんを弾ひいてた事はない。それに隣にしては近過ぎる。家うちには弾

く者は無い筈だが……と耳を澄していると、聴やがて歌い出す声は如ど

何しても家だ。例のに違いない。

私は起上つてブラリと廊下へ出た。

## 五十三

廊下へ出て耳を澄して見たが、三味線は聞えても、矢張歌が能く聞えない。が、愈例のに違いないから、私は意を決して裏梯子を降りて、大廻りをして、窃そり台所近くへ来て見ると、誰も居ない。皆其隣の家うちの者の住居すまいにしてある座敷かたに塊かたまっているらしい。好い塩梅あんばいだと、私は椽側たたずに佇立たたずんで、庭を眺めている風で、歌に耳を傾かたぶけていた。

好い声だ。たツぷりと余裕のある声ではないが、透徹すきとおるよう  
 に清い、何処かに冷たい処のあるような、というと水のようだが、  
 水のように淡くはない、シンミリとした何とも言えぬ旨味うまみのある  
 声だ。力を入れると、凜りんと響く。脱ぬくと、スウと細く、果は藕はすの  
 糸のようになつて、此世を離れて暗い無限へ消えて行きそうにな  
 る時の儂はかなさ便りなさは、聴いている身も一緒たまたに消えて行きそうで、  
 早く何とかして貰いたいような、もうもう耐たまらぬ心持になると、  
 消えかけた声が又急に盛返して来て、遂にパツと明るみへ出たよ  
 うな気丈夫な声になる。好い声だ。節廻たくみしも巧だが、声を転がす  
 処に何とも言えぬ妙味がある。ズツと張揚げた声を急に落して、  
 一転二転三転と急転して、何かを潜つて来たように、パツと又浮う

きあが

上るその面白きは……なぞと生意気をいうけれど、一体新内しんないをやつてるのだから、清元きよもとをやつてるのだから、私は夢中だった。

ぞつきよく

俗曲ぞつきよくは分らない。が、分らなくても、私は大好きだ。新内

でも、清元でも、上手の歌うのを聴いていると、何だか斯う国民の精粹とでもいうような物が、髻髯ほうふつとして意気な声や微妙な節

廻しの上に躡あらわれて、吾心の底に潜む何かに触れて、何かが想い

出されて、何とも言えぬ懐かしい心持になる。私は之を日本国民

の二千年來此生を味うて得た所のものが、間接の思想の形式に由らず、直ただちに人の肉声に乗つて、無形の儘で人心こころに來り逼せまるのだと

か言つて、分명한事を不分明にして其処に深い意味を認めていたから、今お糸さんの歌うのを聴いても、何だか其様そんなように思わ

れて、人生の粹すいな味や意気な味がお糸さんの声に乗って、私の耳から心に染しみこ込んで、生命の髓みづに触れて、全存在ぜんを撼ゆるがされるような気がする。

お糸さんの顔は椽側からは見えないけれど屹きつと度少しボツと上気して、薄目を開あいて、恍惚として我か人かの境を迷いつつ、歌っているに違ちがいがない。所謂いわゆる神しん来らいの興うちが中に動いて、歌うつつに現ぬを脱ぬかしているのは歌う声に魂たまの入いっているので分る。恐らくもう側そばでお糸さんや下女の聴きいてることも忘れているだろう。お糸さんは最もう人間のお糸さんでない。人間のお糸さんは何処どこへか行いって、了しまって、体ていに俗曲の精霊せいりやうが宿とどまっている、而そしてお糸さんの美音みおんを透とおして直接ちかに人間と交渉こうしょうしている。お糸さんは今俗曲の巫女いぢこであ

る、薩<sup>シヤマン</sup>満である。平生のお糸さんは知らず、此瞬間のお糸さんはお糸さん以上である、いや、人間以上で神に近い人である。

斯う思うと、時としては斯うして人間を離れて芸術の神境に出<sup>し</sup>入<sup>り</sup>し得るお糸さんは尋常<sup>ただ</sup>の人間でないように思われる。お糸さんの人と為りは知らないが、歌に於て三味線に於てお糸さんは確に一個の芸術家である、事に寄ると、芸術家と自覚せぬ芸術家である。要するに、俗物でない。

私も不肖ながら芸術家の端<sup>はし</sup>くれと信ずる。お糸さんの人となりは知らないでも、芸術家の心は唯芸術家のみ能<sup>よ</sup>く之を知る。此下宿に客多しと雖も、能<sup>よ</sup>くお糸さんを知る者は私の外にあるまい。私の心を解し得る者も、お糸さんの外には無い筈である……と思

うと、まだ碌に物を言た事もないお糸さんだけれど、何だかお糸さんが生れぬ前さきからの友のように思われて、私は……ああ、私は……

## 五十四

私の下宿ではいつも朝あさめし飯が済んで下宿人が皆出払った跡で、  
ゆっ緩くり掃除や雑巾掛ぞうきんかけをする事になっていた。お糸さんは奉公人でないから雑巾掛ぞうきんかけには関係しなかつたが、掃除だけは手伝つていたので、いつも其時分になると、お掃除致しましょうと言つては私の部屋へ来る。私は内ないない々其を心待にしていて、来ると急い

で部屋を出て椽側を彷徨く。彷徨きながら、見ぬ振をして横目で  
 チヨイチヨイ見ていると、お糸さんが赤い襷たすきに白地の手拭あねさを姉  
 様冠まかぶりという甲斐々々しい出立いでたちで、私の机や本箱へパタパタ  
はたきと払塵を掛けている。其を此方こつちから見て居ると、お糸さんが何だ  
 か斯う私の何かのような気がして、嬉しくなつて、斯うした処も  
 悪くないなと思う。

ところが、お糸さんが三味線さみせんを弾ひいた翌朝あくるあさの事であつた。万事  
 が常ふてまわよりも不手廻りふてまわりで、掃除にもいつも来るお糸さんが来ないで、  
 小女ちびが代りに来たから、私は不平に思つて、如何どうしたのだと詰なじる  
 ようにいうと、今日はお竹どんが病気で寝ているので、受持うけもちなん  
 ぞの事を言つていられないのだと云う。其なら仕方が無いような

ものだけれど、小女ちびのは掃除するのじゃなくて、埃ほこりをほだてて行くのだから、私が叱り付けてやったら、小女ちびは何だか沸ぶつ々ぶつ言いつて出て行いつた。

暫くして用を達たしに行いこうと思おもつて、ヒョイと私が部屋を出ると、何時いつ来たのか、お糸さんがツイ其処で、着物の裾をクルツと捲まくつた下から、華美はでな長襦袢だか腰巻だかを出し掛けて、倒さかさになつて切せつ々せつと雑巾掛ぞうきんがけをしていた。私の足音に振向いて、お邪魔様といつて、身を開いて通して呉れて、お糸さんは何とも思つていぬ様だったが、私は何だか氣の毒らしくて、急いで二階を降りて了しまつた。

用を達たしてから出て来て見ると、手水鉢ちようずばちに水が無い。小女ちびは

居ないかと視廻みまわす向うへお糸さんが、もう雑巾掛ぞうきんかけも済んだのか、バケツを提げてやって来たが、ト見ると、直ぐ気が附いて、

「おや、そうだッけ……只今直ぐ持つて参りますよ。」

と駈出して行つて、台所から手桶を提げて来て、

「お待遠様。」

とザツと水を覆あける時、何処の部屋から仕掛けたベルだか、帳場で気短けたたまに消魂けたましくチリリリリンと鳴る。

お神さんが台所から面かおを出して、

「誰も居ないのかい？ 十番さんで先刻さつきからお呼よなさるじやないか。」

「へい、只今……」

とお糸さんが矢張<sup>やっぱり</sup>下女並の返事をして、

「お三どん新参で大狼<sup>おおまごつき</sup>狼<sup>つぎ</sup>……」

と私の面<sup>かお</sup>を見て微笑<sup>にっこり</sup>しながら、一寸滑稽<sup>ちよいとおどけ</sup>た手附をしたが、其儘<sup>しよていくず</sup>所<sup>ところ</sup>体崩<sup>たいくずれ</sup>して駈出<sup>おもてはしご</sup>して、表梯子<sup>おもてはしご</sup>をトントントンと上<sup>あが</sup>つて行く。私が手を洗<sup>たすき</sup>つて二階<sup>あが</sup>へ上<sup>あが</sup>つて見たら、お糸さんは既<sup>も</sup>う裾<sup>おろ</sup>を卸<sup>おろ</sup>したり、襷<sup>たすき</sup>を外<sup>たすき</sup>したりして、整然<sup>ちやん</sup>とした常<sup>なり</sup>の姿<sup>なり</sup>になつて、突当<sup>つた</sup>りの部屋の前<sup>まへ</sup>で膝<sup>ひざ</sup>を突<sup>つ</sup>いて、何か用<sup>よう</sup>を聴<sup>き</sup>いていた。

私は部屋へ帰<sup>かへ</sup>つて来て感服<sup>かんぷく</sup>して了<sup>しま</sup>つた。お糸さんは歌<sup>うた</sup>が旨<sup>うまい</sup>い、三味線<sup>さんまいせん</sup>も旨<sup>うまい</sup>い、女<sup>おんな</sup>ながらも立派<sup>りつぱ</sup>な一個<sup>いっぺん</sup>の芸術家<sup>げいじゆつか</sup>だ。その芸術家<sup>げいじゆつか</sup>が今日は如何<sup>どう</sup>だろう？ お竹<sup>おたけ</sup>が病氣<sup>びやうき</sup>なら仕方<sup>しかた</sup>がないようなもの、全<sup>まる</sup>で下女<sup>げによ</sup>同様に追使<sup>おしつか</sup>われている。下女<sup>げによ</sup>同様に追使<sup>おしつか</sup>われて、慣<sup>な</sup>れぬ

雑巾掛ぞうきんかけまでさせられた上に、無理な小言を言われても、格別厭かおな面かおもせず、何とか言つたツけ？ 然う然う、お三どん新参で  
 おおまごつき 大狼おおまごつき狼おおまごつきといつて微笑にっこり……偉い！ 余よつぽど程よつぽど氣の練れた者でなければ、  
 如あ彼あは行かぬ。これがお竹でも有ろうものなら、直ぐ見たくつらでもない面つらを膨ふくらして、沸ぶつぶつ々々口小言を言う所だ。それを常じょう  
 談だんごと事ごとにして了つて、お三どん新参で大狼おおまごつき狼おおまごつきといつて微笑にっこり……  
 ……偉い！

## 五十五

感服の余り、私は何とかして此自覚せぬ芸術家に敬意を表した

と思ったが、併し奉公人同様に金など包んでは出されない、何  
 でも品物を呈するに限ると、何故だか独りで極めて掛つて、慘澹  
 たる苦心の末、雪江一代の智慧を絞り尽して、其翌日の昼過ぎ  
 本郷の一友人を尋ねて、嘘八百を陳べ立て、其細君を誘かして半  
 襟を二掛見立てて買つて来て貰つた。値段の処も私にしては一  
 寸奮とはずんだ積つもりだった。

早く之をお糸さんに呈して其喜ぶ顔を見たいと、此処らは未来  
 の大文豪も俗物と余り違ちがわぬ心持になつて、何だか切しきりに嬉しが  
 つて、莞爾にこにこしして下宿へ帰つたのは丁度夕飯ゆうはん時分じぶんだったが、火を  
 持つて来たのは小女ちび、膳を運んで来たのはお竹どんで、お糸さん  
 は笑声が余所の部屋でするけれど、顔も見せない、私は何となく

本意ほんいなかつた。

待侘まちびて独りで焦じれていると、廳やがて目差すお糸さんが膳を下げに来たから、此処こゝぞと思つて、極きまりが悪かつたが、思切つて例の品を呈ました。大おおに喜ぶかと思いの外、お糸さんは左さして色を動かさず、軽く礼を言つて、一寸ちよつと包みを戴いて、膳と一緒に持つて行つて了つた。唯其切それぎりで、何だか余り飽氣あつけなかつた。

何時間経たつたか、久しばらくすると、部屋の障子がスツと開あいた。振向いて見ると、思いがけずお糸さんが入口に蹲うずくまつて、両手を突さつき、先刻さつぎの礼を又言つてお辞儀をする。私は何となく嬉しかつた。お床を延べましようかというから、敷とつて呉れというと、例の通り戸棚から夜具を出す時、昨夜ゆうべも今朝も手に掛けて知つて

いる筈の枕まくらがわ皮かわの汚よごに始めて気が附ついて、明日あした洗あいませうと  
いう。なに、洗濯屋せんたくやに出すから好いいと言いつても、此こ様な物ものを洗あう  
のは雑ぞう作さくもないといつて聴きかなかつた。私は又また嬉うれしくなつて、此こ  
様な事ことなら最もつと早く敬意けいぎを表あらわすれば好いかつたと思おもつた。

お糸いとさんは床とこを敷とつて了しまうと、火鉢ひばちの側そばへ膝ひざ行いり寄よつて火かを直ただ  
しながら、

「本ほん当とに嚙さ御ご不自由ふじゆうでございませうねえ、皆みんな氣きの附つかない者ものば  
かりの寄より合あいなんですから。どうぞ何なになりと御遠慮ごえんりょなく仰おつ有しやつ  
て下さいまし。然しかう申ましちや何なにですけど、他ほかのお客きやく様さまは随分ずいぶんツケ  
ツケお小言せうごんを仰おつしやいますけど、一番いちばんさん（私わたしの事ことだ）は御遠慮ごえんりょ  
深くツて何なににも仰おつしやらないから、ああいうお客きやく様さまは余計よけい氣きを附つ

けて上げなきや不好<sup>いけな</sup>。本<sup>ほん</sup>当<sup>と</sup>にお客<sup>きやく</sup>様<sup>さま</sup>が皆<sup>みな</sup>一<sup>いっ</sup>番<sup>ぱん</sup>さん<sup>さん</sup>のようだと、下宿<sup>しゆく</sup>屋<sup>や</sup>も如何<sup>どん</sup>様<sup>な</sup>に助<sup>すけ</sup>かるか知<sup>し</sup>れないツてね、始<sup>しよ</sup>終<sup>ちゆう</sup>下<sup>か</sup>でもお尊<sup>そん</sup>を申<sup>まを</sup>して居<sup>お</sup>るンでございますよ……」

無論<sup>むろん</sup>半襟<sup>はんせき</sup>二掛<sup>にかけ</sup>の効<sup>き</sup>能<sup>にめ</sup>とは迂<sup>う</sup>濶<sup>かつ</sup>の私<sup>わが</sup>にも知<sup>し</sup>れた。平生<sup>へいせい</sup>の私<sup>わが</sup>の主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>から言<sup>い</sup>え、お糸<sup>いと</sup>さん<sup>さん</sup>は卑<sup>ひ</sup>劣<sup>りゃく</sup>だと謂<sup>い</sup>わなければならんのに、何<sup>なに</sup>故<sup>ごと</sup>だか私<sup>わが</sup>は左<sup>さ</sup>程<sup>てい</sup>にも思<sup>おも</sup>わな<sup>い</sup>で、唯<sup>ただ</sup>お糸<sup>いと</sup>さん<sup>さん</sup>の媚<sup>こ</sup>び<sup>び</sup>て呉<sup>く</sup>れるのが嬉<sup>うれ</sup>し<sup>し</sup>かつた。

小<sup>ち</sup>女<sup>よめ</sup>がバタバタと駈<sup>か</sup>けて来<sup>き</sup>て、卒<sup>い</sup>然<sup>き</sup>障<sup>しやう</sup>子<sup>し</sup>をガ<sup>が</sup>ラ<sup>ら</sup>ツと開<sup>あ</sup>けて、  
「あの八<sup>やち</sup>番<sup>ぱん</sup>さん<sup>さん</sup>で、御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>が済<sup>す</sup>んだら、お糸<sup>いと</sup>さん<sup>さん</sup>に入<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ツしや<sup>い</sup>ッ  
て。」

「何<sup>なに</sup>だ<sup>だ</sup>い？」

小女ちびが生意気になけ無しの鼻を指して、

「これ……」

「そう。」

お糸さんは挨拶もそこそこ々に私の部屋を出て行つたが、ツイ其処らで立止つた様子で、

「今お帰り？ 大変御緩りごゆつくでしたね。」

歸つて来たのは隣の俗物らしく、其声で何だか言うと、又お糸さんの声で、

「あら、本当？ほんと 本当ほんとに買つて来て下すつたの？ まあ、嬉しい

こと！ だから、貴方あなたは実じつが有るツていうんだよ……」

してみると、お糸さんむかに對つて敬意を表するのは私ばかりでな

いと見える。

## 五十六

私がお糸さんに接近する目的は人生研究の為で、表面上性慾問題とは関係はなかつた。が、お糸さんも活物いきもの、私も死んだ思想に捉われていたけれど、矢張活物やっぱりいきものだ。活物同志いきものが活きた世界で顔を合せば、直ぐ其処に人生の諸要素が相あ轢れしてハズミという物を生ずる。即ち勢いきおいだ。此勢いきおいを制する人でなければ、人間一足の通用が出来ぬけれど、私の様な斗やくざ筈もの輩になると、直ぐ其勢いきおいに制せられて了つて、吾は吾の吾ではなくなつて、勢いきおいの自由に

なる吾、<sup>いきおい</sup>勢の吾になつて了う。困つたものだが、仕方がない。私は人生研究の為お糸さんに接近しようと思つただけれど、接近しようとする、忽ち妙なハメになつて、二番さんだの八番さんだのという番号附けになつてゐる俗物共の競争圈内に不覚捲込まれて了つた。又捲込まれざるを得ないのは、半襟二掛ばかりの効能<sup>ききめ</sup>じや三日と持たない。直消えて又元の木阿弥になる。二掛の半襟は惜しくはないが、もう斯うなると、<sup>いきおい</sup>勢に乗せられた吾が承知せぬ。<sup>やつき</sup>憤然となつて二日二晩も考えた末、又一策を案じ出して、今度は昼のお糸さんの手隙の時に、何とか好<sup>いかげん</sup>加減な口実を設けて酒を命じた。酒を命ずればお糸さんが持つて来る、お糸さんが持つて来れば、<sup>ちつ</sup>些との間ならお酌もして呉れる、お糸さんのお酌で、

酒を飲んで酔えば、私にだつて些ちつとは思ふ事も言えて打解うちとけられる。思ふ事を言つて打解うちとけけて如何どうする氣だつたか、それは不分明だつたけれども、兎に角打解うちとけたかつたので、酒を命じたら、果してお糸さんが来て呉れて、思ふ通りになつた。

「じゃ、何ですね」と未だ一本も明けぬ中うちから、私は真紅まっかになつて、「貴女あなたは一杯喰わされたのだ。」

「大喰おおくわされ！」とお糸さんは烟管きせるを火鉢かどの角でポンと叩いて、

まさかにようぼこ

「正可まさか女房子にようぼこの有る人た思いませんでしたもの。好加減いいかげんなチ

ヤラツポコを真まに受けて、仙台くんまだり迄引張り出されて、独身ひとり

でない事が知れた時にや、如何様どんなに口惜くやしかつたでしょう。寧いっそ

其時ちま帰ちまツ了ちまや好かつたんですけれど、帰ちまつて来たつて、家うちが有るン

じや有りませんしさ、人の厄やつかい介いになつて苦勞する位なら、日陰者でもまだ其方が勝ましかと思つたもんですからね、馬鹿さねえ、貴あ方なた、言いなり次第になつて半はんとし歳とも然うして居たんですよ。そうすると、私あたしの事がいつかお神さんに知れて、死ぬいきの生いきるのという騒さわぎが起つてみると、元々養子の事だから……」

「養子なんですか？」

「ええ、養子なんですとも。養子だから、ほら、私あたしを棄あてなきや、看みす看みす何万という身台を棒に振らなきやならんでしよう？ ですから、出るの引くのと揉め返した拳句が、詰とる所私あたしはお金で如どうにでもなると見括みくびつたんでしよう、人を入れて別わかればなし話なを持出しだすから、私あたしやもう踏ふんだり蹶けたりの目に逢あわされて、口惜くやしくツ

て口惜しくツて、何だかもうカツと逆上せツ了つて、本当に一時は井戸川へでも飛込んだ了おうかと思ひましたよ。」

「御尤です。」

「ですけど私が死んじまや、幸手屋の血統は絶えるでしょう？」

それでは御先祖様にも、又ね、死んだ親達にも濟まないと思つて、無分別は出しませんでしたけど、余まり口惜しかったから、お金も出そうと言つたのを、そんなお金なんぞに目をくれるお糸さんじゃない何か言つて、タンカを切つてね、一文も貰わずに、頭のものなんか売飛ばして、其を持つて帰つて来たは好かつたけど、其代り今じゃスツテンテンで、髪結錢も伯母さん濟みませんがという始末ですのさ。余程馬鹿ですわねえ。」

「いや。面白い氣象だ。」

「ですから、<sup>あたし</sup>私は、<sup>あなた</sup>貴方の前ですけど、もうもう男は懲々<sup>こりこり</sup>。そりやあね、<sup>たま</sup>稀には旦那のような優しい親切なお方も有りますけど、<sup>あたし</sup>どうせ私のような者<sup>もん</sup>の相手になる者ですもの、<sup>みんな</sup>皆其様な薄情な碌でなしばかりですわ。」

「いや、<sup>ごもつと</sup>御尤もです。」

「まあ、自分の勝手なお饒舌<sup>しゃべり</sup>ばかりしていて、お爛<sup>かん</sup>が全然<sup>すつかりさ</sup>冷め了<sup>ちや</sup>つた。一寸<sup>ちよつと</sup>直して参りましょう。」

「<sup>ごもつと</sup>御尤もです……」

お糸さんがお爛かんを直しに起たつた隙ひまに、爰ここで一寸ちよつと国元の事情を

吹ふい聴ちよう

して置く。嘗て私が学校を除籍せられた時、父が学資の

仕送りを絶つたのは、斯こうもしたら或は歸つて来るかと思つたから

だ。ところが、私が如何どうにか斯うにか取とり続つづいて歸らなかつたの

で、両親は独ひとり息むすこ子を玉たまなしにしたように歎なげいて、父の白髪しらがも其

時分僅あいだの間に滅めつ切きり殖ふえたと云う。伯父が見兼ねて、態わざ々わざ上京

して、もう小説家になるなどは言わぬ、唯是非一度歸省して両親

の心を安めろと懇ねんに諭ごころして呉れた。そう言われて見ると、夫それでも

とも言兼ねて、私は其時伯父に連れられて久振で歸省したが、父

の面かおを見るより、心配を掛けた詫どころをする所か、卒いきなり然なり先なりず文学の

貴い所以たつとゆえんを説いて聴かせて、私は墮落したのじやない、文学に於  
 て向上の一路を看出みいだしたのだ、墮落なんぞと思われては心外だと  
 喰つて懸ると、氣の練れた父は敢て逆さからわずに、昔者むかしものの己おれには  
 然ういう六むすかしい事は分らぬから、己おれはもう何にも言わぬ、お前  
 の思う通りにしろだが、東京へ出てから二年許りの間あいだつかに遣つた金  
 は、地所を抵当に入れて借りた金だ。己おれは無学で働あきがないから、  
 己おれの手では到底とても返せない。何とかしてお前おれの手で償却の道を立たて  
 て呉れ。之を償却せん時には、先祖の遺産を人手に渡さねばなら  
 ぬ。それではどうもお位牌おれに対しても済まぬから、己おれは始しよつちゆう終う  
 其が苦になつての……と眼しばだたを瞬かれた時には、私も妙な心持がし  
 た。で、何にも当あてはなかつたけれど、其それしき式の負債は直じき償却し

て見せるように広言を吐き、月々なし崩しの金額をも極めて再び  
出京したが、出京して見ると、物価騰貴に付き下宿料は上る、小  
遣も余計に入る、負債償却の約束は不知空約束になつて了つた。  
その稍実行の緒に就いたのは当り作が出来てからで、夫からは原  
稿料の手に入る度に多少の送金はしていたけれど、夫とても残ら  
ず負債の方へ入れて了うので、少しも家計の足しにはならなかつ  
た。父は疾うに県庁の方も罷められて、其後一寸学校の事務員  
のような事もしていたが、それも直き又罷められて全く収入の道  
が絶えたので、父も母も近頃は心細さの余り、遂に内職に觀世  
擲を擲り出したと云う。私は其頃新進作家で多少売出した頃だ  
つたから、急に気が大きくなり、それに天性の見栄坊も手伝つて、

やつぱり  
 矢張某大家のように、仮令襟垢たといえりあかの附いた物にもせよ、兎に角羽  
 織も着物も対ついでの飛白かすりの銘仙物で、縮緬ちりめんの兵児帯へこおびをグルグル巻に  
 し、左程さほど悪くもない眼に金縁眼鏡きんぶちめがねを掛け、原稿料を手に入れた  
 時だけ、急に下宿の飯を不味まずがって、晩飯には近所の西洋料理店レストーラント  
 へ行き、髭の先に麦酒ビヤーの泡を着けて、万丈の気きえんを吐いていたの  
 だから、両親が内職に觀世かんぜ撚よりを撚よるといふ手紙を覽みた時には、  
 又一寸ちよつと妙な心持がした。若し此事が夫かの六号活字子の耳に入つ  
 て、雪江せつこうの親達は觀世かんぜ撚よりを撚よつてるそうだ、一寸珍ちよつとちんだね、  
 なぞと素破すっぱぬ抜かれては余り名誉でない、名誉心も手伝つて、急  
 に始末しまつき氣を出し、夫それからは原稿料が手に入ると、直ぐ多少余分の  
 送金もして、他ほかの物を撚よつても、觀世かんぜ撚よりだけは撚よつて呉れるな

と言つて遣つた。

で、此時もつい二三日前に聊かばかり原稿料が入つた。先月は都合が悪くて送金しなかつたから、責めて此内十円だけは送ろうと、紙入の奥に別に紙に包んで入れて置いたのが、お糸さんの事や何や角やに取紛れてまだ其儘になっている。それをお糸さんの身上話を聴くと、ふと想い出して、国への送金は此次に延期し、寧そ之をお糸さんに呈して又敬意を表そうかと思つた。が、何だか其では聊か相済まぬような気もして何となく躊躇せられる一方で、矢張何だか切に……こう……敬意を表したくて耐らない。で、お糸さんが臆てお爛を直して持つて来て、さ、旦那、お熱い所を、と徳利の口を向けた時だつた、私は到頭耐らなくなつて、しかし

何故だか節儉して、十円の半額金五円也を呈して、不覺又敬意を表して了った。

五十八

お糸さんに敬意を表して見ると、もう半端はんぱになつたから、国への送金は見合せていると、母から催促の手紙そのうちが来た。其中そのうちに何だか父の加減が悪くて医者いしやに掛つてかかるとかで、物入が多くて困るとかいうような事も書いてあつたが、例の愚痴ぐちだと思つて、其内に都合して送ると返事を出して置いた。其時は真しんに其積りあながで強ち気休めではなかつたのだが、彼此かれこれ取とり紛まぎれて不覺ついで其儘になつ

ている一方では、五円の金は半襟二掛より効能ききめがあつて、夫それ以来  
お糸さんが非常に優待して呉れるが嬉しい。追々なしみ馴染も重なつて  
常じょうだん談の一つも言うようになる。もう少しで如何どうにかなりそう  
に思えるけれど、何時いつまでた迄経つても如何どうにもならんので、少し焦じれ  
出して、又欲しそうな物を買つて遣やつたり、連出つれだして甘い物うまを食  
べさせたり、種いろいろ々々してみたが、矢張やっぱり同じ事で手が出せない。お  
糸さんという人は滅多に手を出せば、屹度きつとひど甚い恥を搔かすけれど、  
一度手に入れたら、命懸けになる女だと、何故だか私は独りで極き  
めていたから、危けん険で手が出せなかつたが、傍はたから観れば、も  
う余程妙に見えたと見えて、他たの客はワイワイいつて騒ぐ。下女  
迄が私の部屋を覗込んでお糸さんが見えないと、奥おく様は、なぞ

といつて調戲かつかうようになる。こうなると、お神さんも目に余つて、或時何だか厭な事をお糸さんに言つたとかで、お糸さんが憤おこつていた事もある。私は何だか面白いような焦心じれったいような妙な心持がする。それで夢中になつて金ばかり遣つかつていたから、一度申訊に聊いささかばかり送金した限ぎりで、不覺つひ国へは無沙汰になつている中うちに、父の病気が矢張やっぱり好くないとて母からは又送金を求めて来る。遂に伯父からも注意が来た。其時だけは私も少し気が附いて、急いで書掛けた小説を書上げて若なにがし干かの原稿料を受取つたから、明日あすは早速送金しようと思つていた晩に、お糸さんが切りしきに新富座しんとみざの当り狂言うわさの噂うわさをして観たそんな事を言う。と、私も何だか觀せてやり度たくなつて、芝居だつて観ようによつては幾何いくら掛るもんかと、

不覚口を滑らせると、お糸さんが例になく大層喜んだ。お糸さんは何を貰つても、澄して礼を言つて、其場では左程嬉しそうな面もせぬ女だったが、此時ばかりは余程嬉しかったと見えて、大層喜んだ。

もう後悔しても取反しが附かなくなつて、止むことを得ず好加減な口実を設けて別々に内を出て、新富座を見物した其夜の事。お糸さんを一足先へ還し、私一人後から漫然と下宿へ歸つたのは、夜の彼此十二時近くであつたらう。もう雨戸を引寄せて、入口の大ランプも消してあつた。跡仕舞をしていゝお竹が睡た。そんな声でお歸んなさいと言つたが、お糸さんの姿は見えなかつた。

部屋へ来てみると、ランプを細くして既<sup>も</sup>う床も敷<sup>と</sup>つてある。私は柵<sup>ます</sup>でお糸さんと膝を列べている時から、妙に氣が燥<sup>いら</sup>つて、今夜こそは日頃の望をと、芝居も碌に身に染<sup>し</sup>みなかつた。時々ふと氣が變つて、此<sup>こ</sup>んな女に關係しては結果が面白くあるまいと危<sup>あ</sup>ぶむ。其<sup>その</sup>側から直ぐ又今夜こそは是が非でもという氣になる。で、今我部屋へ来て床の敷<sup>と</sup>つてあるのを見ると、もう氣も坐<sup>そ</sup>ろになつて、余<sup>よ</sup>の事なぞは考えられん。今にも屹<sup>きつ</sup>度来るに違<sup>ちが</sup>ひない、来たら：…と其事ばかりを考えながら、急いで寝<sup>ね</sup>衣<sup>まき</sup>に着<sup>き</sup>易<sup>か</sup>えて床へ入ろうとして、ふと机の上を見ると、手紙が載せてある。手に取つて見ると、国からの手紙だ。心は狂つていても、流<sup>さ</sup>石<sup>すが</sup>に父の事は氣になるから、手早く封を切つて讀むと、まず驚いた。

## 五十九

此手紙で見ると、大した事ではないと思つていた父の病氣は其の後甚だ宜しくない。まだ医者が見放したのでは無いけれど、自分は最う到底も直らぬと覚悟して、切りに私に会いたがつているそうだ。此手紙御覽次第直様御帰国待入申候と母の手で狼ろた狽えた文ぶん体ていだ。

私は孝行だの何だのという事を、道学先生の世迷言よまいごとのように思つて、鼻で遇あらつていた男だが、不思議な事には、此時此手紙を讀んで吃驚びっくりすると同時に、今夜こそはと奮いきり立つていた氣が

忽ち萎なえて、父ちちは母はが切しきりに懐かしく、何なにだか泣なきたいような気き持もになつて、儘ままになるなら直すぐにも発たちたかかつたが、ここうなると当あた惑ごするのは、今日けふの観劇くわんげきの費用ひようぎんが思おもつたよよりも嵩かさんで、元もとより幾いくくもなかつた懐中くわちゆうが甚しだ軽かろくなつていいる事ことだ。父ちちが病やま氣がに掛かつてから、度々たびたび送金せうぎんを迫おられても、不つ覚い怠おつていたのだから、家うちの都合ごうごも嘸さぞ悪わるかろう。今いま度どこそは多少たうしやうの金かねを持もつて歸かへららんでは、如何いかに親おや子この間までも、母ははに對たいしても面めん目ぼくない。といいつて、お糸いとさんさんに迷まよつてから、散々さんざん無理無理を仕し尽つくした今日けふ此頃このころ、もう一も文もんの融ゆ通うずうの余あま地ちもなく、又また余あま裕ゆもない。明日あすの朝あさ二番にばんか三番さんばんで是非ぜいひ発たたなきやならんがと、当惑まなこの眼まなこを閉しじて床しじの中なかで凝じつと考かんえていいると、スウと音ねを偷ぬすんで障子しょうじを明あける者ものが有あるから、眼あを開あいて見み

ると、先刻迄待まちこが 憧こがれて今は忘れているお糸さんだ。窃そつと覗のぞ込こんで、小声で、「もうお休みなすつたの？」といいながら、中へ入いつて又窃そつと跡あとを閉しめたのは、十二時過あで遠慮するのだつたかも知れぬが、私は一寸ちよつと妙たに思おもつた。

「どうも有難うございました」、とのめるように私の床とこの側そばに坐まりながら、「好かつたわねえ」、と私と顔を看み合あわせて微にっこり笑わらひあつた。

今日は風呂呂日うつつだから、帰かえつてから湯へ入いつたと見えて、目立めだたぬ程ほどに薄うすりと化粧けわつてゐる。寝衣ねまきか何か、袷あわせに白地しろじの浴衣ゆかたを襲かきねたのを着きて、扱しごきをグルグル巻まにし、上に不断つづの羽織うづりをはおつていいる秩序しどけない姿なまも艶なまめかしくて、此人こゝろには調和うづりが好こい。

「一本頂戴よ」、といいながら、枕元の机の上の巻烟草まきたばこを取ろうとして、袂たもとを叩くわえて及および腰こしに手を伸ばす時、仰向あおむきに臥ねている私の眼の前に、雪を欺あざむく二の腕が近々と見えて、懐かしい女の香かが芬ぶんとする。

「何だかまだ芝居に居るような気がして相済まないけど」、とお糸おさんが煙草たばこを吸付けてフウと烟けむりを吹きながら、「伯母さんの小言せりふが台詞せりふに聞えたり何かして、如何どんなに可笑おかしいでしょう」、と微笑にっこりした所は、美しいというよりは、仇ツぽくて、男殺しというのは斯ういう人を謂うのかと思われた。

一つ二つ芝居の話をしてしていると、下のボンボン時計が肝かん癩しゃくを起したようにジリジリボンという。一時だ、一時を打つても、

お糸さんは一向平気で咽喉のどが乾かわくとかいって、私の湯呑で白湯さゆを

飲のんだり何かして落着おちいている所は、何だか私が如何どうかするのを

待まちつてるようにも思おもわれる。と、母の手紙で一時じな萎しなえた気が又振ふ

るいおこ

起おこつて、今朝からの今夜こそは即ち今が其時だと思おもうと、漫そ

ぞろぞろ

心こころになつて、「泊うちつてかないか？」と私が常じょうだん談だんらしくい

うと、「そうですね。家うちが遠方だから泊うちつてきましようか」と、

お糸さんも矢張やっぱりじょうだん常だん談だんらしく言いつたけれど、もう読よめた。卒いきな

然り手てを執とつて引寄ひきよせせると、お糸さんは引寄ひきよせられる儘ままに、私の

着きている夜着よるぎの上に凭もたれ懸かつて、「如何どうするのさ？」と、私の面かお

を見て笑わらっている……其時思おもい掛かけず「親おやが大病だのに……」と

いう事が、鳥影とりかげのように私の頭かぶを掠かすめると、急に何とも言いえぬ

厭な心持になつて、私は胸の痛むように顔を顰めたけれど、影になつて居たから分らなかつたのだろう、お糸さんは執られた手を窃そつと離して、「貴方は今夜は余程如何かしてらツしやるよ」と笑つていたが、私が何時迄経つても眼を瞑つているので、「本当にお眠いのお邪魔ですわねえ。どれ、もう行つて寐ましよう。お休みなさいまし」と、会釈して起上たちあがつた様子で、「灯火あかりを消してきますよ」という声と共に、ふツと火を吹く息の音がした。と、何物か私の面かおの上に覆かぶさつたようで、暖かな息が微かに頬に触れ、「憎らしいよ！」と笑を含んだ小声が耳元でするより早く、夜着の上に投出していた二の腕うでを痛いたか抓つかられた時、私はクラクラとして前後を忘れ、人間の道義ひつきよう畢ひつきよう 竟何物ぞと、嗚呼ああ父は大病

で死にかかつて居たのに……

## 六十

あくるあさはや  
翌朝は夙く発つ積だつたが、発てなくなつた。尾籠な事には自  
びろう  
ら尾籠な法則が有るから、既に一種の關係が成立つた以上は、女  
に多少の手当をして行かなきやならん——と、さ、私は思わざる  
を得なかつた。見栄坊だから、金が無くても金の有る風をして、  
紙入を叩いて遣つて了うと、もう汽車賃も残らない。なに、父は  
まだ危篤というのじゃなし、一時間や二時間発つのが後れたつて  
仔細は無かろうと、自分で勝手な理窟を付けて、女には内々で朝

から金策に歩いたが、出来なかつた。昼前に一寸下宿へ帰ると、留守に国から電報が着いていた。胸を轟かして、狼狽てて封を切つて見ると、「父危篤直戻れ」だ。之を読むと私はわなわなと震え出した。卒然下宿を飛出して、血眼になつて奔走して、辛うじて聊かの金を手に入れたから、下宿へも帰らず、其足で直ぐ東京を発つて、汽車の幾時間を藻掻き通して、国へ着いたのは其晩八時頃であつた。

ステーション  
停車場で車を僦つて家へ急ぐ途中も、何だか気が燥つて、何事も落着いて考えられなかつたが、片々の思想が頭の中で狂い廻る中でも、唯息のある中に一目父に逢いたい逢いたいと其ばかりを祈つていた。時々ふツと既う駄目だろうと思つと、錐でも刺

されたように、急に胸がキリキリと痛む。何とも言えず苦しい。馴染の町々を通つても、何処を如何車が走るのか分らない。唯車上で身を揉んで、無暗に車夫を急立てた。車夫が何だか腹を立てて言ったが、何を言っているのか、分らない。唯無暗に急立てるばかりだ。

漸くの想で家へ着くと、狼狽てて車を飛降りて、車賃も払つたか、払わなかつたか、卒然門内へ駆込んで格子戸を引明けると、パツと灯火が射して、其光の中に人影がチラチラと見え、家内は何だか取込んでいて話声が諫然と聞える中で、誰だか作さん——私の名だ——作さんが着いた、作さんが、と喚く。何処からか母が駈出して来たから、私が卒然、「阿父さんは？ ……」と

如何どうやら人の声のような皺しやがれ嗶ごえ声で聞くと、母は妙な面かおをしたが、  
「到頭いけなか不いけなか好いけなかつたよ……」というより早く泣き出した。私はハツ  
と思うと、気が遠くなつて、茫然として母が袖を顔に当て泣くあての  
を視ていたが、ふと何だか胸が一杯になつて泣こうとしたら、  
「まあ、彼方あつちへお出でなさい」と誰だか袖を引張るから、見る  
と従弟いとこだ。何処いどこへ何しに行くのだから、分つてゐるような、分つて  
いないような、変な塩あんばい梅いだった。私は何だか分つてゐる積つもりで、  
従弟いとこの跟あとに従ついて行くと、人が大勢車座になつてゐる明かるい座  
敷へ来た。と、急に私は何か母に聞きたい事が有るのを忘れてい  
たよな気持がして、母は如何どうしたろうと後うしろを振向く途端に、  
「おお作か」という声こゝろが俄にわかに寂然しんとなつた座敷うちの中に聞えたか

ら、又此方こつちを振向くと、其処に伯父が居るようだ。夫から私は其  
 処へ坐つて、何でも漫やたらに其処に居る人達に辞儀をしたようだった  
 が、其そのうち中に如何どういう訳だったか、伯父の側そばへ行く事になつて、  
 側そばへ行くと、伯父が「阿父おとうさんも到頭こんな此様になられた」、とい  
 いながら、側そばに臥ねている人の面かおに掛けた白い物を取除とりのけたから、見  
 ると、臥ねて居る人は父で、何だか目を瞑ねむっている。私は其そのかお面を  
 凝じつと視ていた。すると、何時いつの間にか母が側そばへ来ていて、泣声で、  
 「息を引取る迄ね、お前に逢いたがりなすつてね……」というの  
 が聞えた。私はふツと目が覚めた、目が覚めたような心持がした。  
 ああ、父は死んでいる……つい其処に死んでいる……骨と皮ばか  
 りの瘦果すくもてた其死顔しげんがつい目の前に見える。之を見ると、私は卒

然として、「ああ済すまなかつた……」と思つた。此刹那に理窟しりくはない、非凡も、平凡も、何も無い。文士という肩書の無い白地しろじの尋た常だの人間に戻り、ああ、済すまなかつた、という一念になり、我を忘れ、世間を忘れて、私は……私は遂に泣いた……

## 六十一

後で段々聞いて見ると、父は殆ど碌な療養もせずに死んだのだ。事情を知らん人は寿命だから仕方がないと言つて慰めて呉れたけれど、私には如何どうしても然う思えなかつた。全く私の不心得で、まだ三年や四年は生延びられる所をむぎむぎ殺して了つたように

思われてならなかつたから、深く年来としごろの不孝を悔いて、責せめて跡に残った母だけには最う苦勞を掛けたくないと思ひ、父の葬式を済せてから、母を奉じて上京して、東京で一戸こを成した。もう斯う心機が一転しては、彼あん様な女に關係している氣も無くなつたから、女とは金で手を切つて了つた。其時女の素性も始めて知つたが、当人の言う所は皆虚構でたらめだつた。しかし其そん様な事を爰こゝで言う必要もない。止やめて置く。

で、生来始やて稍真面目やになつて再び筆硯えんに親しもうとしたが、もう小説も何だか馬鹿らしくて些ちつとも書けない。泰西たいせいの名家の作を読んで見ても、矢張馬鹿らしい。此こ様な心持で碌な物が出る筈もないから、評判も段々落ちる、生活も困難になつて来る。

もう私もシユン外はずれだ。此処こゝらが思切り時だろうと思つて、或年意を決して文壇を去つて、人の周旋しゆせんで今の役所へ勤めるようになったが、其後母の希望そのごを容ゆるれて、妻さいを迎え、子を生ませると、間もなく母も父の跡を追つて彼世あのよへ逝いつた。

これが私の今日迄こんにちまでの経歴だ。

つくづく考えて見ると、夢のような一生だった。私は元來実感の人で、始終実感で心を苛いじめていないと空疎くそになる男だ。実感で試験をせんと自分の性質せいかくすら能く分よらぬ男だ。それなのに早くから文学ぶんがくに陥はまつて始終空想くうさうの中に漬つかつていたから、人間がふやけて、秩序たらしがなくなつて、真面目まじめになれなかつたのだ。今稍真面目ややまじめになれ得たと思うのは、全く父の死んだ時に経験した痛切な実感のお

庇<sup>かげ</sup>で、即ち亡父<sup>たまもの</sup>の賜だと思ふ。彼<sup>あの</sup>実感を経験しなかつたら、私は何処迄だらけて行つたか、分らない。

文学は一体如何<sup>どう</sup>いう物だか、私には分らない。人の噂で聞くと、どうやら空想を性命とするもののように思われる。文学上の作品に現われる自然や人生は、仮令<sup>たと</sup>えば作家が直接に人生に触れ自然に触れて実感し得た所にもせよ、空想で之を再現させるからは、本物でない。写し得て真に逼<sup>せま</sup>つても、本物でない。本物の影で、空想の分子を含む。之に接して得<sup>う</sup>る所の感じには何処にか遊びがある、即ち文学上の作品にはどうしても遊戯<sup>ゆうげぶんし</sup>分子を含む。現実の人生や自然に接したような切実な感じの得られんのは、当<sup>あたりまえ</sup>然<sup>だ</sup>だ。私が始終斯ういふ感じにばかり漬<sup>つか</sup>つていて、実感で心を引締めな





## 青空文庫情報

底本：「平凡・私は懷疑派だ 小説・翻訳・評論集成」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集 第一巻」筑摩書房

1984（昭和59）年11月

※底本には「本書は、『二葉亭四迷全集』第一、二、三、四、七卷（昭和五十九年十一月～平成三年十一月 筑摩書房刊）を底本として使用し、新漢字・新かなづかいにして、若干ふりがなを加えた。本文中に今日から見て不適切と思われる言葉づかいがある

が、作品の時代背景、文学的価値等を考え、著者が故人でもあるため、そのままとした。」との記載がある。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2003年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 平凡

## 二葉亭四迷

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>